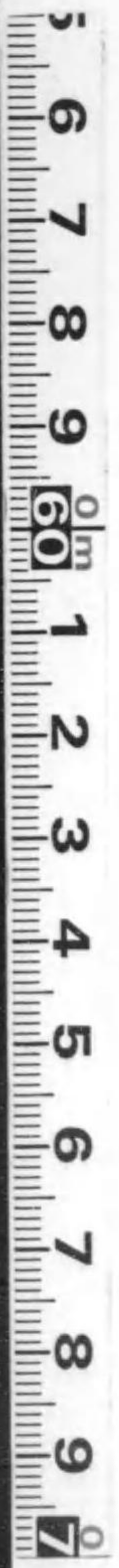


324  
397



始



新井石禪老師著

曹洞宗法話大全



東京 鴻盟社發行

大正  
3. 6. 6  
内交

はしがき

新井石禪老師錫を東西に飛ばして第一義を舉揚し席暖まるに違あらざるもその間筆硯三昧に入りて雜誌『道之枝折』に法話を稿し沓泥滯水法益を施さるゝこと多年積んで數十篇に至る今その中に於て主として年中法要に關するものを蒐集し道俗照心の龜鑑とし併せて教壇の指南とす章末附する所の「参考」は初學者の資料に供する予の婆心に過ぎず編輯校合に關しては老師の高示を待つ暇無く事全く予の專斷に出づ茲に記して老師の高想を仰ぎ併せて廣く之を讀者に告ぐ

大正三年初夏

峰玄光識

# 曹洞宗法話大全目次

一、新年禪話	一
一、新年頭の佛法。	
二、目出度き意義。	
三、有形の福と無形の福。	
四、金のなる木。	
五、有形の壽命と無形の壽命。	
六、その心を培養せよ。	
七、三心の教訓。	
二、七福神禪話	二三
一、禪と福德。	
二、壽命と福德。	
三、人望と清廉。	
四、愛と威光と大量。	
五、自己と福神。	
三、大般若會法話	四七
一、最大部の經典。	
二、般若の傳來。	
三、般若の大意。	
四、四枚の般若。	
五、祈禱の眞意義。	
六、智徳の總府。	
七、般若の功德。	
四、涅槃忌法話	六六
一、發菩提心。	
二、少欲。	
三、知足。	
四、遠離。	
五、精進。	
六、不念。	
七、禪定。	
八、智慧。	
九、不戲論。	
十、大人の修養。	

五、彼岸會禪話

一、彼岸會法要の必要。二、彼岸脚跟下にあり。三、信心と彼岸。

八九

六、彼岸會法話(六波羅蜜に就て)

一、佛教の目的。二、六波羅蜜の意義。三、六波羅蜜の意義。四、信念の涵養。五、彼岸廻きにあり。

一〇六

七、佛誕生會法話

一、釋尊の誕生。二、唯我獨尊の眞意義。

一二八

八、釋尊御一代記法話

一、信仰の目的。二、大聖の託胎。三、降魔。四、出家。五、降魔。六、成道。七、轉法輪。八、鶴林の遺訓。九、入涅槃。十、正傳の宗旨。

一四六

九、孟蘭盆禪話

一、盆の起原。二、追孝の本旨。三、道德の基礎。四、王法と佛法。五、禪心と禪機。六、最高の功德。七、孟蘭盆三昧。

一六八

十、追善の功德

一八八

十一、兩祖報恩忌法話

一、追善の本義。二、佛事の由來。三、皇國の美風。四、心靈の感應。五、絶大の道徳。

二〇九

十二、達磨忌法話

一、高祖の御畧歴。二、太祖の御略歴。三、兩祖の慈恩。四、報謝の正道。五、眞正の行持。六、感應道交。七、萬古の勝躅。

二三二

十三、成道會法話

一、達磨大師の御畧歴。二、不識の眞意義。三、四行の眞意義。一、降魔の威力。二、見明星悟道。三、眞理の光明。四、佛教の根本輪。五、修證の妙義。六、即心是佛。七、報謝の正道。

二四六

十四、家庭の佛教

一、家庭は國の要素。二、家庭の三綱。三、佛陀の聖訓。四、家庭道德の基礎。五、正しき信仰。六、家庭の模範。

二六五

十五、父母の心得

二八二

一、父母の本務。二、愛育と教養。三、佛陀の聖訓。四、真正の慈悲。五、興國の基礎。

十六、家憲……………三〇四

一、家憲製作の必要。二、社會改善の基礎。三、名家の家憲。四、家憲の例則。五、淨土の實現。

十七、佛教と青年……………三二七

一、國民の精華。二、青年の覺悟。三、修業の基礎。四、佛陀の慈訓。五、無我の大我。

十八、佛教と女子……………三四六

一、女子の位置。二、女子の天職。三、四行と六徳。四、大聖の慈訓。五、女子の尊嚴。

十九、禪の修養……………三六七

一、禪とは何ぞや。二、修養の基礎。三、修養の五階級。四、向上と向下。五、無我の靈機。六、先賢の芳蹤。七、大吉祥。

二十、昭憲皇太后奉悼會法話……………三九〇

一、最高最尊なる典範。二、珍瓏璧の如き御坤徳。三、深洪海の如き御仁徳。四、美妙華の如き御文徳。五、報恩の行持。



# 曹洞宗法話大全

新井石禪述

## 二、新年禪話

### 一、新年頭の佛法

此一日の身命は尊ぶべき身命なり、貴ぶべき形骸なり、此の行持あらん身心自らも愛すべし、自らも敬ふべし。(修證義第三十節の内)

新玉の年立ち返る最も目出度法の筵に於て、諸君と共に未來際を盡して朽つる事なき佛の教を御話するは此上も無き好因縁でございます、就ては私は禪僧の事なれば、禪の立場より新年頭の佛法を商量して見やうと思ひます。

昔し御開山承陽大師に或人が「如何なるか是れ新年頭の佛法」と問ふたことがある、新年頭の佛法といふは、佛教徒としての新年はどうかと云ふ問題です、其時御開山の御答が「各

各人體起居萬福」といふのであつた、是れは御一同様御目出たうと云ふ事です、左すれば新年の佛法と申しても別に不思議はない、唯だ御一同様明けまして御めてたうござると云ふことが出来れば、それが本當の佛法の現はれたのであります、尤も誰も彼も新年の御慶には必ず御目出たうと云ふて御祝ひ申すに極つて居る様なものぢや、が扱實際に御目出度ござると云ふことが出来ませうか能々考へて見ると凡夫世界の常とは申し乍ら、正月の元日から無常の風の吹かぬ間とても無く、心の園には菩提の花開けがたく、教の庭には煩惱の霜結び易く、一寸でも油断をすれば忽ちにして罪惡の門を開き四苦八苦の爲めに惱まされて、三界六道輪廻の業を招きたがつてならぬ、彼の一休和尚の詠みしと云ふ歌の如く、

「門松は冥土の旅の一里塚めてたくもありめてたくもなし」て一面御目出たいと云ふて御祝ひをする其の裏には、甚だ以て目出たからぬ惡魔が潜伏して居るのであります、此の惡魔を稱して煩惱とも迷とも邪見とも申すのであります、而して此の煩惱の住家はドコに在るかと思ふに「恐ろしき地獄の鬼を尋ねれば邪見の人の心にぞすむ」ぢや、「火の車造くる大工は無けれども己が造りて己が乗り行く」とは、全く一面の眞理を道破して居る様に思はるゝ、されば御互は能々己が心を慎みて、佛様に對しても神様に對しても天子様に對し

ても親先祖に對しても、永久に御めてたうござります、と、キツパリと言はれる丈の根據を作つて置かねばなりませぬぢや。

## 二、目出度き意義

然らば眞に目出度とはドウ云ふ事かと云ふに、古人が、「年々是れ好年日々是れ好日」と云はれた様に、此の一日を空ふすることなく、此の一日を利用し善用して、最も價値のある一日たらしめ最も勝れたる功德を具ふる一日たらしむるのが、本當のめてたき新年であるのである、況てや古語に「一日の計は鶏明にあり、一月の計は朔日にあり、一年の計は元旦にあり、一生の計は幼年にあり」とある如く、新年の第一日は正しく年の始、月の始めにして實に「元旦は大晦日のはじめかな」ぢや、此の始をして「元日や又うか／＼のはじめかな」たらしめ取りも直さず一年の不幸を自ら招く様なものです、之れに反して此の始を慎みて獨り一年の計を定むるのみならず、更に進んで生々世々の大安心をも決定することを得ば、眞に是れ一身の幸、一家の幸、一國の幸とも申すべきぢや、御開山の御示に、「この一日は惜むべき重寶なり、尺璧の價値に擬すべからず、驪珠にかふることなし、古



賢惜むこと身命よりもすぎたり、靜に憶ふべし、驪珠はもとめつべし、尺璧は得ることもあるべし、一生の百歳のうちの一日は一度失なはん復びうる事なからん」とあるは、洵に忘るべからざる好箇の御教訓ではありませんか、凡そ世の人々が新年を祝ふのは其の目的は福壽の二つにあるのであらうと思ふ、ツマリ福は内鬼は外千歳かはらぬ壽をもてうるはしき家庭をば彌が上にも莊嚴せんとするは人情自然の希望です、佛教と雖も決して人生に反し人情に逆ふ教でない事は、苟も指を佛教に染むる者の齊く心得て居る所である、唯だ福壽その物の見方と取扱と之れを求むる所以の道が異なるのであります。

### 三、有形の福と無形の福

凡そ何事にも有形と無形との二つがある、乃ち肉體と精神と、事相と理想との二つがある、先づ福分の上から申しても、巨萬の貨を積みて身は金殿玉閣の中に住し、山海の珍味に飽きて意に適ふた眷屬を有する人の如きは、有形の福分に富みたる者であります、之れに反して身は陋巷に住し、口に飢食を喫し、出づるに車なく入るに室なしといふ境界たりとも、其の精神に忠實の志を抱き、勤儉の徳を蓄へ、恭儉己れを持し、博愛衆に及ぼし、克く忠

に克く孝に維れ信維れ義、以て一世の師表となり、萬代の模範ともなる人であつたならば、縦ひ身貧にして家破れたりと雖も、精神上の福分に於て最も豊富なるものと云はねばならぬ、彼の平清盛の如きは、位人臣を極め望として達せざるは無く、有形的福分は遺憾なく備へた様ぢやが、惜い哉、無形の福分は全くゼロであつたのである、又菅原道真公の如きは一身の私を棄てて志を君國に盡されたるにも拘はらず、身に振りかゝる濡衣を乾す由もなく、筑紫の深山に謫せられ、恩賜の御衣に空しく涙を洒ぎ、秋思の詩篇に獨り腸を斷ち、「海ならずたゞよう水の底までも清き心は月ぞ照さん」と詠まれたる甲斐もなく、月の光を映すに及ばずして遂に淨妙寺畔の露となり玉ふたが、公が精神上的の福分は、上は一天萬乗の君をも感動し奉り、下は徳光を四海に敷き、天満大自在天神の尊靈は海内到處に祭祀せられざるは無い、是れ全く無形の福分に富ませられたからであります、清盛と菅公とを並べて引例とするは少しく事實が極端過ぎる様ではあるが諸君は何方を以て眞の幸福なる人と思召されまするか、拙僧は決して有形の福をツマラヌものぢやと云ふのでは無い、併し本末輕重を顛倒する様なことがあつては濟みませぬ、人間に肉體と精神との二つを有して居る以上は、福分の上にも必ず二通りの備が無ければならぬ、然るに世の中の様を見

渡しますると、精神上の福分を二の次ぎとして徒らに物質的幸福にのみ力癩を入れて居る人が多い、是れは丁度昔公の門を去つて清盛の子分となる様なものです、社會風紀の頹廢、人類道徳の衰退は多くは是れより生ずるのである、古よりして眞の偉人とも稱せらるゝ程の人は、必ず先づ精神上の福分を積み、而して後に物質的幸福を期待せられた様である、乃ち無形の福を本とせられたのである。

#### 四、金のなる木

徳川家康が或時「金のなる木」といふを示されたことがある、それは幹を三本にして、上が「よろづほどよ木」、中は「しやうじ木」、下は「じひふかき木」と書かれた、すると其の席に細川幽齋が居つて幹のみでは物足らぬ心地がするといふて左右に四本宛の枝を書き添へました、右の四本は「あさを木」「いさぎよ木」「しんぼうづよ木」「ゆだんな木」、左の四本は「かせ木」「ついへな木」「よう生よ木」「家内むづまし木」といふのであつた、家康公は手を打て興じ玉ひ、君臣相俱に一日の歡を盡されたといふ話がある、此の金のなる木が内に芽出てこそ家をも富まし國をも盛んならしむることが出来るのであります、禪門に於て

は達磨大師より九代の祖師薬山禪師の處に或僧が「如何なるか是れ道中の至寶」と問ふた、道中と云ふは道徳とも宗教とも見ることが出来る、乃ち道徳の中に一番大切なるもの宗教信仰中の一番大切なる寶は何にかと問ふたのである、薬山禪師は「莫謔曲」乃ち謔曲すること莫れと答へられた、謔はへツラヒと云ふ字で外形の眞實ならざる事、曲はマガルて内心の眞實ならざることである、故に莫謔曲とは眞實なれとの御示であります、唯だ此の眞實の二字實に是れ道徳の根底、宗教の源泉にして、又實に幸福の基礎です、正直の頭に神宿り眞實の心に佛も感應します、縦ひ萬卷の書を読み巨萬の財を蓄ふるとも、眞實の二字が無ければ浮べる雲よりも果敢なき人と云はねばならぬ、道徳問答と云へる書物の中に八幡宮の託宣と云へる御文が出て居る、其の御文に「衆生の心不善なる時は神明を祈り求むといふとも其心に宿る事なし、直き心にして正しき時は祈らざれども我れ常に其頂にうつり居て守らん」とあります、又元祿時代に於ける曹洞宗の高僧天桂禪師は蓋世の偉人であつた、蜂須賀侯の家老稻田性鐵居士の爲めに佛の一字を書し之れに、「ほとけとは誰が結びけむ白糸の賤のをだまきくりかへしみよ」といへる歌を添へて與へられ、又自分を嘲ける人のありける時笑ひ乍ら「まゝよやれ住めばこそあれ難波江のよしといふともあしとい

ふとも」の歌を詠まれ、世の毀譽褒貶に貪着せず断々乎として己れの信ずる道を実行せられた方であつて其の道を守るに深切なることは實に百代の模範とも謂つべき行持を示され、あつたされば知見の高邁なる天下の善知識をも罵倒して一步も枉げられなんだ程である、或る時の如きは侍者が沸立つた湯を地上に濁ぐを見て、地上には多くの蟻子が居る、之れを殺さんこと不便なり、宜しく冷水を加へて濁ぐを洗い、仰せられたさうである、此の天柱禪師が尋常門弟に對しての御誠めが「汝等一切事實上須く實頭なるべし、凡そ世の中の事に對して眞實なるものは佛法に對しても眞實なるべし、佛法に眞實ならぬものは世間の法にも不實なるものぞ」といふのであつたと申すこととす、禪師の船唄といふが頗る面白い、それはこう云うのです、「あれはいづくの船じややら、生死無常の大海に、風に任せて乗出す、四大の板をかりあつめ、出入の息のかりの釘、心一つの帆柱に、眼耳鼻等の六枚帆、帆を十分に引上げて、まともに行くはよけれども、ちと傾けて開くのが、舟の乗手の上手さよ、表揖取揖ゆるすまじ、いづれの方とあてもなく、灘を知らざる船頭は、覺束なくも思はるる、曠患の浪の立つ時は、早く碇をさるすべし、放逸懈怠の透間より、貪欲水の垢入らば、中の實は皆すたる、信心つよきまきはたを、つよくさめこむものならば、遂に淺

に入りぬべし」といふのである、此の面白き唄の中に慈悲の涙の湛ゆる程の教訓が籠つて居ります、御互も此身此儘信仰と精進との力に依りて菩提の彼岸に達し、本性の智慧道徳を發揮し運用して自利利他圓滿の功徳を増進するのが、此上もなき幸福と申すものであります。

### 五、有形の壽命と無形の壽命

次に壽命の上にも有形と無形との二通りがあります、人間僅か五十年とか、人生七十古來稀れなりとか申すのは、肉體の生命をいふのであるからツマリ有形の命です、それから名を後世に揚げ徳を萬代に垂る杯といふて、其の肉體は此世をさりても、其人の功績とか事業とか、千秋萬歳の後に至りても曾て滅せず、益々其徳が輝き渡つて幾千萬の人々を冥々名間に感化するの類は即ち無形の生命と云ふべきである、古來の忠臣義士偉人傑士として楠正成公は四十三歳の時の戦死であるが、其の忠魂義魄は長へに湊川神社となりて萬人の祭祀を享けさせられて居る、小楠公正行の死は二十三歳である、楠公が功臣の第一と稱せ

し菊地武時の死は四十二歳、源顯家公は二十一歳、安政六年十月二十七日に、「身はたとひ武藏の野邊に朽ちるともとゞめ置かまし大和魂」と詠じて刑場の露と消えたる、幕末の偉人吉田松陰先生は二十九歳に過ぎぬ、同じ年に「まかる身は君が代思ふ真心の深からざりししるしなるなん」と詠じて同じく刑場の露と消えたる頼三樹三郎は三十五歳ぢや、北條時頼公は三十七年の命なるも、古今の大賢にして能く鎌倉の盛運を致し、元寇を歴殺したる絶代の英傑北條時宗公は三十四歳の早世ぢやが、其偉大なる功勳は盡未來際常在不滅である、此等は正しく無形の壽命です、人間の價値は此無形の命を得るのにあるのぢや、よしや百年千年の壽を保てばとて、道德の命がなかつたならば、實にツマらぬものと云はねばならぬ、修證義第三十節の御文にも「徒らに百歳生けらんは恨むべき日月なり、悲しむべき形骸なり」とあるではありませんか、近世の高僧と云はれし越後の國の良寛和尚は、今の三島郡の國上の山中に五合庵といへる庵室を結んで居られた、一日に五合の米さへあれば其外には別に望みがないといふので五合庵と名けたそうです、或時一人の老人が尋ねて来て、私は本年八十歳になります、だがモウ少し生きて居たいと思ひますが、無常の風は時を嫌はぬ世の習で、何卒和尚様の御祈禱を頂きて間違なく長命したいと思ふて、御願

ひに上りましたと申しければ、和尚は扱々御身は好い處へ御氣がつかれた、御望みに任せ保險づきの長命の御祈禱を致して上げやう、全體御身は何つまで生きて居たいといふのでありますぞと尋ねられたれば、老人は頭をかき、さればイクツ迄生きて宜いかドウも夫れ迄は考へがつかないがいかゞてありませうせめて百歳迄の御祈禱が願はれませうか、和尚は最も真面目に、扱々御身は欲の少き人かな、然らば百歳生きれば十分で百一歳となつたなら正月の元日に死んでも苦しうは御座らぬかと云はれけるに、老人大に驚きイヤ百歳迄とは願ひましたものの百一歳ならば死んでも宜いとは願ひませぬ、和尚カラと打笑ひソレでは御身の云ふ事に嘘がある、ギリ／＼決着の望みはどうぢや、ハイ此上の壽命を願ひまして、大事なければ成らば三百位迄の御注文が出来ませうか、和尚はニッコリと打微笑、鶴さへ千年の命を保ち龜さへ萬年の壽を有すとやら、萬物の靈長たる人間として三百年で澤山とは餘りに小さき望ならずや、いつそ死なぬと云ふ御祈禱をしてはいかぢや、元來佛様の御教は死なぬ御祈禱が目的であるぞよとて、諄々として佛教の大精神を説き示されたと云ふ御話があります、なんと面白い因縁ではありませんか、「百年を祈る人こそはかなけれ元より死なぬ心ある身に」生死は一時の因縁に依りて現はれたる、假りの相ぢ

や、其本體は生ぜず滅せず垢かす淨からず増さず減らず、千古萬古一絲毫の變動も無い、かゝる寶を持ち乍ら徒らに生に迷ひ死に迷ひ、唯だ目前の慾望に惑されて玉かけ乍ら飢渴の苦みを招いて居るのが我等凡夫の有様ぢや。

六、その心を培養せよ。

サア斯様に我等御互の本心本性を覺了して、量りなき壽を具へ道德上の財産を有したならば、其功德の及ぶ所自ら有形の福分も得られ肉體上の長命をも保たるゝこととなるもので、或人が一休禪師に目出度事を書いて下されと頼みければ、好々と云ひ乍ら、「佛家に在住すれば戒めを以て本とし三寶の海に入れば信を以て本とす身死して岩根に在りては骨もまた淨し」と書し、此外に目出度事はあらずと仰せられたとある、して見れば正月の元日から無暗と酒を飲み矢鱈に遊び暮して目出度さの御祝ひを門松や雑煮餅にのみ靠かけてはなりません、新年の第一日に於てチャンと精神の落着を定め道德の根を深くし信仰の帯を固め、永久不滅の幸福と萬世無窮の壽命とを備ふる様に致されたいものであります、或處の乗合船で一人の虛無僧が徒然の餘り「尺八の竹にかはりは無けれども一つは穴のくり方に

に依る」と詠じければ傍に塗師職人が居て「輪島なるうるしにかはりは無けれども一つは質のくり方による」と詠んだ、すると一人の出家があつて、「極樂の道にかはりは無けれども一つは珠數のくり方による」とやつたといふ話がある、何でも目出度も目出度ないも心のくり方一つである、ツツて賛題に讀み上げたる修證義の御文には「此の一日の身命は尊ぶべき身命なり、貴ぶべき形骸なり」と仰せられた、苟も道に叶ひ徳に契ふことを得んには、我身ながらも粗末にするな大切にせよやと御示し下されたのであります、是の如く福壽の根本に培かはらずして徒らに福壽の原因を心の外に求むる様では何の役にも立ちませぬ、或處に御幣擔ぎの阿爺があつた、元日の朝家内中を集めて祝詞の交換を致さうとして不圖床の間を見ると鏡餅の側に何やら眞黒な物がある、ハテなと思ふて能く見れば、下女が昨夜掃除をした時置き忘れた雑巾であつた、サア大變擔ぎ屋の阿爺俄かに機嫌を損じ、扱々縁起でもない事ではある、此様な事が元日にあるやうでは今年の事も思ひやらるゝとて、丸て災難にでも逢ふたやうに鬱ぎ込てしまふたぢや、處へ或る狂歌師が來て之を聞き、それは御目出度い前兆です、私が御祝ひ申上げやうとて「雑巾をあて字で書けば藏と金、あちらふくくこちらふくく」とやつた、すると阿爺は大喜びをしてア、目出度い來年

からは元日ごとに鏡餅と雑巾とを床の間に飾ろうかと申したと云ふ話しがある、一時の氣轉とは云ひ乍ら、雑巾位で氣が塞いだり喜んで祝ふたりするやうな事では、決して眞の福壽を得ることは出来ませぬ、之れに就て御開山は三心といへる御示がある。

### 七、三心の教訓

その三心とは第一に喜心、乃ち常に歡喜の念に住すべきこと、二に老心、乃ち老人が子孫を愛するが如く中心より同情の念を以て他人を憐れみ人を愛すべきこと、三には大心、是れが禪門の安心です、大きな心と云て俗にいふ氣が大きいとか根性が太いとかいふことではない、御開山は自ら注脚を下されて、「其心を大山にし其心を大海にせよ」と仰せられてある、大山とは山の動かざる如く萬境の爲めに心を動かさざる事ぢや、御互も先づ一定不動の志を立て、御正月の元日から其志を守り事鐵石の如くにして、青黄赤白の色眼に映ずるも曾て束縛せらるゝ事無く、絲竹管絃の聲耳を侵すも曾て染汚せず、所謂富貴も淫するること能はず、貧賤も撓ますこと能はず、威武も屈すること能はざる底の大志操を有するのが大山の境界です、併し不動地に住するのみにては向上の死漢と云てマダ一隻眼を欠く

事を免れぬ、更に大海の百川を容るゝ如き博大なる寛容の精神を養ひ、一切の衆生は皆な我が親なり兄弟なり同胞なり親友なりといふ程の雅量と愛情とを備へねばならぬ、退ては山の如くにして動かず進ては海の如くにして能く物を容る、是が眞の大心の人といふのである、此大心を得るには坐禪に依るを以て捷徑の第一となすのである、今日は學問の點に於ては日進月歩で一般の知識は益々發達して止まぬといふ有様である、ダガ人間といふものは知識一方で完全なる人格を作る事は難いものである、智的教育と同時に情操を調ひ意志を鍛錬する事が大切である、尤も一心の根底には知情意の三者に劃然たる區別は無いものであるからして、知識の奥底に達すれば情意も從つて之れに伴なふて一致するには相違ないが、入口の學問はサウはいかぬ、利口になつた爲め却て人情に背き倫理に悖る者が澤山ある、政治家の賄賂沙汰、商業道德の不振、迷信の増加、女徳の頹廢は云はずもがな、十八や十九の學生などが種々様々なる不良の行爲を敢てするなどは實に言語道斷の有様です、此際此時に於ける風紀の革新、精神の訓育、公德の發達等は我國焦眉の急務です、幸に目度新年を迎へたる我等御互は、山河觀を改むると同時に思想上にも一大進歩の跡を示し、精神道德の幸福を得るを以て主眼とし、善根功德を培養して無窮の壽命を具へ、此

身此儘神の御心にも契ひ佛の御徳をも有する様に心懸るこそ佛教信者たるべき我國民の一大事因縁であります。

抑も我が宗は實踐道德を以て行持の中心を爲すの教である、道德といふても世の所謂道德とは多少趣を異にして居る、乃ち知識の根底を盡し慈悲の源泉を穿ち、智徳併せ具ふるを道德といふのである其道德を具體的に示されたのが十六條の佛戒ぢや、此の戒を受け奉れば即身に三世諸佛の御仲間入りです、故に至心に無始劫來の罪障を懺悔して受戒入位の身の上となり、衆生利益の誓願を發して四恩報謝の行持を全ふし、以て本證妙修圓滿具足の境界となりぬることこそ、佛教の目的、賢聖の本懐です、併し其本證妙修といふも坐禪の上の功徳に名けたもので、畢竟して禪戒一如であります、我等は幸にして受け難き人間の身を受け然も大正昭代の御世に遇ひ奉り、取分け佛祖單傳の妙法をば見もし聞きもし行なひもすることの出来るといふは如何に目度果報てはありませんか、此果報をば深く自ら愛し敬みて千代に入千代に幸福多き新年を迎へて、眞實に此めてたさを相續するやうに致したいものであります。

参 考

●注連飾。こは天照大神の天の岩戸に隠れたまひし時、手力雄命、大神を引き出したてまつりて、中臣神、忌部神、しりくめ繩を其の後方にひき渡して此より内にかへりまじぞと申せし此のしりくめ繩こそ、今の注連繩の濫觴にて、しめはしめ結ふの意であるといふ。さて又これに齒朶、ゆづり葉を用るは世諺問答には齒朶ゆづり葉は深山にありて雪霜にしほれぬものなれば、注連繩にかざりて同じく引き侍るにやとあり、神道家の説には齒朶はもろむきとて兩側に葉の出たるものなれば、夫婦の共に榮えんことを祝ひ、ゆづり葉は外の木と異りて新葉出て、舊葉退くものなれば、其の名の如く父子相續の意を寓し、橙は其の名の如く代々榮ゆべきを意味すと、これらも例の縁起を祝ふ思想より起りしものであらう。

●門松の起り。門松の初めて古書に見えたのは、堀川天皇の時修理大夫顯季が除夜を詠んだ和歌に「門松をいとなみ立つるその程に春あけかたに夜やなりぬらん」といふのが「堀川院御時百首」の中に見えて年數といふものは今より約一千年前の事である、併し其當時

の門松といふものは、今日の門松の如く門の左右に二本樹つるのとは差つて其の目的は門前に澤山の松を樹て並べ、門口を清めて新年を迎ふる意味に外ならぬ而も此れを樹つる事は必ずしも新年を迎ふる事にのみに限らず當時天皇陛下の朝勤行幸や院の加茂祭の御幸の時などに京都市中の門毎に澤山の松を樹て渡して迎へ奉るのであつた恰も今日の店頭に幕を張り金屏風を立て廻して御幸啓や又は御輿の渡御を奉迎するのと全く同一の目的に外ならぬ、其れ故當時の門松は必ずしも松の木には限らず。榊もあれば椿もあつた現に今日ては伊勢神宮では矢張新年に榊をはやし立て、箱根伊豆兩所の権現の氏は榊を立て、肥前の松浦家や廣島縣の加部町地方では椎の木を立て、對島の宗家では椿を立て、其の他竹及び竹と松と交じへて立つる事は今猶各地に存在して居る、要するに門前を清めるに足るだけの常盤木でさへあれば敢て松のみに限らぬ事が證明されて居る、されど「歳時故實」には例の附會説を立て、門戸に松を飾ることは北天竺吉祥天の王を裔貴王といひて三界に遊戯し諸星の探題たり、之れを天刑星と名け、娑婆界に下りて名を改めて牛頭天王と名く、南天竺の側に廣遠國あり、國王を巨丹といふ、巨丹、不仁なり、大王終に巨丹を亡して國を蘇民將來に給ふ、今年の初の松は巨丹の墓しるしの木といふ、此本據は安倍晴明の著

と稱せらるゝ篋篋内傳に出てたるにて同書には牛頭天王を毘盧遮那の化身とし、蘇民將來を天徳神として備後風土記は又更に之れを附會して素盞鳴尊、南海の神女と通ずる時、日暮れて宿を巨丹將來に借る、許さず、其の兄蘇民將來に借る、之れを許す、尊大に喜び之れに報いんとし、其後疫病流行の時、蘇民及び其の子孫に茅の輪を帯びしめて蘇民將來子孫といひて疫死を免れしむ云々と、此に於て蘇民將來は厄除けの神となり、其の符を得るの祭禮は我が國の諸方に行はる。素盞鳴尊のことは朝鮮に赴かれしことより附會したるか、余淺學にして未だ蘇民將來の出處を審みせず、いづれにしても外國の神たるや疑なし、一説には牛頭天王を素盞鳴尊とすると共に巨丹を八岐の蛇とし、簸の川上の翁を蘇民とし、稻田姫を歳徳神とするあり、共にこれ附會信ずるに足らず。徳川時代となりて例の心學者の中には此の門松のことを報本反始の思想にて、昔、穴居の時代には門前には松など生ひ茂りて、僅に其の境とせしは注連繩なりしを忘れじとの風俗なりといふ。

●雜煮、重詰。報本反始前に考ふれば雜煮は尤も原始的の食物なり、守貞漫稿には「雜煮本名をほうそうといふなり、五臟を保養するの意にて保臟と書すなり、又或は縉紳家には「雜煮といふ」と重詰に使ふ料もごまめ、数の子昆布等皆な縁起を祝ふものなれど奢りたる



はなし、三省録には「小笠原故實聞書に、「山海の珍味といふは、蕨、梅干、小母なり、國士の菓子といふは柿栗の類なりとあり、因にいふ世俗年中の五節句、或は煤拂其の外、正月三ヶ日のおせちとて煮物には平日奢れる家々にても、此の料理に限り、多く芋、胡蘿蔔、午莠などの野菜に、田作のなまぐさをもて祝儀とするあり、これら古風の遣れるものといひつべし」とあり、これは純日本的にて別に附會せられたるものもなければ、鏡餅七草粥等に至ると例の三國傳來の附會説がある。

●鏡餅、七草粥。例の『歳時故實』は元旦の赤白の鏡の餅は巨丹の骨肉を表したるにて後人其の不道を懲さんとなりとあれど、云ふに足らず、七草粥のことは例の簞箆の説によれば不動明王の七草の髪、悪鬼を降伏するにかたどりたるなりといふは云ふまでもなき附會の説、春の初めに、

芹、なづな、ごげう、はこべら、ほとけのざ、すじな、すじしろの若草を粥に混ずるは悪病除けなりと信ぜられ、今も舊式を守る家にては、薪、庖丁、火箸、榎木、杓子、金杓子、菜箸の七具を揃へ歳徳神の方に向ひて、唐土の鳥が日本の土地に渡らぬさきになづな七草

とはやしたて、之れをきざむと云ふことである。

●小豆粥。正月十五日に食ふ此の粥に就ては『公事根元』に昔、他國の事にや嗤尤といふ悪人ありけるが、黄帝と申す御帝とたゝかひて正月十五日に殺されぬ、其の首は天狗となりて其の身は蛇靈となる、これによりて亥の時、小豆粥を煮て庭中に案を立て天狗を祭り、其の後、東に向ひ再拜してこれを食すれば年中の邪氣を除く云々と、小豆は小便を利し脚氣を消すの薬なれば邪氣を消す點は確かなるべきか、これは支那の傳説を附會したのであらう。

●寶船。その起原は支那にして年の暮に窮鬼を流すための禁厭の如く用ゐられたるものが、後には寝るための禁厭にも用ゐられ、これより悪夢を流すものとせられ、更に後には吉夢をみるための縁起の意味も加へらる、守貞漫稿に正月二日、今夜寶船の繪を枕下に置いて寝るなり、今世禁裡には舟に米俵を積むの圖あり、民間に賣るものは七福神或は寶盡等を畫き之一富士二鷹三茄子を描く、七福神は福祿壽、壽老人は(支那道教の神)大黒天、辨財天毘沙門天は印度波羅門の神、布袋は支那の佛僧、蛭子は日本の神、三教合同の寶船にのりて福の神とする、

●左義長。一月十五日の曉に書き初めの文字又は注連飾などを焼くを唐土左義長といひて一般に行はるゝが、これは後漢の明帝の永平年間、佛法印度より支那に渡りしが、同十四年正月に五岳の道士等、帝の佛法を用ひたまふを悦ばず元日慶賀の次てに表を上りて佛教と道教との優劣を試みんことを請ひければ其の月十五日を以て兩教の學者を白馬寺の南門に集められしに道士善信等は右の壇上に道教の書を置き、經像舍利は之れを左の壇上に置き互に其の術を較べしに道教の書は皆な焼けて灰となり佛教は少しも損ずることなかりければ、帝、道教を邪とし佛教を正としたまひ、道士等皆な出家したりと、これよりたふとやな左義長れりといふ意味にてとうど左義長といふなりと「故事要言」に見ゆ。

## 二、七福神禪話

### 一、禪と福德

禪の禪たる所は自己を徹證するに在り、一切の煩惱一切の罪惡は皆な自己に味きより起る、故に禪は大智慧の法門にして大解脱の要道である、人間浮世の名利を離れて天地の大道を吾人の脚跟下に開通し、五欲六塵の幻影を泯して聖賢の至徳を自己方寸の中に現成するの禪の効用である、然らば世の人の財寶を求め長壽を願ひ名譽を望み快樂を希ふの類とは全く没交渉の様にも思はれる、されど夢想國師が、「佛を兩足尊と申することは福智ともに満足し玉へる故なりされば福智をきらふべきにはあらず」といはれし如く、禪と雖も決して福德と智慧とに反對する譯のものでは無い、抑も佛法なるものは一口にいへば離苦得樂の法門である、苦報の極端なるものを三惡道といひ樂果の最勝なるものを安養界とも淨土ともいふ、誰だ淺智の凡夫は苦を厭ひ乍らも苦の本を絶つことを知らず樂を欣ひ乍らも樂の基を開くことを忘れて居るから、いつ迄も苦界を解脱することが出来ないであります、

苦といひ樂といふも決して、他より來るものに非ずして、其根源は自身の善業惡業にあるので、その善惡の業は悟りと迷ひとが土臺である、悟りとは天理人道を明らかにし、故に佛敎に順すること、迷ひとは智慧道徳を味まして邪道に踏み込むこととあり、故に佛敎に於て眞の幸福を求めしむるには先づ眞の行爲の善淨無垢ならんことを勸める、其の行爲を善ならしむるには必ず迷ひを轉じて悟りの道に入らんことを勸めるのである、さすれば禪と雖も決して福壽を招くの法に反する者ては無い、否、寧ろ完全に永久の福壽を得るの禪の効果であり、然らば如何様に禪を修し、如何なる形に福壽を得るのであるかといふことを一通り説明して見やうと思ふ、先づ幸福といへるもの、標準を御正月のことであるから七福神に依りて御話を致します、七福神とは壽老人、大黒天、福祿壽、恵比須、辨財天、毘沙門天、布袋である、此中壽老人と福祿壽と布袋とは支那にて崇むる神仙毘沙門天辨財天大黒天は印度にて祭る所にて佛敎より出づ、恵比須丈は日本の神様である、是の如き神人を寄せ集めて七福と稱したるは何頃より始まりしものかといふに、或説には弘法大師の創作ともあるが確なる證據は無い様です、又或説に依りますと、徳川家康公が或時天海僧正に對して「國を富まし家を榮えさすに法ありや」と問はれしに僧正は仁王護國

經を引いて、經に「七難即滅、七福即生、人民安樂、帝王歡喜」とあり、又「天災地妖の難なく國土侵略の憂なく民安國治らん」とあるに依りて、此經を讀誦し解説し且つ奉行し玉へて然るべしと答へられた、公は更に七福とは何かと問はれければ、僧正は「壽命、有福、人望、清廉、愛敬、威光、大量」の七を挙げ、それを人型に表はして壽老人以下の七神を描かれた、公大に喜び畫師狩野に命じて畫かしめられたのが七福神の初めだと申してある、後者の方が正確な様に思はれます、七といふ數を擇んだのは仁王經に七難七福とあるに依つたのである、其七難とは一には日月度を失ふの難、二には星宿度を失ふの難、此二つは天變に屬す、三には災火の難、四には雨水變異の難、乃ち水害である、五には惡風の難、六には亢陽の難、乃ち旱魃の害です、七には惡賊の難、乃ち凶賊禍を作して境界を侵し擾し財を奪ひ身を苦しむるの類である、以上の七難を免るゝのが七福です、觀音經にも七難が説てある、その七難は一に火難、二に水難、三に羅刹の難、羅刹は暴惡と譯して食人鬼の類である、四に刀杖の難、五に鬼難、鬼とは人の志業を妨げたり様々な祟りをなすもの、六に枷鎖の難、無實の罪に苦しめらるゝと、七に冤賊の難であり、是の如く種々の災難があつけれども、約めていへば四になる、一に身體生命を惱ますもの、二には

精神を惑はすもの、三には資財を損するもの、四には志業に妨ぐる者であります、又災難の原因を大別すれば、自然的と不自然的との二つとなり、自然的とは天災地變等に依ることや其の他逃れ難き災厄です、不自然的とは自分の妄想や邪欲を以て故らに招きたる禍です、自然的は過去の悪業に起因するもので不自然的は現在の邪業に基づくものであります、此等の厄難に打勝て、壽命も福分も威嚴も徳望も皆な盡く具足する様になりたいたい、いふのが人間の最大理想として希望する所であり、御正月の御飾りとして歳寒くして操を易々ぬ常盤の松を門に立て、節目正しき竹を挿さみ、家産を譲るべき子孫の繁昌せよ、かしたての讓葉、幾千代かけて榮えよとの橙、身代を延ばさんとの熨斗炮、堅固に住めよとの堅炭、喜び多かれとの昆布、財寶をかきよせたとの串柿、腰の梓の弓を張る迄の壽を保ちたしとの海老、何やかやと勝ち通しにとの榎栗、五穀豊饒にてあれかしとの米穂俵、皆な福壽を祈る人心の希望を表示したものであります、併し唯だ無暗に幸福を望んだからとて、其幸福を成就する所以の道知らざれば、所謂盲人の牆窺きて何の役にも立たぬことになる、是れ七福神に對する禪話を試みる必要ある所以であります。

## 二、壽命と福德

先づ幸福の第一として壽命です、無病健全にして天然の長壽を保つのが人間一切活動の基礎であります、されば釋尊も、無病は第一の利、知足は第一の富、善友は第一の親、涅槃は第一の樂」と仰せられてあつて無病長命こそ正しく幸福の本であります、長壽の標本として擧げられたのは壽老人です、所謂、「慈悲深く陰徳をなす銘々の子孫に長く福壽を與へん」といふが壽老人の願望と見える此壽老人は支那の老子だといふ説もあり又南極老人星といふ人間の壽命を司る星だともいふてある、杖の先に一軸の巻物を掲げたるは人間壽命の長短を記したるもので、鹿を侍せしむるは、鹿は千歳を経ると蒼鹿といふ又百歳を過ぎて白鹿と化し更に五百歳を歴ると玄鹿といふ、その肉を食すれば二千年の壽命を保つといふてある、併し壽老人の容を見れば何となく脱俗して居つて、人間の名利に貪着せぬ仙姿がある、鹿も亦柔順にして優愍な動物であつて、所謂「飢ては薬圃を尋ね渴しては靈泉を飲む」といふ極々奇麗な生活をして居ります、要するに壽老人は恬淡無欲の神仙である、恬淡であるから浮世の事に束縛せられず其心を寛くして物事にコセつかぬ、志貴瑞翁は百

歳になりても尙ほ健康であつたが、長壽の訣として人に告げて「氣を長くお持ちなされ」といふたそらぢや、三祖大師は「性に任すれば道に合し道遙として惱を絶す」と仰せられたが是れが恬淡の妙である、性に任すとは自然の法則に打任せて私根性を加へぬことである、妄りに貪ぼつたり妄りに曠つたりするのは性に背くのである、自分量見を打離れて然の理法に基づきなば日常の立居振舞も自づと道に合ふものである、乃ち親に對しては孝となり君に對しては忠となり恭儉を以て己れを持し博愛を以て衆を待つ様になれば、自心に愧る處も無く恐るゝ所も無いから實に大安心が得られます、又無欲といふは道を守り道を樂みて其外を望まぬことである、道を守るから自づと欲を制し道を樂むから自づと分限に安んじて常に満足を得ることが出来る、一禪僧が山居僧の菴を訪ふた時、山居僧が「何事かまゐらせばはやと思へども達磨宗には一物も無し」といふと、客僧も亦「何事もたまはらざるを賜ふこそ本來空の妙味なりけり」と返歌をしたといふことぢや、是れが無欲の快樂です、されば水野澤齋も「心の養生とは常に怒と慾とを堪へ心に耻しと思ふ事をなさざることも也」といひ、熊澤蕃山も「人は咎むとも咎めじ人は怒るとも怒らじ怒りと慾とを捨てこそ常に心は樂しめ」といはれました古歌に「養生は其身の程を知るにあり程を過す

は皆な不養生」心をば常に靜かに其身をば常に程よくうごかすがよき」抔とあるのは皆な長壽の心得であります、併し肉體の壽命のみを求むるは淺き望みである、吾々は生死即涅槃と心得て常住不死の靈性を徹見せねばならぬ、無量壽佛は本來自己方寸の中に在り、此無量壽佛を拜み奉らば、吾々の生命は天地と共に盡きるといふことはありませぬ、第二に無量壽佛である、人間が如何に長生をしても福德が無いと衣食にも困窮して結局他人の厄介にのみなる様などになる、憎まれ子世には「かる」といふのでは生甲斐の無いとてす、故に福德を有するところが大切である、此福德の代表が大黒天である、南海寄歸傳によると、天竺の諸大寺厨の柱の側に二尺か三尺位の像で金の囊を持ち小さい牀に坐して一脚を垂れて居る神を木で刻んである、天竺の慣習で其神像を油を以て常に拭ふに依て眞黒になつて居る、是を摩訶迦羅天と稱すとある、摩訶迦羅は大黒と譯す、我國では大黒天を大國主命だともいふ、大國と大黒との音通より斯く解したものかも知れぬ、大國主命は其子の事代主命と共に一百八十一神を率ひて天下を経営し普く人民の爲めに難を除き福を與へられた神である舊事本紀には大國主命は囊を負はれるともありと記してあるそらぢや、昔し傳教大師は延暦寺を比叡山に建立せられたが、叡山は日吉山王と大國主命を祀た御山である、大

師が山王に向つて冥助を祈られた時神が米俵の積んである上に姿を顯はされた、其形太だ  
 黒く全身圓らかに金鍔を把り寶の囊を負ふて居つた、大師は是れ正しく經文の大黒天なら  
 んとて手から其姿を刻みて大黒天神經を誦まれたと申すとてありませぬ、併し大黒天の御姿  
 には深大なる意義がある、慶長の頃太閤秀吉公の御氣に入りなる曾呂利新左衛門が、徳川  
 家康公の詰所に於て物語りの際、大黒天の事に就て「世人が福神として祭るのは此神は肩  
 を高く作りて頭巾を被る、是上を見ずして奢りを制し其本分に安んずるの相なり人能く其  
 分に安んぜば幸福は自から來るべし」といふた、時に家康公は口を開いて、「古より五字七  
 字の訣といふとがある、五字とは「うへなみぞ」七字とは「みのほどをしれ」であるが、  
 此二を守りなば貴賤共に幸を得るであらう、故に古歌にも「上な見ぞ身の程を知れ人並に  
 あるべきやうに時に隨へ」とある、大黒天は常に頭巾を被りて上を見ぬから必要の場合に  
 は脱ぐとも易かるべし、武士が刀を腰にし身の養生を慎むのも一旦の緩急に備るものぞ、  
 只だ長生を貪ぼるのは何の益もあるまじ、「大黒も亦時としては帽を脱するの理あるべし」  
 といはれたそうぢや、思ふに色黒きは眞黒になつて働くと、米俵を踏へて居るは財産を大  
 切に守ると、頭巾を被るは無暗に餘計な事に頭を出さぬと、袋をシツカリと捉んで居るは

勤忍の強きと、槌を持つるは活動の勇氣あると見るが宜い、故に古歌にも「忠孝の打出  
 の槌に勤忍の袋を持つるにめぐまん」我槌は寶打出す槌でなしなまくら者のあたま打槌」  
 「君に忠親に孝なる人あらば簑笠もやらう槌も袋も」杯とあります我が高祖承陽大師が支  
 那天童山に御修行の折、或夏の日極暑い眞盛りに、佛殿の前を過られし時、本府の用典座  
 といふが六十八歳の高齡腰の曲つた老軀を提げて笠も被らずにタツタ獨りて作務をして居  
 られた、餘りに氣の毒に思召され、傍に寄りて貴僧はなぜ若い者を使はずに御自身で苦役  
 を勤めらるゝやといはれし處、典座は「他は是れ吾れに非ず」人に仕事をさせては自分の  
 勤めにはなりませぬと答えた、大師は更に「只今は餘りに暑さ酷しければ涼しき時を待て  
 なされては」と仰せられしに典座は「更に何れの時をか待たん」此老體を以て今日は暑い  
 今日寒といふて居たならば勤める時が無くならずと答えたといふとを、大師は御感  
 心遊ばして親ら此事を記されてあります、他は是れ吾れに非ずとは分を守り職を重んずる  
 の至誠、更に何れの時をか待たんとは一寸の光陰をも空ふせざる精進の勇氣があらば、精  
 神と物質との兩方面に於て必ず眞正なる福德を獲得するに出來るに相違ありませぬ。

### 三、人望と清廉

第三は人望所謂名譽です、正しき美はしき名譽です、信用が無ければ人望は得られぬ人望の在る處に名譽がある、此人望の標本として福祿壽が擧げられてある、福祿壽は支那の道教で祀る所の神で天の三星ともいふ前の壽老人に似たる神です、風俗記に依れば、宋の元祐年中京師に一の老人あり頭の長さ三尺、頭と體と稍や同じく目秀て髯多く、卜筮を事とし錢があれば酒を呑み自ら其頭を叩いては「吾は壽を増すの聖人なり」といふて居た、それが遂に上聞に達し拜調を仰せ付けられて酒饌を賜はり、其際帝は年齢を問はれしに、「臣は南方より來りて黄河の澄ひのを見ました」と對えた、黄河は一千年に一回澄むといふとちや、彼は斯く對え了るや忽ち姿を隠した、そこで帝は壽星なるべしとて其像を書かしめ是を福祿壽と名けたといふとです、是れは昔の御話し吾々御互の標準とする福祿壽はどうであらう、頭の高いといふは品性の氣高いとです、私利私慾を離れて品性の高潔なる人て無ければ社會の名望は得られませぬ、真正の福分は足るとを知るに在り正義の爵祿は學問知識に依て得られる、故に足るとを知る者は富むとも學べば祿其中に在りとも申すのちや、又壽

命の方とて「徒らに百歳生らんは恨むべき日月なり悲しむべき形骸なり」ともいふて、但だ年數を澤山経たればとて褒められませぬ、立派なる功德を萬世に遺すのが眞の長壽である、されば内足るとを知り外學業を修め而して能く社會公共の爲めに利益ある事業に盡するが眞の福祿壽であります、此三徳を全ふするには正しき信念を養ふとが大切である、そこで古歌にも「神儒佛を尊ぶ人ぞ福祿壽永くかしらに宿り守らむ」といふてあります、信念を養ふには第一に自身を信ぜねばならぬ、ソクラテースは「汝自身を知れ」といふた然らばどう信すべきかといふに、古人が「即心即佛」といはれし通り、吾々は本來天真の佛である、三世諸佛の光明も十方の菩薩の願行も畢竟吾々の方寸の中に在るとを堅く信ぜねばならぬ、こういふ信念があつてこそ始めて神をも佛をも本當に信ずるとが出来るものである、吾々は元來立派な佛であつて天地の大道も智慧も道徳も皆な我れに備はつて居るものと確信すれば、淺はかな量見や耻かしい妄情は自然に慎まらずには居られぬ様になる、是に於てか知足の念も明らかな智慧も、美はしき事業も自づと實現して來る様になるものであります、第四には清廉の福です、清廉とは正當の理由なきものは釐毛と雖も食る心なく自ら其分限に安んじ其天職を樂み正直にして潔白なるをいふ、孟子が「其義にあらず其

道にあらざるや之れに祿するに天下を以てするとも顧みず」といへし如き志操が清廉である、兎角多くの人は欲望の爲めに道を過まり易いものである、不義の富貴は悪しと知り乍らも之を貪り、清潔の貧窮は耻るに及ばずと知り乍らも之を厭ひ、知らずくの間、に五欲六塵の奴隷となる者が多い、「欲深き人の心とふる雪はつもるにつけて道を忘るゝ」「心から流るゝ水をせきとめて己れと淵に身を沈めけり」恐るべきは貪欲であるから吾々は努めて清廉の徳を養はねばならぬ、此徳の標本として挙げたのが惠比須である、惠比須は我國の神代に於ける伊諾那岐伊諾那美二柱の神の第三子蛭兒尊ぢやといふてある、此神は三歳になりても足が立たぬ爲め石樟の船に乗せて海に流されたが、その船は攝州の濱邊に着たので里人が之を祀つた今の西の宮がそれである、一説に惠比須は天津日高穂々手見尊だといふてある、尊は海に釣して針を失なひ和田津海に入りて赤女魚の喉より之を得遂に海神の女を娶り干珠満珠といへる二の寶珠を得て返られたので福神と稱する様になつたのだといふてある、又一説には惠比須は事代主の神だともいふてある、此神の親なる大國主命は袋を負ひ此神は魚を釣られし事蹟がある且つ此神が商賣といふとを始められたと申すとてす加之此父子の神は清廉な御方で自分の御國をソックリ天孫に捧げられたとは皆な人の知

る所てあります、聖徳太子が推古天皇の九年三月に人民の爲めに市場を設けて賣買を勧められし時惠比須神を祀られました、十月に惠比須講と稱して此神を祀るとも太子より始まつたのであります、併し此神を清廉の徳の權化とせしは禪的見知より觀れば一層面白く感ぜられます、茫々たる生死の大海、人生の荒波の上に際限もなく漂流して居るのは御互の身の上では無いが、此大海と荒波とを己れの住家となし、願力堅固なる石樟船に駕して同情慈悲の釣を垂れ以て一切の衆生を沈淪より釣上げ、自分一己は家を定めず處も極めず風に任せ波に隨ひ、更に貪り求むる所がない所謂煩惱海中船筏師契仲阿闍梨が、「生死の川に世を経し渡し守り渡しはせずば棹もおさめじ」といふ人て無ければ、眞の清廉になり兼ねるものです、清廉といへばとて唯だ潔白を守るのみでは矢張向上の死漢たるを免れぬ、人生の荒波に漂流し乍ら悠然常に笑を含んで爲人度生の釣竿を弄する底の手脚が無ければならぬ、是を木人方に歌ひ石女立て舞ふともいふのであります。

#### 四、愛と威光と大量

第五は愛敬の福です、是がまた最も大切な福である愛敬なきものは衆生縁を結ぶとも人を



感化することも出来悪いものであります、愛敬の標本は辨財天である、辨財天のとは金光明經等に出て居る、辨財天女經には「怨敵退散諸人愛敬一切福田財寶滿足」とある、寶冠の中に白蛇あり其面は老人の如くにして眉毛白し、是れは佛の出世毎に逢ふて衆生を利益するとの久しき瑞相にて之を宇賀神といふ、經の終りに釋尊は、「宇賀神を輕んずると勿れ西方淨土には無量壽佛と號し娑婆世界にては如意輪觀音と稱し、正しく生身は日輪の中に居して四天下の間を照し、吒枳尼天の形を現じては福壽を施し、大聖天と顯はれては二世の障難を拂ひ、愛染明王の形を以て愛敬を授け佛果に至らしむ」云々と説かせられてあります、吾々も亦愛敬を得るには「無理をせず理非明白に辨ふる人に寶を更に與へん」といふ歌の如く、第一には正しき道を踏んで少しも無理なる事を致さず、常に優美にして柔和なる顔色と容姿とを備へねばならぬ、ツマリ平生辨財天の様な顔をする様にせねばならぬさればとて紅粉を施し美服を飾れといふのでは無い、天請問經に「持戒恒に端嚴」とあるが如く、佛の戒律を持つのが眞の美人である、佛の戒律といふは要するに三つの徳を具ふるとである、一には身と口と意とに於て悪い事をせぬと、二には常に善事を行ふと、三には人間にも畜生にも都てに向て柔和親切にして深き憐れみのあるとであります、禪學を修む

る者は萬人に抽んで、此三大徳を修養せねばなりません、見知の大なる者程却て慈悲の涙に富み機鋒の剛なる人程却て柔和の情に厚きものである三十棒を振り廻し電光石火の活機輪を轉ずる底の太用を有し乍ら、一面には小兒をも懐け猛獸をも和らぐるの愛敬ありてこそ始めて大丈夫といはるゝのであります、第六には威光の福で、その代表的福神が毘沙門天である、此毘沙門天は鬼神の總大將である、毘沙門天王功德經に依ると金の甲を被り左手には寶塔右手には如意寶珠を取り足には羅刹毘閻舍鬼を踏んで正法を守護し玉ふ、金の甲は四魔の軍を除かんための勇を表し寶塔には八萬四千の法藏十二部經の文義を具するの智を表し、寶珠には無量の財寶を衆生に與ふるの仁を表した者である、且釋尊は更に告げて、毘沙門に奉仕すれば無盡の福愛敬の福智慧の福長命の福眷屬の福勝軍の福田畑の福養蓋の福等を得ると仰せられてあります、是の如く無量の福があるけれど其主要なる者は威光である、乃ち四魔降伏の武勇である、四魔とは一に煩惱魔、是は心の迷である、二に五蓋魔五蓋とは色受想行識の五つツマリ此身のとです、此身は色即ち物質と受想行識即ち精神との集合體である、此身には生活上の苦疾病の苦等の様々の苦があります、三に死魔即ち死ぬると、四に天魔是は欲界の第六天に吾々の善根を妨ぐる惡魔があるといふ、ツマリ

自然界の障礙をいふのであります、此中一番恐ろしいのは心の中の悪魔である、王陽明も「山中の賊を破るとは易く、心中の賊を破るとは難し」といふて居る、防ぎ難きは我見我執の心の迷ぢや、故に古人も「おさへたと思ふ下からはねかへず油断のならぬ我はつはもの」「腹たゞば人をも世をも恨むまじそのまゝ悪き心殺せよ」といふてある、此心を殺すの法は禪定の力が最も捷徑であります、坐禪して寂靜の境界に安住せば一切の我見は自づと粉碎せられる、二祖大師が達磨大師に安心の法門を問はれた時、「心を持ち來れ汝が爲めに安心せしめん」と仰せられた、心の本體を究めなければドコに迷ひ杯といふ種があるうぞ、外界の色や聲を追ひ廻るから益々煩惱が増長するのぢや、若し回光返照して自己とは何ぞと參究したならば、自づと内には煩惱の悪魔を降伏し外には天魔を叱咤し、一身の繫縛を離れ生死の間に於ても自由を得るとが出来るものである、第七に大量とは度量の寛大なるとて是れ亦無くて叶はぬ福徳です、之に配するに布袋を以てしたのは甚だ興味あるとてある、布袋和尚は碧此と名け支那寧波四明の僧で奉化縣の岳林寺に居り長汀子とも稱した、形肥へ顔盛り腹が大きく垂れ、常に杖を以て布の袋を擔ぎ自分の道具は皆其中に貯へ、市に出でゝは物を乞ひ得れば袋に入れ飢に臨めば食ふ、世間の小兒が大勢で面白がつて附き

纏へば嘻々として喜び、物あれば之に與ふ、其境涯の脱俗にして愉快なる比ぶるに物なし梁の貞明三年遺偈を書し端坐して寂を示した、世に彌勒大士の化身ともいふて居る「小しくと腹を立ずに睦ましく家内和合の人を守らん」と歌にあるが如く、腹の大きいのは大度量を示し袋一ツを擔ふは分に安んじて天命を樂むの姿、にこ／＼して居るのは堪忍の強きを知るべし、吾々も亦是の如き大度量が無ければならぬ、法界の所有一切衆生を以て所化の相手となし未來永劫を期して佛事を行はんとする佛菩薩の願行を具ふるとは出來ぬ、若し狭量小膽にして些々たるに拘泥し恨みを結んだり怒りを洩らしたりする様では、何事も満足せぬものです、明治天皇様の御製に「あさみどり澄み渡りたる大空の廣さを己が心ともがな」「さしのぼる朝日の如くさはやかにあらまほしきは心なりけり」とある御歌の様な廣き清き心を持たねばならぬ、古歌にも「大海原の如くに心をも唯廣々とくらせ世の人」ともある、正月元日杯は人の心もなんとなくのび／＼して居る、昨日迄怒鳴あつた人とも笑顔を変換して居るが「元日やこの心にて世に居たし」「年中の人の心は今日ばかり」といふ風に、いつも／＼のどかにありたいものである、高祖大師は「其心を大山にし其心を大海にせよ」と仰せられた、山には不動の徳がある、如何なる顛逆の風が吹て來てもビ

クともせぬ大安心が無ければならぬ、それと同時に海に寛容の徳あるが如く百川交々來るも更に厭ふ色なし、敵も味方も推並て慈悲の海中に攝するの度量なければ、未だ俱に禪を語るに足らぬものである。

### 五、自己と福神

「人みな心の心一つにかしこくも七つのさちの神いますかな、七福神といふも其源は吾々の心の中に在るので決して外より來るものではない、故に古人は「禍福門なし只人の招く所」とも「積善の家には必ず餘慶あり積不善の家には必ず餘殃あり」ともいふてある、徳川家康公は或時近臣に向ひ、「御身等は金のなる木を存じ居るか若し知らずば今之を示さん」とて、幹を三段にして梢を「よろづほどよき」中段を「しやうじき」根本を「じひふかき」と書かれた、其時細川幽齋が左右に四本づゝの枝を付けて御覽に入れた、先づ右の上からいへば「あさをさ」「いさぎよき」「しんぼうづよき」「ゆだんなき」左の上からは「かせぎ」「ついでなき」「ようじやうよき」「かないむづかしき」といふのであつた、又「皇め草」には五福の傳授といふ歌がある、一には徳て歌は「謙り神儒佛をば尊みてよろづ誠によるづ

堪忍」二には福「はら立てず家内中よくおごりなく家職大切實義大切」三には祿「怠らず勤め〱て眞實に裏表なく今日を大事に」四には壽「樂をせず酒色財欲深くせず灸治朝起足るとを恐れ」五には子孫「金玉は實に非ず善心を積む陰徳に子孫榮ふる」とある、國家の光輝も國民の精神如何に由て現はるのであるから月照上人は「磨き得て國の寶となるものは人の心の玉にぞありける」といはれた、家庭の快樂も心が本であるから「家内中なかのよいのが寶船心やす〱世を渡るなり」ともある、併し幸福といふも快樂といふも畢竟心の中の道徳の表彰であるから、福徳の基礎は必ず自己の身心に確立せねばならぬ、然らずして徒らに福徳を望むのは恰も木に縁て魚を求むるの類である、唯に益なきのみならず動もすれば之れが爲めに貪婪憎嫉の妄想を造り出し遂に無繩自縛に陥る様になるものであります、道徳といふても決して別な物では無い、教育勅語に御示しあらせられし品目戊申詔書に御諭し下されたる要領、皆な必須の道徳である、而して此道徳の財産を増殖するには資本が無ければならぬ、其資本を佛教では或は六波羅蜜と説き玉ふた、乃ち布施と持戒と忍辱と精進と禪定と智慧とである、又十誦律等には七聖財と説き玉ふた、乃ち信念と精進と持戒と慚愧と聞法と喜捨と定慧とである、其他三福田八福田等の説あるも盡く皆

な自己の道徳より發生したる美果でありませす、而して此道徳は本來吾々御互の本性の中に  
 具有して居るのである、孟子も萬物皆な我れに備はるといふて置かれた然れば何れも自己  
 心中に所有する固有の財寶ぢや、此財寶を開發するの法は坐禪三昧が正門である、坐禪三  
 昧は所有開發方法の中に最も完全な要術ぢや、故に高祖大師は坐禪を以て安樂の法門なり  
 と仰せられた、坐禪すれば精神の動亂を制し腹の底に心を落付て、泰然不動の地に住せし  
 むるが故に自づと妄想の爲めに束縛せられるとが無くなりませす、心に憂ひなく恐れなく苦  
 みなき是れが快樂の土臺である、のみならず坐禪の結果は自づと本性の道を體得するに依  
 て必ず無限の樂みが生じて來る、一休禪師が住吉に詣てられし時、此地とても無常の火は  
 免れぬものを住吉とは扱も呑氣な名を附けしものかなと思ひ「來て見ればこゝも火宅の宿  
 ならめなに住吉と人のいふらん」と歌はれしが、臥菜菴の老僧が返歌して「來て見ればこ  
 ゝも火宅の夜なれば心をきめて住めば住吉」といふたとある、同じ浮世にあり乍らも其人  
 の心一つにて苦樂趣を異にし禍福報を同ふせぬ、古歌に「炮烙と同じ浮世の人心氣を煎る  
 もありほうずるもあり」とある通りぢや、「波の音きかじが爲めの山籠り苦は色かへる松風  
 の音」で眞の安心を得ざれば、松風の音にも心が動亂するが、若し精神湛然として能く天

眞の道を楽しむ者は「波の鼓きこえぬ山の奥も尚ほ面白かりし松風の琴」ともいはれる、六  
 祖大師が南海の法性寺といふに寓居しまだ俗人の姿で在ての時、一日二人の僧が風幡に  
 就て大議論を戦はした、一人は風が動くのぢやといひ、一人は幡が動くのぢやといふ、双  
 方共一理があるから容易に決せぬ、そこで大師の意見を問ふとなつた、其時大師は「是  
 は風の動くにも非ず又幡の動くにも非ず御身達の心が動つてある」と仰せられた、誠に千  
 古不磨の斷案です、佛教八萬の法門も畢竟此心動の理を説かれたものに過ぎぬ、然らば心  
 とは何ぞや心は何に依て動くのであらう、心の動くのは果して善か悪か、これらの理を工  
 夫し去つたならば必ず心は天地の主、萬象の母、であるといふともわかり、之と同時に自  
 己元來是れ佛なるともわかり、盡天盡地微塵も他物は無い、森羅萬象一毫も佛ならざるも  
 の無いといふとも知れ、こゝに絶大の大快樂が現はれ、大安心が決定せられ、無限の道徳  
 無窮の福德が一舉手一投足の上にも實現して、自身即七福神たるに至るのであります。

參考

●大黒天。「佛說摩訶迦羅大黒天神大福德自在圓滿菩薩陀羅尼經」に曰く「爾時に、如來、大衆に告げて言く、今此の大會の中に大菩薩有り、名けて大福德自在圓滿菩薩と曰ふ、此の菩薩、往昔等正覺を成じて大摩尼珠王如來と號す、今自在業力を以ての故に、娑婆世界に來り大黒天神と顯はる、是の大菩薩大會の中、即ち座を起て合掌して佛に曰して言く、我れ一切の貧窮無福の衆生に於て、大福德を與ふる爲めに、今優婆塞の形を現じ、眷屬七世女天、三界に遊現し、一切衆に福德を與へんと欲す」云々

●惠比須神。惠比須神に就ては、古來種々の説あるも、要するに、下の三説に概括せらる、一には、惠比須は蛭兒命を福神化したるものとする説、二には、惠比須は彦火々出見尊とする説、三には、惠比須は事代主神とする説。

●布袋和尚。布袋和尚臨終の偈に曰く「彌勒眞彌勒、分身千百億、時々示時人、時人自未識」

●壽老人。壽老人は南極老人星の化身で、天文學の書に記してある處によると、この星は弧の南にあつて、南極星である、秋分の旦には二十八宿の井の宿の丙の處に見え、春分の

夕には、外の處に現はれる、(丙も外も星座の名である)、この星が明かて大なる時は、天下が安寧にして、もし然らざる時は、天下がよく治まらない兆である、而して此の星は地を出ることが甚だ遠くないために、常に見えないで、此の星が見えるのを祥瑞とする。

●毘沙門天。「三藏法數」に曰く「毘沙門天王、梵語に毘沙門、華に多聞と言ふ、謂く此の天の福德の名、四方に聞ゆ、即ち方天王、須彌山の半第四層の北の水精埵に居り、無量百千の藥叉を統領して北方を守護する也。又「毘沙門功德經」に曰く「我れは此より北方七萬八千里を過ぎて國あり、名けて善光といふ、城あり、名を吠室羅摩郭大城といひ、大福我れに聚まる、毎日三時この福を燒く、若し人ありて我が福を得んと欲せば五戒三歸を持し、無上菩提を爲せ、願求決定して施與し、一切を成就することを得ん、毘沙門の福に於て願ふ所五種あり、一を父母に孝養、二を功德善根、三を國土豊饒、四を一切衆生、五を無上菩提となす、(中略)、福德を得んと欲せば丑寅に向つて名號を稱ふること一百八遍せよ、大福德を得べきなり、智慧を得んと欲せば、東方に向て名號を稱ふること一百八遍せよ、大智慧を得べし、官位を得んと欲する者は辰巳に向つて名號を稱ふること一百八遍せば官位を得べし、妻子を能くすることを得んと欲する者は、南方に向つて、長命を得んと欲す

る者は、未申に向つて、眷屬を多く得んと欲せば西方に向つて、愛敬を得んと欲する者は、戌亥に向つて、悉地を得んと欲する者は、北方に向つて名號を稱ふること一百八遍せよ』云々

●辨財天。白隠禪師曾て、辨財天を詠じて曰く、

稽首大辨財天、即觀音薩埵示現、畢竟人人本具性、離自性別無福德、性海寬廣斯言大、勤修德行即是辨、孝悌仁恕以為財、不奢不貪是稱尊、心上清間此上天、勸君第一要見性、此外更求福德神、即是世間閑妄想、

### 三、大般若會法話

#### 一、最大部の經典

靜かに憶ふべし、正法世に流布せざらん時は、身命を正法の爲に抛捨せんことを願ふとも値ふべからず、正法に逢ふ今日の吾等を願ふべし、見ずや、佛の言はく、無上菩提を演説する師に値はんには種姓を觀ずること莫れ、容顏を見ること莫れ、乃至、但般若を尊重するが故に、日々三時に禮拜し恭敬して更に患惱の心を生ぜしむること莫れ。此贊題は修證義第七節の御文であります、御文の趣意は極めて明白です。乃ち我等御互は第一に心を靜めて憶はねばならぬことがある、若し世の中に佛法といへる貴とき教へが傳つて居らなんだならば、縦ひ身命を捨て、之を求めんと願ふたればとて、容易に値ひ奉ることは出来ぬ、さすれば我等は深くも深く受け難き人身を受け遇ひ難き佛法に遇ひ奉りしことを歡喜踊躍して、生々世々に此善果報の相續せんことを願ふべきである既に佛法に遇ひ奉りたる上は飽まで其佛法を尊重し信仰し實行し奉らねばならぬ故に釋尊は大般若經

等に於て、眞實の佛法を演説する人に遇ふたならば、其人の身分や位地や人格等の如何を論ぜず、唯だ般若を尊重し、之を信じ之に則とり、以て佛法の大功德を成就せよと仰せられてある、般若は梵語此には智慧と譯す、智慧とは佛の御悟のこととす、佛の御悟とは宇宙の眞理を悟られたのである、此御悟即ち宇宙の眞理こそ一切の智識一切の道德の根源である、故に之を大般若とも稱するのであります、ソコで私は此贊題の御文に基づきて聊か大般若の功德を御話して見やうと思ひます、元來大般若經と申すは、釋尊が十六の會座にて説かせられし法門にて、卷數六百卷二百六十有五品より成立ちて一千二百五十七の義門を開き、字數の多きこと六十億と四十萬と稱して居る、釋尊五十年間の説法中二十二年間は此大般若を説かせられたともいひ、又は十四年間の説法ともいふてある、兎に角一切經の中最も大部の經典であることは言ふ迄も無い、而して其六百卷の大説法は盡く佛の御悟りを示されたものです、天台宗等の判教には般若を以て別教に屬し、方便説を帯びて居るものとしてあるが、我が宗門の讀經眼より見れば一切藏經一つとして方便ならざるの教は無い、併し其方便は即眞實であつて、一字一句の上にも宇宙の眞理を開闡し一章一偈の上にも天地の大道を究盡して居る、されば大般若經は正しく釋尊極大乘の法輪にして一切藏

經も悉く此經中に包含されて居ると云ふことも出来るのである、況てや我宗に於て大般若經を轉讀する時の如きは常に佛の説かれたる法として見るのではなく六十億四十萬の文字の字を正しく實際の生きた佛として拜するのであります、獨り大般若經のみならず一切藏經も亦た其一字々々が全く釋尊の法身舍利、釋尊の皮肉骨髓であります、此の精神が解らねば佛敎の大功德を現はすことは出来ませぬ。

## 二、般若の傳來

扱て此大般若經を天竺から傳來して、之を翻譯せられたのは有名なる唐の玄奘三藏法師であります、玄奘三藏は唐の高祖の貞觀七年即ち我國人皇三十五代舒明天皇の五年に天竺に渡られ、那蘭陀寺の戒賢律師に就て佛敎を研究し、且つ天竺に於て百三十餘の國々を経歴して各種の調査を遂げ、大般若經を始め多くの經論を傳へて、十三年目に支那に還られました、其間の艱難辛苦は今日の我等抔はとも想像の出来ぬ程であつたのです、玄奘三藏は、一代に七十四部一千三百三十八卷を翻譯した人で、實に佛敎翻譯者の傑出なる者である、中に就て、大般若經は唐の高宗帝の詔を奉じて當時の譯者たる儒官約二百人を助手と

して、翻譯に従事し、滿四年にして成功せられ、龍朔三年十月嘉壽殿に於て大供養會を設けられた、其時大般若經より光明を放ちて遠近を照し、天花亂墜等の奇特もあつたとある、それより間もなく我國に傳來したものと見え、人皇四十三代元明天皇和銅元年十月の御詔勅には「今年より毎歲沙門を延て大般若經を轉せしめよ」と仰せられてあります、四十五代聖武天皇は佛教に對する御信仰最も深くあらせられ、奈良の都に金銅十六丈の盧舍那佛を建立し玉ひ、又唐より鑑真律師を請し戒壇院を創立して授戒會を御修行遊され、且つ各國に國分寺等を建設して佛教の普及を謀らせられた、猶ほ神龜元年の正月に沙門六百人を請して大般若經を宮中に轉せしめられ、當時國大に饑え疫厲頻りに至りしことありしかば、特に釋尊の像高さ一丈なるを造り及び大般若經六百卷を寫さしめられしに、其功德空しからずして、それより風雨順序にして五穀豊かに穰つたとある、其後天平寶字二年には御詔勅を發せられて「聞くならく摩訶般若波羅蜜多是れ諸佛の母なり、四句の偈等を受授し讀誦するも福德聚を得ること思量すべからずと、是を以て天子之れを念ずるときは兵戈災害國の裏に入らず、庶民之を念ずるときは疾疫勵鬼家の中に入らず、惡を斷ち福を獲る是れに過ぎたるは莫し、宜しく天下の諸國に告ぐべし、男女老少を論ずる事なく、起

座行歩にも口を閉て皆悉く念誦せよ、其文武百官の人等は朝に向ひ司に赴く路道の上にも毎日常に念じて空しく往來する事勿れ、云々と仰せ下されてあります、是より日本全國津浦々に至る迄等しく大般若經を信受し讀誦書寫し供養して、家を治め國を護り災を除き害を禳ふの唯一寶典と爲す様になつたのであります。

### 三、般若の大旨

然らば大般若經とは如何なる妙義を開示せられて斯も甚深微妙の大功德があるのかといふに、前にも申した通り一千五百七十二の義門を示されてあるから一朝一夕に其妙義を述べ盡すことは出来ませぬ、併し其原理原則を究むれば「空」の一字に歸するのてあります、空といふても斷滅とか落空とかいふ様な撥無的の空では無い、ツマリ平等絶對の本體の換名とも見るべきである、凡夫は我を執するが故に妄想煩惱を起し、それが己れの愛する物に對しての貪欲となり、己れの愛せざる物に對しては瞋恚となり、貪れども得ること能はず、瞋れども斥くこと能はずして遂には愚痴の繩に縛られて、益々煩惱を増長し益々惡業を造作し、我と我手で三界生死の苦患を招き、鬼ともなり蛇ともなりて



盡未來際解脫の分なきに至るのである、若し一步を退いて能く諸法の實相を観じたならば此身は是れ地水火風の寄聚り、此心も念々に變化して暫くも住まることが無い、震旦の二祖慧可大師が達磨大師に安心の法門を問はれし時、「心を持ち來れ汝が爲めに安心せしめん」と仰せられたとある、心とは何ぞ、煩惱とは何物ぞと工夫して見たならば、是が心である、是が煩惱であるといふて押えて見るべきものは無い、昔し或人が正眼國師に對して、私は天性短氣で困り切ります何卒短氣の習癖の直る様に御化導下されたしと申せし時、國師は如何にも直して進ぜ様から其處で腹を立て御覽と言はれた、彼者は只今は腹を立てるとは出來ませぬ、併し天性とあれば何處にか短氣の塊があるだろう、イヤ何處を探しても見付りませぬ、然らば徹底不可得か、左様不可得であります、其の不可得であります、其不可得觀を忘れまいぞや、腹が立たら不可得觀を忘れまいぞや、腹が立たら不可得觀に入つて見よ、欲が起つたら不可得觀に入つて見よ、直下に短氣も欲も解脱することであらうぞと示されたそうです、徹底不可得なることを覺悟すれば忽然として無我の状態に入る、此時平等絶對の空理が現はれて一切の煩惱妄想を打破するに至ります、無我といふても枯木の様になる事で無い、所謂天地の公道に一致して所有私慾私情を解脱したる境界であります、字

宙の根源は平等絶對にして而して能く生々化々の徳を備へて居る、故に此真空の妙理に隨順する時は、其智見は公平にして毫も偏破に流れず、其慈悲は平等にして普く一切の衆生を利濟し、萬事に處して染汚する事なく、萬物に接して罣礙する處が無い様になります、六祖大師が「本來無一物何れの處にか塵埃を惹かん」と仰せられたは、般若の本體をいふたので、釋尊が「一切衆生皆な是れ我が子」と法華經に仰せられ、又梵網經に「一切の男子は是れ我が父、一切の女人は是れ我が母なり、我れ生々に之れに従つて生を受けざる無し、故に六道の衆生は皆是れ我が父母なり、乃至一切の地水火風は是れ我が先身なり、一切の火風は是れ我が本體」と御示し下されたは正しく般若の妙徳妙用であります。

#### 四、四枚の般若

それゆえ修證義第十一節には、菩薩の四攝法を以て四枚の般若なりと仰せられてある、乃ち四攝法とは布施と愛語と利行と同事との四大行です、布施といふは慈悲仁愛の心を以て哀愍を人に施すことである、法を知るものは法を施し、財を有する者は財を施し、財法兩ら有せざる人は同情の心を發すのも一分の布施である、平等絶對の妙理を了する時は自づ

と平等博愛の布施行が現はれて來ねばならぬ、「あはれみを物に施す心より外に佛の姿やはある」で、此布施の心行こそ取りも直さず佛の御姿であります、此般若の妙徳が言語の上に現はるれば愛語の行となる、愛語といふは言語を慎しみて常に深切なる語、道理ある語、柔和き語、優美き語を使ふことである、乃ち妄語と云て虚偽、惡口と云て惡まれ口、綺語といふて莊飾のみを重んずる實の無い語、兩舌と云て二枚舌を使ふ様な事を離るゝ時は、自然に愛語の徳を成就致します、「あい／＼の返事一つて天も日も人の心も圓くなりけり」愛語は和合の根源である、若し之に反すれば喧嘩口論是より起り鬭諍怨恨も亦是より生ず「三寸の舌で五尺の身軀をば養ひもする失ひもする」、慎むべきは言語である、又此般若の妙徳が行爲の上に現はるれば利行といふて衆生利益の行となる、衆生と我と本來平等なりと明らめなばドウして他人に不利なる行が出来ませう、「慈悲の眼に悪しと思ふ者ぞなき罪ある身こそ猶ほあはれなれ」、獨り人間同志の間許りては無い、慈悲心の妙用は普く萬境に通ずるものです、「行水の捨て處なし虫の聲」とは禽獸蟲魚に及べる般若の徳で、「朝顔に釣瓶とられて貰ひ水」とは草木國土の上に發したる慈の光であります、又此般若の妙徳は時と處と人にと依りては同事行となつて現はれます、同事といふは不違なりとありて其時と

處と人にと依てキチンと當籤る和光同塵の行である、釋尊が人を見て法を説かせられ、一佛法一眞理をば、或は空と説き、或は有と説き、或は中と説き、遂に八萬四千の法門を開示せらるゝに至つたのも皆な同事行であります、道の本源は唯一なるも、親に向へば孝となり、君に對すれば忠となる、夫婦の間には和合と爲り、朋友の間には信義となる、是れ皆な自然的同事行である、以上の四攝法は盡く宇宙の大精神の活動にして、乃ち般若の妙用であります、天言はず四時行はれ百物成るて、眞空平等の理體より自づと斯の如き妙用が現はれるのであります、然れば眞理の本體は平等絶待なりと雖も、其妙徳は不染汚にして現はれ無罣礙にして行なはれて來る、是を名けて智慧とも道德とも慈悲とも神通とも申すのであります。

### 五、祈禱の眞意義

此般若の妙徳を完全に具へられたのが佛であるから、佛様は宇宙眞理の權化であらせられます、されば吾等の本來具有する般若の體を明らかに、之を事々物々に對して自在に運用し得べき妙徳を現はすに當り、而して之を妨害する所の惡魔を降伏して本然の徳に歸するが

爲めに眞理の權化たる佛の御加護力を仰ぎ奉るのが御祈禱であります、祈禱と云ふは二字ともにもトムと訓じて、我等の希望を佛様に訴へ佛様の加護力を蒙りて其目的を達するこ  
 とです、廣き意味を以て申せば佛様許りて無く、天地の大道に向つて大なる志を立て堅固  
 なる誓願を發するもの亦た一種の祈禱と云ふことが出来る、孔子の「丘の祈ること久し」  
 といふたのも全くそれである、併し我等の力は甚だ微弱なるもので知識の點から云ても、  
 道德の點から見ても、實に渺たる蒼海の一粟たることを免れませぬ、故に小供が親の力を  
 憑み、人民が政府の力を頼むが如く、誠心誠意を以て佛菩薩の加護力を頼み奉る事が必要  
 であります、殊に大般若經には十方三世の佛菩薩を始め梵天帝釋四天王及び十六善神等が  
 守護神となつて長へに大般若經を守護せられ、常に大般若經を信仰するものを御護り下さる  
 といふことは明らかに御經の中に説てあります、大般若の御本尊として安置し奉る書像  
 の正面は釋尊と文殊普賢の二大菩薩である、其下なるは常啼菩薩と法涌菩薩と此二菩薩は  
 何れも般若を求めんが爲めに難行苦行せられた御方である、左右の神々は十六善神です、  
 一番下に笈を負ふて居らるゝは玄奘三藏、獨體を頸に懸けたるは神蛇大王とて玄奘渡天の  
 時に姿を現はし貴僧は今迄に六度も大般若經を支那に請待せられたが其度毎に私は貴僧を

殺して經文を奪ひ取れり、故に今は七度目である、斯迄精進不退なる御精神なるを以て今  
 よりは長く貴僧を守り、且つ大般若の守護神たるべし、貴僧の前身は獨體として我頸に懸  
 け置けりと申して、玄奘と與に支那に來られたといふので守護神の一つに列ねたのであり  
 ます、故に回向の文には、「常啼東に請すれば帝釋形を復して歸崇し、玄奘西に求むれば神  
 蛇邪を翻して擁護す」とある、是等の事は單に古代の神話として之を輕々に見るべきもの  
 てはない、神佛の靈鑒は凡慮の測り知る能はざる所に歷々たるものがある、必ず能く之れ  
 を信すれば感應の力は決して空しからざるものである、唯だ之を信じて之に祈禱するに當  
 り、原因結果の理法を味ましたり、人倫道德の原則に背反したりしてはならぬ、勉強せず  
 して富を求めたり、衛生を慎まずして健康を祈つたり、盜賊の商賣繁昌不義者の願望成就  
 こんな間違つた御祈禱はイクラ致したとて、罰こそ當れ、効目のあらう筈はない、古人も  
 「人事を盡して天命を待つ」といひし如き、己れの精力のあらん限りを盡して而して其の  
 及ばざる所を希ふこそ、眞の祈禱と申すものであります。

### 六、智徳の總府

金光明經玄義には三種の般若を説き、圓常大覺即ち佛の正覺には三種の徳あるを三般若と名くと申してある、第一は實相般若、是は宇宙に遍滿せる絶對の眞理である、第二は觀照般若、是は觀照即ち吾人智力を以て宇宙の實相を徹見たことと即ち證悟である、第三は方便般若、是は諸法差別の相を分別し方便運用の徳を現はすのであるから、四枚の般若等は盡く方便の妙徳であります、觀照般若は智に屬し、方便般若は徳に屬す、智と徳の相合して始めて實相般若たる宇宙の大精神と我等とが一枚になる、我と道とが一體になつてこそ始めて聖人賢人とも成る事が出来るのであります、我と道と一體となるべき正徑は唯だ我宗相傳の御戒法を以て最善最良の法門と稱すべきである、されば之を受戒入位と名け如何なる惡人凡夫でも、一度至心懺悔の志を發し、心のドン底から從來の非を悔ひ改めて身口意の三業を清淨にし、而して佛祖直傳の御戒法を相續し奉り、寢ても寤ても之を信受して忘れざる時は、此身此儘が宇宙の眞理に契合して取も直さず、三世諸佛の御仲間入りぢや、扱て其御戒法は總體で十六箇條であるが之を約ひれば、信と行との二門を出てぬ、信とは佛法僧の三寶を信仰することであるが、此三寶は宇宙眞理の權化なのであるから之を信じ奉るのがやがて眞理を信じて眞理の徳用を我等の心と身とに顯はすのである、次に行とは

未來際を盡して諸の惡を離れ衆の善を行ひ更に進んで一切衆生を利益すといふ三大行に歸するぢや、此三大行が縁に觸れ物に應じて種々の徳を現はし、他の生命に對すれば、不殺生の禁となりて放生の業となる、他の財物に對すれば不偷盜の禁となりて清廉潔白の行となる、是の如き實踐的條項を十戒に分けて示されたのです、我等は一念之を守れば則ち一念の佛、一日之を持てば即ち一日の佛、生々世々之を護持すれば即ち生々世々の佛様ぢや、凡そ世の中の人々を智と愚と即ち利口と馬鹿とに區別すれば四通りある、一には利口の馬鹿、是は智慧ありて徳行なき者、即ち論語讀みの論語知らずの類、二には馬鹿の利口、是は學問も教育も無けれども好く修まれる者、四には馬鹿の馬鹿、是は智識もなく徳行も無き者、も辨まへて且つ徳行の好く修まれる者、四には馬鹿の馬鹿、是は智識もなく徳行も無き者、此中馬鹿の馬鹿は昔は多かつたが今日は少ない、其代り利口の馬鹿が段々と殖えて來る傾がある、故に眞實の般若を普く一切に及ぼして、相共に智徳圓滿の域に進みたいものであります、故に般若を以て或は眞空の一方を説いたる高尚なる教理とのみ思つたり、或は現世利益のみに適用すへき法門とのみ思つたりしてはなりません、般若は宇宙の大精神より發したる妙智妙徳でありますから、六百卷の大經文は實に人間智徳の總府にして今世安穩

後生善處の大功德は盡く此中に存するものと心得ねばなりませぬ。

### 七、般若の功德

般若の功德利益に關する實例を擧ぐれば、古今の事蹟に於て數量りも無い事であるが、之を目前の災禍を免れたる利益と信仰上の靈感と、實踐上の效驗との三に分けて簡単に御話しをして見やうと思ふ。

昔し大阪の或る商人の番頭が主用にて丹波に趣くとて或る山中にかゝりますと、頻りに睡氣を催ふし、覺えず松の木の下に腰を懸けて居眠をしたぢや、其時他の一旅人が其處を通りて不圖其番頭さんを見ると、こは如何に長さ丈餘の大蛇が番頭の頭の上に首を延ばし大口を開て一口に之を呑まんとして居る、すると番頭のさして居た脇指が獨手に三寸許り抜け出る、大蛇は之を見ると頸を引込す、良ありて再び呑ふとすると亦もや脇指がスルリと抜ける、そこで大蛇は到頭其處を立去りました、彼の旅人の此刀こそ古今の神刀ならんと思ひ、大阪に出て之を刀師に見せしに、一兩の價も無い鈍刀とのことと、そこで不思議に思ひ能々其刀を調べて見たるに、鞘の奥に大般若の御札が入つて居つたと申すことである

次に信仰上の靈感も數へ切れぬ程ぢやが、支那に李通といへる者があつて紺紙金泥の大般若を書寫せしに或夜の夢に無數の金色の佛が空中に充滿するを見た、傍に一人の翁が居つて是に六十億四十萬の大般若の文字の一々が、盡く佛體と爲つたのであると申したそうす、其他門頭に大般若の御札を貼り置きし爲めに、怨靈の祟りを免れたとかいふ様な因縁も澤山ある。

其反對なる誹謗の現前に就て申せば、天保十五年正月廿日羽後國由利郡龜田町龍門寺の焼失せし時、高山某なる者領主より本堂再建の事を命ぜられしに、或夜親類と酒を酌み乍ら禪僧は常に大般若を轉讀し乍ら火災に罹るを見れば經文などには何の功德も無い、然るに之を再建せんとするは領主の不明なり杯と、散々に氣焔を吐いた、親類の人々は其様な勿體ない事を申さるゝなといひければ、某は般若の札を袂より出して、予は廁に行きて之を落紙にせんとて廁に上りしが何時迄も歸らざるに依り、其妻が燭を點じて廁に至り見たるに、某は御札を握りしまゝ倒れ臥してありける、翌日漸く正氣に返りしが激烈なる痲病を發し廿日餘りを過ぎて舌根に腫物を生じ、四十日間も非常に苦しんで恐ろしい死を遂げたと申す事です、佛法は怨親平等の慈悲を以て國土國民を利益し玉ふのであるから、如何に

之を誘ればとて復讐的に罰を當てる杯と云ふ事は無いが、正法を誘り眞理を味ます爲め自然に天の罰を受くるので、所謂自業自得であるのぢや、乃ち邪見邪慢の爲めに善神身を離れ、惡魔便りを得るのであります。

次に實踐上の効驗に就て申せば、寛政年間京都に大黒屋傳兵衛といへる人があつた、大の佛敎信者で法名を智明と申し、經學を好み、粟田流の書を能くし、且つ非帝なる慈善家であつて貧民を恤み洪水の患を救ひ京都と大津との間三里の處に常夜燈を設けて旅人を益し其他癡疾不具を感み、醫藥を施す等、四十年一日の如く専ら一身を公益と慈善とに貢獻した、或日歌の中山清閑寺の智眞和尚其名を聞きて案内もなく傳兵衛の室に入りしに、傳兵衛は帳合をして居つた、和尚は唐突に御身は常に佛法三昧との事なるが今は何をして居らるゝやと言ひければ、傳兵衛は隙さず、私は今大般若經を轉讀して居りますと答へた、更に和尚は御身の大般若未審功德多少と問ふた、すると傳兵衛は、左様です、此大般若を熱心に且つ正直に轉讀すれば、以て父母に孝養し妻子を扶助し、奴僕に至る迄飢を知らず寒を知らず、且つ窮民を恵み貧民を賑はす等其功德廣大にして、測り難しと答へた、和尚大に感じて御身は實に泥中の蓮なりといふて夫れより無二の知音となつたとある、此等は

全く般若の妙徳を生計上家庭上に應用したもので、斯くしてこそ始めて佛法が生きて來るのである、さすれば苟も佛法を信ぜんものは専ら般若の本體と妙用とを尊重して他の枝葉に拘泥せざらんことを要するぢや、而して大般若の功德利益に對しては寸毫も疑なく、之を尊信し奉ると同時に一面には日々夜々の立居振舞より社會百般の施設に至る迄、盡く大般若の大精神を自在に運用するの心得が肝要であります、我宗門の本領より見れば、般若は戒法の異名にして戒法は吾人の一心の徳相である、乃ち三學一如修證不二の妙道は此より通ずるのであります、先づ今席は是にて終結を告げ、更に他日を期して委しき御話に及ぶことゝ致します。

參

考

●玄奘三藏。師は唐の河南洛陽の人、俗姓は陳氏、母は張氏、幼名を禪と云ふ、兄の長捷法師に誘導せられ、東都の淨土寺に至り、始めて佛敎を聞き、尋いて法師に就き、『涅槃』『攝大乘論』等を學ぶ、然るに偶、『起信論』を読み、眞如緣起の説に於て疑を抱き、遠く印度に遊びて佛典を究めんと欲し、太宗皇帝、貞觀三年、上表せしも許されざるを以て、

竟に脱して玉關を出て、支那土耳其斯坦より中央亞細亞に入り、南下して北印度を通過し、同七年、中印度に至り、更に王舎城に入り、那蘭陀寺に戒賢論師に遇ひ、瑜伽、唯識の二宗を學び、同十九年を以て支那に歸る、言語風俗、殆んど梵僧の如し、帝、命じて、洛陽の弘福寺に於て譯經せしめ、更に玉華の慶福殿に住せしめ、益翻經に努めしむ、師譯するところ精詳にして玄理を盡くす、麟徳元年二月五日壽六十五にして寂す、帝、哀悼し、ために朝を輟むること三日に及びと云ふ、その如何に尊信せられたるかを知るに足る。

●大般若經。大般若經は六百卷より成り、唐玄奘三藏が顯慶五年——龍朔三年（西暦六六〇——六六三）の間に譯せる處、四處十六會とて、鷲峯、祇園、竹園、他化天の四箇處に於ける説法である。

- 初分、(鷲峯の説法)四百卷。
- 第二分、(高)七十八卷。(これに三種の異譯がある)。
- (一)西晋竺法護譯、光讚經、十卷。(二)西晋無羅叉譯、放光般若經二十卷。(三)後秦羅什譯、小品般若經(二十七卷)第三分。(同)五十九卷。
- 第四分、(同)十八卷。現存異譯に五種あり、(一)後漢支謙譯、道行般若經十卷、(二)吳支謙譯、大明度經六卷、(三)秦曇摩婢譯、摩訶般若鈔經五卷、(四)後秦羅什譯、小品般若經十卷、(五)宋施護譯、佛母出生三法藏般若經、第五分(同)十卷。

- 第六分(同)八卷。(異譯一、陳月婆首那譯、勝天王般若經七卷)
- 第七分(祇園の説法)曼殊室利分二卷、現存異譯二種 (一)梁曼陀羅仙譯、文殊所説般若經二卷、(二)梁僧伽婆羅譯、文殊般若經一卷、前者は寶積經第四十六會に編入)
- 第八(同)那伽室利分一卷、異譯、宋翔公譯、滿首菩薩無上清淨分衛經二卷)
- 第九(同)能斷金剛分一卷、これに五種の異譯がある、(一)姚秦羅什譯、金剛般若經一卷、(二)元魏菩提流支譯、同一卷、(三)陳眞諦譯、同一卷、(四)隋笈多譯、金剛能斷般若經一卷、(五)唐義淨譯、能斷金剛般若經一卷
- 第十(他化自在天宮の説法)般若理趣分一卷、五種の別譯がある、(一)唐菩提流支譯、實相般若經一卷、(二)唐金剛智譯、金剛頂瑜伽經一卷(三)唐不空譯、大樂金剛不空眞實三摩耶經一卷(四)宋法賢譯、徧照般若經一卷(五)宋法賢譯、不空三昧大教王經七卷
- 第十一(祇園の説法)
  - 布施波羅蜜分五卷
  - 淨戒波羅蜜分五卷
  - 安忍波羅蜜分一卷
- 第十二(同)
- 第十三(同)
- 第十四(同)
- 第十五(鷲峯の説法)
  - 精進波羅蜜分一卷
  - 靜慮波羅蜜分二卷
- 第十六(竹園の説法)
  - 般若波羅蜜分八卷

### 四 涅槃忌法話

(八大人覺)

#### 一、發菩提心

此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなり今是の如くの因縁あり願生此娑婆國土  
 此來れり見釋迦牟尼佛を喜ばざらんや(修證義第廿六節)  
 此御文は曹洞宗高祖大師の御親訓であつて、苟も佛教を信ずる者は平生底に於て此御親訓  
 を以て信仰の基礎とせねばなりませぬ、何故なれば佛教の大功德を獲んと欲せば先づ第一  
 に菩提心を發得するところが肝要です、菩提は梵語で支那には道とも覺とも譯してあるから、  
 ツマリ菩提心とは佛道を求め佛意に歸依するの心である、一口にいへば道心である、獨り  
 佛教信者のみならず苟も人間としての道徳を全ふせんとする者は必ず道心を發さねばなら  
 ぬ、道心があつてこそ人間の行爲が眞に價値あるものとなるのである、幕末の偉人吉田松  
 陰先生は幕府の忌む所となつて牢獄に投ぜられたが、獄中でも猶ほ孟子の講義をして居ら  
 れたそうぢや、聴く者は氣が氣で無い、今にも殺される命であるに書物の講釋を聞たから

とて致し方がないと思ひ、それよりも何にか面白き話しても承はりたしと申せしに、先生  
 は容を改め、扱々心なき事を言はるゝかな、死生命ありとは三歳の童子も猶ほ知る所なら  
 ずや、縦ひ壘の上に坐し錦の褥に包まるゝ身なりとも天命來たる時は忽ちにして死なねば  
 ならぬ、命數の盡きると盡きざるとは必ずしも獄中に在ると否とは關はるものではない  
 人間といふ者は縦ひ一日でも此世に在る中は、暫時も離るべからざる者は道である、故に  
 中庸には「道は須臾も離るべからず離るべきは道に非ず」とあるては無いか、道は人の生  
 命である、道なき人は人に非ず、一日道あれば一日人たるを得べし、故に予は諸士の爲  
 めに道を講ずるのであつて決して孟子の章句を摘むのでは無いといはれたそうぢや、吾々  
 人間たる者は誰でも是の如き心得が無ければなりませぬ、而して此道ある心を發するには  
 此人間の身を受けて此世に生れて來た吾々こそ最も好適の位地を得て居るのである、南閻  
 浮の人身といふは吾々人間の身を指したのであります佛教では此世界は須彌山の南方に當  
 つて居るといふので南洲と稱します、閻浮は樹の名である印度には澤山ある喬木なそうぢ  
 や此樹を以て此世界に名けて南閻浮といふたものです、吾々人間には萬物の靈長たる身と  
 心とを具へて居る、就中此心なるものが智識徳行の源泉であつて、磨けば磨く程無限に發



達すべき性能を有して居る、人間以下の衆生は悪業の障りが重いから此性能を現はすべき力用が無い、又天上界の衆生は果報の勝れて居る爲めに世欲に耽りて却て道念を發すべき機會に乏しいと申すとてあります、吾々は幸にして此人身を受くべき因縁に遭遇する事が出来たのは實に喜びの中の喜びといはねばならぬ、是れ全く前世の願力堅剛なるが爲めに此娑婆に生れ來つたものであるう娑婆は梵語で支那に忍土又は忍界と譯して居る、堪忍世界といふ意味ぢや、此世に生れた者は内諸の煩惱を忍び外寒暑風雨等の苦しみを堪へねば、人生の目的を全ふする事が出来ぬから、堪忍世界と名けたものぢや、吾々は前に述べた通りの果報勝れし娑婆界に生れ殊に釋迦牟尼佛の正法に値ひ奉りしは、面り佛を見奉ると寸分違ふ處は無ないのであるから、實に此上も無い喜ぶべき身の果報ではないかといふのが、先刻讀上げたる贊題の大意であります、併し寶の山に入り乍ら手を空にして返るといふ様に、折角復と得難い果報を受けて居ても、肝心なる道心をも發さず又道心を實現すべき修養の心得も無く、唯だウカ／＼と生涯を送つた分ては何んの生れ甲斐も無い譯であります、然らば如何なる標準に依て道心を發起し且つ増進すべきやといふに、我が本師釋尊が御涅槃の砌りに御遺訓として御示し下されたる八大人覺の御教こそ、最も適切なる標準であら

うと思ふ、我高祖承陽大師は建長五年八月廿八日、(太陽曆の九月廿九日)の御入滅であるが、其年の正月六日に特に八大人覺一篇を書して御示し下されました、又太祖常濟大師は正中二年八月十五日(太陽曆の九月廿九日)の御入滅ぢやが、其月の八日より特に御弟子達の爲めに八大人覺を御提示あらせられたとある、殊に高祖大師は、此八大人覺を知らざらんは佛弟子に非ず、此八大人覺は正しく如來の正法眼藏涅槃妙心なり、吾々は必ず之を習學して生々に増長し、必ず無上菩提にいたり衆生の爲に之を説かんと釋迦牟尼佛に等しくして異なるとなからんとまで仰せ下されてあります、八大人覺といふは法門の數が八あるから八乃ち少欲、知足、遠離、精進、不妄念、禪定、智慧、不戲論の八ヶ條です、大人は佛のと、覺は覺悟又は覺知の義、獨り佛の覺知して實行し玉へる法門なるを以て八大人覺と稱したのである、故に今日の吾々も能く此法門を修學する時は、取も直さず眞實の菩提心を發起し増進して立派に佛の境界ともなるとが出来るのであります。

### 二、少 欲

先づ第一が少欲です、少欲とは欲を少なくせよといふ御語であるが、是を禁欲主義とのみ

思ふては大變な間違ひである、少といふは適當なる制裁を加へよといふ意味なのであります、人は生れ乍らにして必ず欲といふものを持つて居る、生命の欲、財産の欲、色情の欲、名譽の欲、食物の欲、安息を求むる欲、此等は人間通有の欲である、此欲あるが爲めに人間は自づと活動して居る様なものである、併し何等の制裁もなく紀律もなく唯だ欲のまゝに欲を起したならばどうであらう其結果は親は其子を虐待して顧みず、子は其親を苦しめて耻ぢず、兄弟朋友妻子親族互に欺き互に誑はりて丸て畜生にも劣る有様となるに相違ない、古今の犯罪者とか大悪人とかいふ者を見るに、盡く無節制なる欲念が罪惡の原動力となつて居る、汽車に二筋の軌道あるが如く欲にも必ず退て堅く守るべき常軌が無ければならぬ、今の少欲と仰せられたるは、自ら其欲を制するに人倫の常軌を以てし、如何なる場合に於ても其軌道を逸せざれとの御訓戒であります、デカートが作つた處世上の格言なるものに四箇條ある、乃ち一に「人は己の教育せられたる法律と宗教とに身を委ねよ」是れ一種の菩提心である、二に「活動すべき場合に於ては神速に且つ自己最良の判断に従つて活動せよ」是れ己れを欺かざるの勇氣である、三に「己の願望を満足せしむるよりは寧ろ之を制限して幸福を求めよ」是れ正しく少欲の意義である、四に「眞理を捜求するを以て

一生の務めとせよ」是れ向上的修養の基礎であります、論語に「富と貴ときは是れ人の欲する所なり其道を以てせずして之を得れば處らず」といふ、孟子に「其義に非ず其道に非ざれば之に祿するに天下を以てするも顧みず」とあるが如きは、皆な少欲を説いたものです、故に少欲の修養は人間の道徳を進むるの根底とも謂ふべきものであります。

### 三、知足

第二に知足とは、足るを知るのであるから、吾々が自分の位地と分限とを自覺して、忠實に其職務を守り其分限を盡し、毫も不平不満の心を生ぜざるの謂である、尤も吾々人間は常に向上心を起し、卑きより高きに昇り小より大に進むの志氣を具へねばならぬものはあるが、其志氣を貫徹するには法則に合ふたる秩序を履みて進まねばならぬものです、故に今日には今日の職分あり明日には明日の位地あるを以て、今日は今日の職分を堅く守り明日は明日の位地に相當したる業務に服し、而して之を守ると最も忠實なるべく之に服すると最も至誠なるを要するのである、若し妄りに不平を抱き不満を訴ふるが如きとあらば、決して完全に其職分を守り其業務に服するとは出来ませぬ、貧乏人が金持の眞似を爲

やうとしても出来るものではない、下級の者が上級の人の真似を爲やうとしても出来るものではない、故に貧乏の時は貧乏人相當の職分を盡し下級の中は自身の階級に適當なる生活を爲し、以て自己の權利を保任して各自の義務を全ふするのが人の人たる道であります、古人は「らしくせよ」といふとを申してある、即ち男は男らしく女は女らしく親は親らしく子は子らしく、夫は夫らしく妻は妻らしくせねばならぬ、主人が主人らしくからず奉公人が奉公人らしくからず、商家が商家らしくからず農民が農民らしくからざる時は、家庭を治むることも職業に精勤するとも出来ぬとなる、此「らしく」主義が取も直さず知足の行である。若し足るとを知らざる時は徒らに他人の財を羨み妄りに他人の權利を侵さんとし不義の富貴をも貪ぼり不相應の奢りをも敢てするに至る、人間の煩悶と罪惡は多くは是れより生ずるのであります、之に反して足るとを知り分に安んずる者は、縦ひ縊を纏ひ鹽を嘗めて九尺二間の陋屋に住するとも、職を盡し道を樂しみ心地坦然として俯仰天地に慙ぢぬに依て其精神上の快樂は高位貴人にも勝るものである、又縦ひ車を挽き泥を被りて奴隷同様の境遇に在るとも、能く因縁を誦らめ分限に安んじ品行方正にして道徳を修むる時は、其人格上の價値は賢人君子にも劣らぬものである、故に遺教經に「知足の法は富樂安穩の處なり

と仰せ下された通り、足るとを知るは精神上に富貴快樂を得る所以の法である、「傳家法」といへる書物には「足るとを知る者は身貧けれども心富む、得るとを貪る者は身富めども心貧し」といひ、古歌には「事足れば足るにまかせて事足らず足らて事足る身こそ安けれ」とある、故に吾々は一面に進取の志氣と勇氣とを備ふると同時に一面には分に安んじ足るとを知り、「家に儉石の備へ無くも心に天地の春を有つ」底の餘裕を存せねばなりませぬ。

#### 四、遠離

第三は遠離です、遠離とは遠く人生の雜沓を離れて身を閑寂の地に置くことである、併し一般人は中々人生を離るゝ事杯は出来るものではない、高祖大師は遁世即ち遠離の旨意を論じて「遁世と云ふは世人の情を心にかけるなり、たゞ佛祖の行履菩薩の慈悲を學して諸天善神の冥に照す所を慚愧して佛制に任せて行じもてゆかば一切苦しかるまじきなり」と御示し下されてある、此御示しに従ふ時は、縦ひ人生の最只中に在りて人事上に活動して居ながらも、人生の爲めに束縛せられず、超然として心を古今不變の大道に遊ばしめ且つ清淨なる信念を培養し得ば、此身此儘が遠離解脱の境界となることが出来るものぢや、乃

ち大燈國師が「坐禪せば四條五條の橋の上往來の人を深山木に見て」と詠まれた様に、社會に處しても社會の爲めに誘惑せられず、人事を營んでも人事の爲めに妄念を起さず、常に心の奥底に佛の道を蓄ひ聖賢の教へを守るからして世間も出世間も同様ぢや、人の人たる道を全ふせんと欲する者は是非とも是の如き修養を存するに必要であります。

### 五、精進

第四は精進ぢや、精進とは精はクワシクと訓じ純粹にして雜り氣の無きと、進はス、ムと訓じ自己の目的に向て進歩向上し如何なる困難に遭遇するとも斷じて退かざるの謂である、普通語を以て言はゞ、勤勉努力するにあり、怠惰は貧乏の門戸、勉強は幸福の母日に勵み月に進で息まざれば、如何なる難事と雖も成し遂げられぬといふとは無い「困難愈々甚しければ愈々多く勞苦を爲すべく、危険愈々甚しければ愈々多く勇氣を顯はすべし」とは古人の格言では無いか、世に天然の釋迦なく自然の彌勒なし、大聖人も大賢人も學者も英雄も皆勉強の賜である、されば一向出生菩薩經には「阿彌陀佛は昔し或る國王の太子たりし時此微妙の法門を聞て奉持精進し七千歳の中脇席に至らず意傾動せず」と説てある、

善導大師は念佛門の祖師ぢやか堅く大戒を護持して寸毫も犯さず、四十餘年の間別に寢處を設けず堂に入て念佛し寒冷の時と雖も必ず汗を流し氣竭るに非ざれば息まれないとある、況てや禪門の高僧の如きはまた格別で二祖大師は達磨大師に參ぜし時夜半に雪中に立ち左の臂を斷斬て大法を求められ、雪峯禪師は晝夜坐禪して坐蒲團を布き破ると十八枚であつたとある、河事も精進力に依らざれば成功を見るときは出來ませぬ、然るに吾々は兎角に安逸を以て幸福の如くに思ひ、動もすれば、どうか遊んで居て食べられる様な身分になりたいものぢや杯といふ考を起し易いものです、故に此等の考から小成に安んじ少しく御金でも溜れば直に樂隱居でもする氣になる、而して此根性が人間の果報を失墜して惡道に墮落せしむる原因となるのであります、佛作佛行を以て未來永久の目的とするの志があつたならば、死んでも精進は息められぬ筈です。

### 六、不 忘 念

第五の不忘念は、忘れずに念ずるといふのであるから始終一貫して正念を相續するに於て、正念といふは、私を棄て、道を守らんとするの念力と、佛の御教を尊信して常に之を守る

の念力とてある、換言すれば道念と信念との二つです、信念なき道徳は堅固ならず、道念なき信念は正しからざるを以て、此二つの念力の相融合したのが眞の正念であります、吾々は幸にして此正念を發するとが出来ても、見る物聞く物の爲めに精神が惑亂してイツの間にか正念が藏れて了ふとが多いものぢや、故に遺教經には「若し不忘念ある者は諸の煩惱の賊則ち入ると能はず、乃至、若し念を失する者は則ち諸の功徳を失す」と御示し下されてあります、佛敎には發心決定心相續心の三心を説てある。

發心とは最初求道の志を發すると、決定心とは彌く其志しが決定して信念の確立したると、けれども種々の境遇に觸れて其信念が薄弱になることがあるから第三に相續心といふとを勸めたのだ、乃ち一旦決定せる信念が永久無間斷に相續して威武も之を屈すると能はず富貴も之を淫すると能はず貧賤も之を移すと能はずといふ處まで進まねばならぬ、此信念にして能く相續する時は、如何なる場合に臨み如何なる時節に廻り逢ふとも、微塵も動搖するものには無い、却て其場合と時節が信念を増長するの因縁となるものぢや、畫師の良秀といふ者は火事の爲めに自分の家が焼けるといふのに欣々然として炎の燃へ上がるを見て居つた、人怪んで其意を尋ねしに、彼は之に答へて「今日始て火炎を描くの妙術を習ふた」

と申したそうぢや、又或る勉強家の青年が友人に誘はれて始て演劇を見て、非常に感服して居たが、それからといふものは一層勉強に身を入れた、友人が再び觀劇を勸めたるに彼は、「此程演劇を觀しに俳優なる者は此暑いのに鬘を冠り綿入を着て舞臺の上で踊つて居た、私は之を見て處世上の心得を悟つた、乃ち暑さをも暑しとせず働かねばならぬといふとを感じた、夫故に自身の目的を達する迄は飽迄勉強する覺悟である」と答へたそうぢや、正念相續する者は見る物も聞く物も盡く吾が善知識となるものであります。

### 七、禪定

第六は禪定ぢや、禪定の禪は梵語で翻譯して定とも靜慮ともいふ、心の散亂を靜め寂定の状態に安住するを以て定といひ、妄念思慮を打ち靜める邊から靜慮ともいふ、吾々凡夫の心といふものは兎角外境を追ふて色聲香味觸法といへる六塵の巷を飛び廻はり、爲めに吾我名利の妄念を起し貪慾瞋恚愚痴の三毒煩惱を幻出し、其結果は遂に種々の惡業を造り無量の苦しみを招くに至るものぢや、故に先づ以て其散亂せる妄念を靜めて一心を湛寂にして以て煩惱惡業の窠窟を打破するのが禪定であります、若し心の散亂に任せて居たならば決

して正しき智慧を研くとは出来ぬ、平日の仕事をしたり學問をしたりするにも心が落付て居らねば出来ぬものです、況てや真正なる智慧を鍊磨せんには第一に妄念を制するところが大切ぢや、故に遺教經には、「若し定を得る者は心則ち散せず」とも、「智慧の水の爲めの故に善く禪定を修して漏失せざらしむ」とも、御示し下されてあります、尤も今日禪宗と稱する宗門に於ける禪定は決してこれのみの意味ではありませぬ、此禪定が非常に發達して禪力に依りて八大人覺全體の功德を總合完成したのが、禪宗の禪である、此事の詳しき説明は他日に譲るとして今は略して置きます。

昔し六祖慧能禪師が既に五祖の衣鉢を相續はせられたがマダ盧行者と稱して在家の姿で居られし頃南海に至りて法性寺といふ御寺に宿られた、其時二人の僧があつて寺の門前に立てたる幡が風に吹かれて動くのを見て大議論を闘はした、一人の僧は、「幡に動性ありて動くのである」といふと、他の一僧は「これは風に動性ありて動くのである」といふて互に一步も譲らず論量をして居つた、ツマラぬ議論の様ぢやが此中には中々理窟のあるとぢや、其時盧行者は兩人を論して「風動といふも幡動といふも皆一面のみを見た識見に過ぎぬ、是の如き議論は佛法に於て更に益なきものである、佛法の正眼より見來れば元來風動にも

あらず幡動にもあらず、是れ實に仁者の心動である」と示された、といふとぢや、此心動の一語は實に佛法の極意を道ひ盡された御教へてあります、吾々にして眞實精神の汚濁を洗ひ徳性の根底を淨めんと欲せば、先づ以て心動即ち心の散亂妄動を靜むるとが緊要です、是れ則ち禪定の第一歩でもあり且又其の終極でもあるのであります。

### 八、智慧

第七が智慧である、智慧といふと直ぐ學文技藝といふ様なものを聯想したがるものであるが、今こゝていふ所の智慧は少々意味合が違ふて居ります、無論愚癡の反對が智慧であるには相違ないが、此愚癡障には二通りあります、一には迷理の惑といふて眞理に迷ふ者、乃ち斷見常見等の邪見をいふ、二には迷事の惑といふて諸法の事相に迷ふ者乃ち外物に轉せられて欲の奴隸となるをいふ、如何に學文が出来て利口であつても、若し邪見に墮ちて或は神佛の存在を疑ふたり因果を撥無したり靈魂斷滅を説いたりしては、依然たる愚癡の衆生といはねばならぬ、又如何程倫理道德の學に通じ法律制度の道に達しても、其人の心行が正しくなかつたり品行が修まらなんだりしては、決して智慧ある者とは申されぬ、此等の

人は學文の事を喋べる丈の機械であつて、學文を有する活人とはいはれませぬ、故に遺教經に釋尊は「汝等當に聞思修の慧を以て而も自ら増益すべし」と仰せられてある、聞とは正法を耳に聞くと、思とは其理を究むると、修とは之を實行するとす、此實行があつてこそ始て眞に智慧ある人と申されるのぢや、實行なき者は學文の機械たるに過ぎぬ、今日教育の盛に行なはれて居るにも拘はらず道徳が廢つて居るといふのは、ツマリ學問の機械ばかり殖えて來たからであります、魯の哀公が孔子様に向つて「予は此程甚しく物忘れをする者を聞た、そは其者が家を徒した時自分の女房を忘れたと申すとぢや」といはれると、孔子様は之に答へて「それはマダ忘るゝとの甚しき者ではありませぬ、眞に甚しき者は女房どころか自分の身すら忘れて居ります、昔の夏の桀王の如きは貴きと天子たり富天下を有し乍ら無道を行ふて國遂に亡ぶ、これが忘るゝとの最も甚しき者であります」といはれたそうぢや、我國でも關白秀次は人を殺すとが道樂であつたから殺生關白といはれた程です、此秀次が或時六郷義郷に向て「世の人は随分物忘れをする者が多いと聞くが予は頗る記憶力に富んで居る」といふと義郷は之に答て「イヤ殿下の如きは、關白といふ貴とい位地に上り乍ら、妄りに人命を殺して自ら樂みと爲すと聞く、關白は民の父母も同然である

に父母にして其子を忘るゝは、是れ忘るゝとの甚しき者であらうかと思ひます」といふたとある、道需禪師は聞思修の三慧を喩へて、「聞慧なきは覆器の水を受ると能はざるが如し一て倒さにした水瓶の様なもの一滴の水も入らぬ、又「思慧なきは漏器の受くと雖も而も失するが如し入れて入れた水も皆な漏れて少しも溜まらぬ、又「修慧なきは機器の漏失せずと雖も穢れて用ゆべからざるが如し」て、實行しなければ何の役にも立たぬといふてあるが、實にその通りであります。

### 九、不 戲 論

第八は不戲論です、戲論とは戯むれ言といふので俗に冗談、滑稽、駄法螺などいふ様に道理の根據を有せざると、言ひ換れば何等の意義も無く、確實なる論理もない無駄事を戲論と申すのであります、縦ひ立派なことを言はふとも、單に世間有爲の法にのみ止まつた事ならば佛教から見ると矢張一種の戲論です、「一切有爲の法は夢と幻と泡と影との如く、露の如く亦電の如し、應に是の如きの觀を作すべし」とは金剛經の金言である、人生觀來れば大夢の如し、其人生の間に在りて名を貪り利を漁り五欲の香を追て六塵の影を尋ね、惜

い欲い憎い愛いといふて、朝から晩まで七顛八倒して居るのが凡夫の常態ぢや、が、彌く一息截断の時に至りて一生涯の行事を振回つて見たならば、果して何物が残つて居りませう、未來までも擔ていつて三途の川原に於て正々堂々と閻羅王に向つて報告して、其讚歎を受け得られる様な手柄がドコにあります、遠伯玉は五十にして四十九年の非を知つたといふて居る、自己本位から割出した一代の功業は多くは愧かしい事のみであらうと思ふ、僅か厘毛の争ひから大喧嘩をしたり、有りもせぬ名譽の爲めに權利を争ふてみたり、口腹の爲めに由なき罪を作つたり、人を苦しめて面白がつたりする人が少なく無い、人間界のする事を真面目に研究して見たならば、百の九十九までは戲論の業といはねばならぬ、或勝負事をする者が蛙の鳴聲に就て、勝て戻る時はカッタ／＼と聞へ、負けて返る時はハダカ／＼と聞ゆるといふたそうぢや、又或者は金持の家へ行くと時計の音がチヨキン／＼と聞へ、貧乏人の處へ行くとシャツキン／＼と聞へる、當世風の若者が歩くと靴の音がゲツキウ／＼頑固な老爺だとキユウクツ／＼と聞へるといふたそうぢやが、世の中の喜怒哀樂は大概之に類した事より生ずるものぢや、佛様の如き三世通達の眼大慈大悲の御心より見る時は、實に老病生死の大海に我見我慢の波を起して、自らそれに浮きつ沈みつして居る

様なものであります、故に此等の迷執煩惱を解脱して宇宙の大道天地の妙理、永久不滅の大真理を以て精神の住居と爲し、未來永遠の大理想を確立し、現在の一步一步を慎んで利那々々にその大理想に向て向上して行くのが、不戲論です、言ひ換れば佛心を以て我心と爲し佛の願力を以て己れの願力と爲し、佛の御教へに此身心を依托して最も愉快に最も公明正大に道を守り道を行なひ道を運轉無礙にし去るのが不戲論であります、我が宗門の上ていへば、懺悔の一念に身口意三業の罪垢を洗ひ淨め、佛祖正傳の大戒を稟受して此身此儘佛の御位に證入して即心是佛の大安心を決定し、更に大慈悲心を培養して未來際を盡して普く一切衆生を利益せんとの大願心を起し、日々の行持を慎しみて其本分を盡し其義務を全ふし、所謂道德的生活を任持して以て國家の大恩父母祖先の洪恩に酬い一切衆生の恩分にも酬い、佛祖の慈恩に報答し奉るのが真の不戲論であります、古人は戲論に二通りあるとを説て置かれた、一には知識上の戲論、乃ち空理空論に耽るの類、二には行爲上の戲論、乃ち無意義の生活をして居る輩のとてす、併し一口に申せば完全なる信念を有せざる者の生活は總て戲論といはねばなりません、よしや少欲知足の徳を守り、遠慮精進の行を勵むとも、内に確實なる信念なき時は矢張戲論滑稽の人たるを免れぬ、故



此不戯論を一番の終りに置かれたものであります。

### 十、大人の修養

全體今日の世の様を眺めると、如何にも名利世界の様に思はれる、人間一世の目的を以て名譽と利益との二ツに歸して居るのが現代の状態であるまいか、名譽は人に取って最も貴きものゝ一つではあるが、名譽なるものは元來人格の價値を表彰する徽章である、人格の價値なき者が名譽を得るのは、乞食が御大名のマ、事をする様なもので一の滑稽劇を演ずるに過ぎぬ、淨瑠璃本の太閤記の中に光秀の母が誤つて光秀の爲めに鎗で突かれし時自ら主を殺せし我子の天罰が親に報いられるものと明らかめ、斷末魔の苦しき中にも光秀を誠めて「不義の富貴は浮べる雲、主君を撃つ功名顔、縦ひ將軍になつたとて野末の小屋の非人にも劣りしとは知らざるか、君に背かず親に事へ仁義忠孝の道立たば、もつそう飯の切米も百萬石に勝るぞや」といふてある、人間は是の如き正義の志想が無ければならぬ。他人を突倒しても他人を蹴落しても自分丈は立派な顔をしやうとして是を名譽なりと思ふが如きは、錦に泥團を包んだ様なものであります、又利益とてもその通りぢや、家を富ま

して國家の實力を作るべきは實に是れ現代の急務である、併し所謂不義の富ては何んにもならぬ殊に人間の價値も國家の實力も金錢の力のみて出来るものには無い、金錢の富は眞の實力を現はすべき道具である、黄金萬能主義の悪思想は滔々として天下を風靡し青年ても老人ても多くは此思想の爲めに刻々に道念を殺ぎ取られて居る或人は或學生が友人に不幸ありてその御通夜に赴いたか、棺前に於て丸て金の話して一夜を明して居つたとて大に慨歎して居られた、又或る女流教育家が「私は仕合せ者といふ人程不幸な者は無いと思ふ」といはれた、これもそうぢや、金があつて甘い物を食べて多くの下女を使ひ麗はしき衣服を着け、勝手次第に物見遊山をして、不斷は寝て遊んで費澤して暮して居る様な人のとを、彼の人は仕合せ者ぢやといふて人々が羨むのである、此等の人は世に於て益なく自身に於ても功がない、丁度御飯を食べる人形の様なものぢや、其癖我儘が多いから中々厄介千萬な器械ぢや、かやうな連中は小人中の小人ともいふべきものである。

之に反して釋尊最後の御教訓たる八大人覺の行を習ひ永久不滅の大道あるとを確信しその大道に向て進趣せんとを期し、以て自力々他圓滿の功德海に逍遙するのが眞の大人即ち佛の性格を有したる大丈夫の菩薩である、吾々は斷然志を立て、此大人の徳を成就するの修

養に努めねばなりませぬ、米國十八代目の大統領グラント將軍は我國にも來遊したことがあるが、中々信仰の篤い立派な君子人であつた、氏の嫌ひな物は卑怯者と虚言者であつた、そうぢや、氏が大統領に選舉せられた際、一室に在りて議會に與ふる教書を起草しつゝありし折柄、名刺を通じて面會を求めた客があつた、取次の者は氣轉を利かして「御留守といふて返しませうか」と申せし時氏は大に叱つて「否々斯る言を吐く勿れ、予は如何に劇務の中に在るとも己れを欺くとは出來ぬ」といはれた、又氏は非常に堪忍の強い人にて一生の間に腹を立たとは三回丈であつたとある、其一は自分の部下の一兵卒が婦女子を強姦したる時、氏は勃然として怒り直ちに其兵卒を銃殺した、今一ツはリツチモンドに出陣中一農夫が馬を虐待するのを見て、氏は懇ろに農夫を諭して虐待を中止した、然るに農夫は氏の命に應ぜず益々鞭を擧げて馬を打つたので馬は連りに悲鳴を發した、時に氏は憤然部下に令して「此者を捕へて六時間樹木に縛せよ。馬は最も聰明なる獸類なり、主人にして賢明ならば殆ど凡ての事を馬に教ゆるとを得べきものぞ」といふたとある、此外氏の事蹟には多くの美談があります、兎に角氏は名利以上に大なる信念を有して居つたに相違ない、況や佛の御教を信仰する吾々にして、若し此大人行を持つ志氣が無かつたならば、此一

生は舊に依て妄想窟中の閑活計を打するに過ぎぬ、釋尊の將に涅槃に入り玉はんとするに臨み、諄々として御説き下されたる八大人覺の教は、實は御慈悲の涙の塊まりです、凡夫世界の暗路を照す光明燈です、否世界無比の大聖の大福音です、佛教有縁の人は言ふに及ばず、縦ひ佛教以外の人と雖も此大福音に觸れたる以上は、眷々として之を服膺すること永遠の最大幸福を獲得する所以の道であらうと思ひます。

參

考

●釋尊の年壽。大略三説あり、一は七十九歳、二は八十歳、三は八十歳以上説なり、第一に屬するは、「佛般泥洹經」「方等般泥洹經」、第二に屬するは、巴利「長阿含」の「大般涅槃經」「金光明最勝王經」、第三説に屬するは、「長阿含經」「雜阿含」「毗奈耶雜事」等である。

●釋尊入滅の年代。その異説を詳に記すれば、數十種の多さに達するであらうが、その重なるは左の七説である。

西曆年代

出處

紀元前五四三年……………錫蘭所傳

紀元前四八七年……………スミス氏  
 紀元前四八五年……………スミス氏  
 紀元前四八三年……………善見律毘婆沙  
 紀元前四七八年……………カニンナム氏  
 紀元前四七七年……………マクス、ミューラ氏

●佛滅の月日。「西域記」に曰く「聞諸先記曰、佛以生年八十、吠舍佉月後半十五日入般涅槃當此三月十五日也、說一切有部、則佛以迦刺底知月後半八日入般涅槃當此九月八日也」と、吠舍佉月は印度制咀羅曆の第二月にして吠舍佉月の十五日即滿月の日を以て佛滅の時日となすのである、次に有部に傳ふる迦刺底迦月は印度制咀羅曆の第八月にして迦刺底迦月八日は陽曆十月十三日に當る。

### 五、彼岸會禪話

菩提心を發すといふは己未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり。(修證義第廿一節)

#### 一、彼岸會法要の必要

今日は彼岸會中のことであるから、彼岸といへる意義に關して聊か禪門の教旨を述べて見やうと思ひます、毎年春秋二期に春分秋分の日を中心として前後三日都合七日の間を彼岸と申しますことは、聖德太子から始まりしともいひ、又は延暦廿五年に崇神天皇様の爲めに諸國の國分寺に告げて金剛般若經を轉讀せしめられたのが本であるともいふて、其説も一定し居らぬ様であるが、兎に角天竺にも支那にも彼岸といふ語は正しく佛敎より出でしもの於て始めて定められたものであります、而して彼岸といふ語は正しく佛敎より出でしものであつて、其意義も亦た佛敎的行事であることは疑ふべからざる事實であらうと思ひます、佛敎に於ては凡夫地を以て此岸に喩へ佛果位を以て彼岸に喩へ、佛法の船筏に乘りて煩惱生死の中流を踰へ、以て成佛得道の目的を達するのである、故に彼岸は正しく吾々の目的地である、菩薩の行としては布施と持戒と忍辱と精進と禪定と智慧との六大行である、此

六行は彼岸に到るの船筏となるべき法門ぢやに依て是を六波羅蜜とも名けてあるぢや、波羅蜜は梵語、此に彼岸と譯して彼岸に到るの義である、併し彼岸に到る法門は敢て此六行に限つた譯のものではありませぬ、八萬四千の法門五千餘卷の經文は皆な彼岸の行にあらざるは無い、見佛聞法は何の爲めであるか、追善供養は何の爲めであるかといふに、何れも彼岸の佛果位に回向するが爲めでありませぬ、故に如何に多忙多事の人でも、春秋二期に於て各一週間の中は、三寶を供養して祖先に追孝し、且つ佛の御教を聴聞し佛の道を實踐して、以て罪障を消滅し菩提を莊嚴し、心を治め身を修め徳を植え善を行なはしめんとて、彼岸と云ふ曆日を御定めになつたものであらうと思ひます、併し古とは違ひ今日は社會萬般の事が複雑になり、人心も亦自ら種々の誘惑を被り易いのでありますから、とても一年に二期位の彼岸行ては、精神修養安心解脱の目的を達することは覺束ない、況てや其彼岸七日の間ですら、單に老人連をして御寺参りや團子の供物を備へしむる位に留めず今後は彼岸中其寺々に佛敎講話を開設し檀信徒の信念を増進し道徳修養の基礎を涵養せしめ、佛敎信者の家庭としては召使ひや奉公人に至る迄も佛敎の因縁を結ばしめ、且つ其人の分限に應じては特殊の慈善的行爲を實行せしむる様に致したいものであります。

### 二、彼岸脚跟下にあり

禪門の見地より申せば、彼岸即ち佛果位といふても別に之を遠きに求むべきものでは無い、大梅禪師が馬祖大師に對して「如何なるか是佛」と問はれし時、大師は「即心即佛」と答へられた、乃ち此が是れ佛であるといふこととす、大梅は此一言に於て徹底大悟せられたとある、即心即佛、此四文字こそ佛敎の根底、信仰の基礎であります、釋尊は「一切衆生悉有佛性」と仰せられ、圓覺經には「始て知る衆生本來成佛」とも仰せられてある、然れば吾々御互は皆佛様に寸分變らぬ佛性を具有して居るのである、然るに吾々は何故にその本具の佛性を現はすことが出来ないのであります、是れ則ち信心修行の必要なる所以であります、是に於て御開山承陽大師は正法眼藏生死の卷に於て明らかに成佛道の標準を御示下しされてあります、その御文は、「佛となるにいと易き道あり、諸の惡を作らず、生死に着する心なく、一切衆生の爲めに憐れみ深くして上を敬まひ下を憐れみて、萬を厭ふ心なく欣ふ心なく、心に思ふこと無く憂ふること無し、是を佛と名くまた外に尋ねること勿れ」と申すのである、誠に有難き御親訓であります、此御親訓は自から五種の法門に分ち示されてある、第一に「諸の惡を作らず」といふは道徳的標準です、徹底惡を厭ひ惡を恐

るの心あれば善心自然に發し善行自然に現はるゝものであります、惡を離れ善に進むは正に是れ道德の原則である、第二に「生死に著する心なく」とあるは生死透脱の眞訣である、一期の生死あり刹那の生死あり、念々の生死あり刻々の生死あり、爛熳錦を聯ねたる春の花も夕の風に散りて痕なく、皎潔鏡を懸けたる秋の月も夜半の雲に藏れて影なし、世は皆な無常にして逢ふ者は必ず離るゝことあり、生ぜし者にして滅せずと云ふ事なし、是の如きは定めなき世の定め常ならぬ身の常である、凡夫は是が爲めに迷ひ聖者は是を厭ふて世を離れんとして居るのぢや、併し眞理の手元より見たならば、迷ふのも不可ないが厭ふのも謬まりぢや、唯だ生死の相に對して執着心を離るれば生死の其儘が不生不滅の涅槃であります、執着といふは生死變化の現相に執り着いて、宇宙元來生死なし本性元來常住なることを忘れた事である、菅原道眞公が罪なくして左遷の禍に罹りて筑紫に下り玉ふ時、明石の驛長に對して、「驛長驚くと勿れ時の變改、一榮一落是れ春秋」と仰せられたるが如き、自づと公が生死變化の相に執着せられざる一種の安心を有せられたる事が解るてはありませんか、執着するが故に生に溺れ死に苦しみ順境に迷ひ逆境に泣き、一生役々として遂に安心の分がないのぢや、若し執着を離るれば生死海中に在り乍ら不生不滅の大安樂を

獲得する事が出来るのであります、次に「一切衆生の爲めに憐れみ深くして上を敬まひ下を憐みて」とあるのは、佛祖の大慈悲觀です、佛祖の御心は御慈悲の結晶體である、佛祖の大誓願力も大神通力も只々一切衆生を濟度せんが爲めの妙用たるに過ぎぬ、故に涅槃經には「大慈大悲を名けて佛性と爲す」とも「慈は即ち如來、如來は即ち慈なり」とも仰せられてあります、贊題の御文に「菩提心を發すといふは己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと發願し營むなり」とあるも、取りも直さず佛の御心を以て我心となす事ぢや、菩提心とは菩提を道と譯してあるから、ツマリ佛の道に隨順する心が菩提心で換言すれば佛心の事でありませぬ、その佛心とは己れは未だ彼岸に渡らずして人世の苦痛を嘗むるとも、一切衆生をば利濟して必ずや彼岸に度らしめんことを發願し而して其事を營み勤むるのが佛心の發現であるぞとの御示してある、此大慈悲心が圓滿に發現すれば、三界六道の衆生は皆な我が同胞兄弟なりとの觀念に住し一切の羣類は畢竟我と一體なりとの觀想を發するが故に、萬事萬境に對して之を厭ひ嫌ふの心もなく又之を欣ひ貪ぼるの執着心も無くなりませぬぢや、これが即ち眞の無我である、これを第四に「萬を厭ふ心なく欣ふ心なく」と仰せられたのであります、第五に「心に思ふこと無く憂ふることも無き」とあるは正しく安

心の状態です、思ふ事なしと申しても枯木の様な心になれと云ふ事では無い、思想の爲めに束縛せられず其念ふ事、度ることが一々任運に道に叶ひ理に随ふことである、もつと解り易くいへば、身口意三業の作用が自然に煩惱の纏縛を受けず業障の爲めに苦しめられず、徹底不染汚にし去る事である、承陽大師の御歌に「水鳥の行くも返へるもあとたえてされども道は忘れざりけり」と仰せられた様な境界をいふたのである、斯る境界に達する時は憂へもなく苦みもなく恰も蓮花の汚泥より出て、汚泥に汚れざる如く、娑婆即寂光浄土の妙樂を感ずる事が出来るのであります、以上五種の法門ありと雖も、歸する所は無我と慈悲との二つを出てませぬ、無我なるが故に生死の法にも縛せられず萬境の相にも迷はされぬ、慈悲心あるが故に生死を以て却て遊戯場となし萬境を以て却て轉法輪の道場と爲すのである、商法家は商法を営みつゝ、農家は田畑を耕しつゝ、その業務のまゝが無我の妙用慈悲の行願となるのである、かくしてこそ始めて彼岸の佛行が吾人の一舉一動の上に現はれくるのであります、近代の高僧たる薩州鹿兒島福昌寺の無三和尚は元と鹿兒島在久志良村の農家に生れ久四郎といふたそうなが、薩州藩士に貫はれて士族となり、追々出世して大阪の御藏奉行までも勤めた身分たが晩年に到り出家して法を橋仙和尚に嗣ぎ、後に薩摩

公の御歸依を受け遂に公の菩提所たる福昌寺に住せられたのであります、然るに薩摩と云ふ所は昔は士分の者で無ければ國風として出家は許さなんだのである、無三和尚は立派な士ではあるが元を洗へば久四郎といふ百姓であるから、中には和尚の出世を妬む者もあつたです、禪家では住職披露の法會として晋山開堂式といへる嚴格なる式を行ふことが定規になつて居る、此式は住職たる者が須彌壇の上に昇り先づ香を焼て、天皇陛下の萬歳を祝し奉り、それより一般の大家と問答をするのである、乃ち佛祖に代つて教化門を開くといふ最も崇嚴なる儀式です、無三和尚も彌々明日は開堂式を行ふことになつたので、彼の嫉妬の念に駆られて居る、連中が和尚の名譽を傷つけんが爲めに、潜かに君公に内謁して、彼は元來士百姓であるから縦ひ學徳の勝るゝものあるにせよ、其膽力に於て必ず缺くる所があるに相違ない、故に開堂の際には君公自ら商量一番して彼が膽力を試みられて然るべしと御勸め申し、其問答さへも意地悪く「如何なるか是れ久志良村の久四郎」と御問ひなされと云て甘く吹込んだのです、君公は最と面白きことに思ひ、翌日は豫定の時間よりも早く福昌寺に御乗込みに相成り、彌々開堂の大禮も始まりて今や問答にかゝらんとする時、君公は二疊臺の上から本堂の正面に躍り出て、須彌壇上なる無三和尚に向つて、大音聲に

「如何なるか是れ久志良村の久四郎」の一間を發せられた、異例のことゝいひ異様の間端なれば、何事やらんと一同の人々は手に汗を握つて心配を致したが、唯だ平氣なのは無三和尚ぢや、少しも動ぜずして、ニッコリと笑を含み二足三足壇の面前に進み出て、聲も靜かに「泥中の蓮華」と答へられた、泥の中で生れた土百姓には相違ないが、今は浮世の濁りに染まぬ蓮の華である、泥の中に育てばこそ清く麗はしき花も開いたのです、釋尊は會て妙法を蓮華に御喩え遊ばされてある、生死の中にあり乍ら生死を離れ人生の間に處し乍ら人生を解脱してこそ衆生濟度の大慈悲光明を發揮する事が出来るのである、佛教の目的も佛祖の境界もツマル所は泥中の蓮華でありませぬ、無三和尚の答は決して自身の言譯をせられたのては無い、驀直に佛法の大精神を拈提せられたのであります、君公が此に於て愈々和尚に御歸崇せられたのみならず、西郷隆盛の如きは八年間も和尚に參禪して身心を鍛錬せられたと申すこととあります、抑も吾々御互の心と云ふものは随分當てにならないものです、心は萬境に從つて轉ずといふて、見聞覺知の上に於て種々様々に變化して暫くも住まらぬものぢや、或人が心とはコロコロの意である、何處へてもコロコロと轉がり廻るか、コロコロといふたのぢやといふてあるが、全くそれに違ひない様ぢや、昔し墨子は白絲を

見て泣たたとある、是は一度染むれば元の白地に還り難きを恐れたのです、又楊子は岐路に臨んで泣たたとある、是は一步の差ひが千里の隔りをなすことを恐れたのです、「曳かれなば悪しき道にも入りぬべし心の駒に手綱ゆるすな」といふ歌もあるが、兎角人間は悪い方にコロコロと轉がりたがつてならぬものです、併し反省の功を積みて修養に怠ること無ければ、身は順逆の波濤の間に在りと雖も心は超然として寂光淨土の蓮華臺に安住することが出来ぬ、是れ即ち即心即佛の大功德である、ダガ眞實即佛といはれる大功德を得んと欲せば、寢ても寤ても彼岸行を勤むることを忘れてはならぬ、其彼岸行の本は前に述べし如く無我の境に達するのと慈悲の心を發するのと二つであります、慈悲の心を發すれば、自づと六波羅蜜の大行を勵む様になるものです、上を敬まひ下を憐れむの心が深ければ、平日の一舉一動も盡く布施の徳となつて現はれるものである、又此慈悲の心があればどうして人を苦しめたり人を惑はしたり人に不安を與ふる様なことが出来ませう、今日我國民に公德心が欠乏して居るといふが、是も慈悲心の修養と奨勵法とが不充分であるからです、實際公德の發達を圖らんと欲せば、國民の精神内に佛陀の大慈悲心を注入することを基礎とせねばなりませぬ、慈悲あるものは必ず精進即ち勤勉の力を具ふることが出

來るものです、何故ならば、衆生を愛念すること深きに依て自然に怨親を平等に接して妄りに怒り妄りに憎むやうなことにはない、而して此愛念力に依りて暫時も怠慢することなき勇氣を發することは多くの子を有する母親が從晝至夜艱難辛苦して更に倦まざる様なものぢや、且つ又此慈悲心の力に依りて自づと其心を静めて妄りに動搖すること無きに至れば、それが正しく禪定波羅蜜です、慈悲の心に乏しければ利己的妄念に動かされて其思想は常に動亂を免れぬ、利己的妄念なき人は決して妄りに動亂する様なことは無い筈のものである、かゝる境界になつてこそ、始めて智慧波羅蜜も成功するのです、單定は癡定なり、單慧は狂慧なりと云つて心を静める一方では愚癡に陥る恐れがある、心の治まらぬ智慧は動もすると之を亂用して却て本然の徳を害することがあるものです、慈悲の心ある時は國家の爲め社會の爲め一切衆生の爲めと云ふ觀念があるから、其目的は遠大にして其事業は無盡藏です、從て智慧も公明正大になり定力も鞏固になるべきは當然の理であります、學文は何の爲めにする、國家の爲め、産業は何の爲めにする、人生の爲め、かやうになれば國家あるを知りて其の私を忘れ、人世あるを知りて其己れを忘れ、一身を擧げて道に盡し法に盡したならば治生産業も皆彼岸の佛行と爲るであらうと思ひます、併し乍ら凡夫の常習とし

て容易に彼岸行を日常の上の現はす事が出来兼ねるものであります、故に彼岸行を成就せんと欲せば、先づ以て健全なる信仰心を涵養することが最も大切であります、心地觀經にも「人の手なければ寶の山に至ると雖も終に得る所なきが如く、信の手なきものは三寶に逢ふとも得る所なし」と仰せられた通り、信仰なき人には如何に貴き佛祖の御教も決して其功德を現はす事は出来ませぬ、信仰といふのは唯だ珠數を爪ぐり香花を手向ることゝのみと思ふてはならぬ内其心を誠にし外天地の大徳に歸依するのが信仰でありますから、第一には己れの心を至誠眞實にならしめねばなりません、一點でも嘘や偽りがあつては信仰の資格は消滅して了ひます、菅原道眞公の歌には「心だに誠の道に叶ひなば祈らずとも神や守らん」ともあれば、此歌の反對に「心だに誠の道に叶はねば祈れどいかて神や守らん」となるのである、天地の徳は公平無私である、嘘偽りは全く天地の徳に背くを以て感應のあらう筈はない、「正直の頭べに神宿る」とは實に千古の格言です、然るに此至誠正直の徳は中々保ち難いもので、如何に清廉潔白なる人でも其内心を詮詰すれば知らずのうちに公平無私の徳に反する様な心を起すものです、「正直の頭べに神が宿るなら宿なし神がタンとあるらん」とは決して悪口を云た歌とのみはいはれませぬ、明治天皇様が彼の成申



の御詔書に於て、忠實業に服しと仰せられ、惟信惟義醇厚俗を成し華を去り實に就き云々と御諭し下されたのも、全く正直清明の美德を御奨勵あらせられたものと察し奉るのであります、兎角人間萬事嘘の世の中で、言語にも嘘があり禮節にも嘘がある、風俗にも嘘があり交際にも嘘があるのである、如何程巧みなる嘘を飾らうとも「八百のうそを上手にならべても誠一つに叶はざりけり」て嘘程價値の無いものはありませぬ、故に幕府の名奉行たりし大岡忠相公も「松ヶ枝の直な心を保ちたし柳の糸のなびく世の中」といふて慨かれています、華嚴經には「信は垢濁の心なし清淨にして僑慢を滅除す」ともある、垢濁の心とは嘘偽りのことぢや、心に實なければ心垢れ身に實なければ行ひ汚れ家に實なければ家穢れ國に實なければ國汚る、誠は天の道なり之を誠にするこそ人の道である、故に嘘偽りの無い真心を以て外天地の大徳に歸依し奉らねばならぬ、天地の大徳とは古今不變の眞理を云ふのである、楞嚴經に「常住の理を信ずるを名けて信心と曰ふ」とあるのは全く天地の大徳の事です、其大徳の顯現したのが佛法僧の三寶である、佛あるを以て法あり、法あるを以て僧あり、故に三寶は元來一體にして、佛陀世尊は實に三寶の中の大源であります、されば吾々は佛を以て永遠の父と爲し長劫の大師として其照鑒を畏こみ其御濟度を仰ぎ其

御教へに服従し奉るのが歸依である、人間の耳や目の届かざる處でも佛の光明は燦然として輝き涉つて居る、人間界に誰れ一人として助くる者も無い場合でも佛の大慈悲心は我子の如くに愛護して下さるのである、無常の風一たび吹き來りぬれば妻子眷屬も之を助くること能はず、新羅從僕も之に従ふ事能はず、茫茫として唯だ獨り黄泉に赴くのみであるが、かゝる場合にも佛の御願力は我身を離れ玉はずして幾萬劫の後までも御附添ひ下さるのである、「菩薩清涼の月は畢竟空に遊ぶ、衆生心水淨ければ菩提の影中に現す」といへる華嚴經の偈文にあるが如く、佛大悲の月影は照さる隅も無く輝かざる處も無いぢや、吾々御互の信念が是の如き偉大なる佛の大慈悲力を認むる事が出來たならば、其時の喜び其時の安心は果して如何計りてござりませう、されば如何なる深山幽谷に在るとも如何なる逆境の間に處するとも、佛の光明に接し奉らぬといふことは無いのである、筑前博多の柳町薩摩屋と稱する妓樓に勤め奉公をなし居たる明月といへる遊女は非常なる信心者であつて毎朝未明に萬行寺といへる眞宗寺に日參致したそうぢやが若し客人等の爲めに參詣の出來ざる時は、寺迄の足數を測り置き其足數だけ庭前を歩行して參詣の志に酬いたといふ程の大信心家でありました、されば平生の心得なども亦格別であつて、内外に對して頗る親切

を盡し、遊女の身に在り乍らも心の淨き事は泥中の蓮の如くてあつたそうちや、天正六年に死去して遺骸はその遺言に依りて萬行寺に葬つたが、不思議や其墓處よりして一莖の蓮華が生じ池の中の蓮に異ならざりしかば、領主の役人が大に之を奇なりとして特々墓をあげきて調べたるに、明月の口の中より蓮華の根が生えて居りしといふ事が、博多記及び石城志といへる本に記してある、是等の御話しは如何にも不思議の事の様であるが、信念の靈動は自づからかゝる感應力を有するものであります。

三、信心と彼岸

抑も信仰なるものは己れを忘れ身を忘れて佛陀大悲の恩徳に歸依し奉るのであるから、愚の如く魯の如くになつて深く信ずるでなければ、本當の信仰は現はれぬものです、而して一面自己の本心に向つて熱心に工夫し去るならば、茲に始めて自己と佛との一致融合を見る時節が到來するものであります、自己と佛とが融合して二相なきに至れば此岸が即彼岸となり、平生心も即道となり、人事も即佛事となるのでございませう、是の如く信念の功德を成就すれば、我執我見は自づと消滅し大悲大悲の心は萬事萬境に對して任運に發揮し、眞實無我と慈悲との二徳を圓滿し、遂に成佛の素懷を達するやうになるのであります、前

にも申した通り我國に於て春秋二期に彼岸といへる曆日を定められたのは正しく二つの意味があらうと思ひます、その二つとは一には此一七日間に於て萬事を放下して見佛聞法の縁を結び以て自己の信念を培養すること、二には此期間に於て祖先を供養して以て追孝の大義を盡すこと、此二つが彼岸會の重なる目的であらうと思ふ、これは眞に我國の一大美風である様に思はれますから、此意義を益々擴張して最も價値あり効力ある彼岸會に致したいものであります、それには迂柄の考では、彼岸七日間を配當て先づ彼岸の入りと中日と彼岸明けとの初中後には必ず寺院に參詣して見佛聞法の佛事を行なひ、其中間の四日は或は親戚相會して祖先の供養を營なみ、或は佛敎道德に關する家庭講話を聞き、又は祖先の美蹟嘉行等を語り合ひ、或は此期間に於て放生會若しくは慈善的寄附又は救濟を行なふといふ様な事を致したならば、最も能く彼岸の意味にも叶ふことであらうと思ひます、元來佛敎傳來の初めに當りては、佛敎を以て専ら國民道德の修養に供せられたものです、推古天皇十二年四月十三日に十七條の憲法を御發布遊された時、其第二條に於て明らかに佛敎を以て國敎と定められた、其全文を擧ぐれば「篤く三寶を敬ふべし、三寶とは佛法僧なり、即ち四生の終歸萬國の極宗、何れの世何れの人か此法を貴ばざる、人尤惡なるもの鮮

し、能く教ふれば之に従ふ、其れ三寶に歸せずんば何を以てか狂れるを直さん」と仰せられてあります、然れば佛教の信仰と行持とを以て國民を教化し能く其惡を離れ能く其狂れるを直すの標準となされたものであることは明了であります、して見れば彼岸會の如きも亦自づから此精神に基きて、専ら信念の修養、道徳の開發に資する爲め、曆日の上にまても御定め下されたものと思ふ、故に我が禪門の檀徒信徒諸君の如きは、此彼岸會をして信仰上最も價値あるものと爲し、此機會に於いて益々懺悔受戒の功徳を増進し利生報恩の佛事を勤修し、相俱に本證妙修の佛果位を實現せられんことを希望致します。

參

考

●彼岸佛事。眞俗佛事編に云く、問ふ、春秋の中の時節を彼岸と名づけ修佛事作善根時とす、其故如何、答て曰く、此に三説あり、自下列示さむ。

(第一説) 云く、それ佛法は中道を崇ぶ、此時節は晝夜等分にして無長短まことに中道の時なり、故に修佛事佳節なり。

(第二説) 曰く、提謂經並に淨土三昧經に入王日に善を修する事出たり、然るに此入王日

今の彼岸の節にあたり依之此經を本據とすと、八王日とは彼經云立春春分立夏夏至立秋秋分立冬冬至是謂八王日是天地諸神陰陽交代する時なり、此日に當れば梵天帝釋鎮臣三十二人司命司録閻魔王八王使者ことく四方を巡見人民の善惡を行するを校録す、地獄王も輔臣を出して罪あるものを記さしむ、前齋日(十五日也)と八王日とは、過あれども福勝れたる者には赦さる、後齋日(二十日也)に至ては、必ず其犯罪及び其人の名を録して其壽を減じ死日を刻む、地獄此記録を承て即獄鬼を遣す、而るに獄鬼無慈悲にして死日未到強て惡を造らしめて死を催促すと云へり、蒐る謂を以て一年の八王日には善を修せよと教玉ふ。

(第三説) 云く、善導大師の觀經釋より起れり、彼釋云念佛して西方往生の願行をなすには、不取冬夏兩時春秋の二節を取る、其故は仲春(二月)仲秋(八月)は正東より日出て、眞西に没る、爾るに彌陀佛國當直西日没處故に彌陀の在所を衆生に正しく指示して往生の願を遂さしむと云へり、今まこれに依て此時を彼岸の節と名づけて往生の業を爲さしむる時とす。

# 六 彼岸會法話

(六波羅蜜に就て)

## 一、佛教の目的

本日は彼岸會に因み六波羅蜜の御話しを致さうと思ふ我國では春の三月秋の九月、春秋二季の皇靈祭を中心として前後七日間を「ひがん」と申します、「ひがん」は彼岸即ち「彼岸」と書き無論佛教より出てたる名稱である、而して彼岸會の由來は我日本に始まつたものであります但其歴史に關する事は毎度御話しの出ることであるから、今日は彼岸の名稱に就て禪的に六波羅蜜の事を述べて見やうと思ひます、六波羅蜜とは波羅蜜の行なひが六通りあるから是を六波羅蜜といふのであるが、波羅蜜は具さには波羅蜜多といふて梵語であります、是を翻譯すると彼岸到となる、彼岸到は彼岸に到るといふこととす、これは譬喩に依て出來た名である、譬へば此に恐ろしい大河がある、河の向ふの岸に極めて結構なる土地がある、然るに吾々の現在には此方の岸に居るのであるが、此方の岸は極めて危険なる穢れ多き場處である、然るに途中の大河に礙えられて容易に向ふの岸に往くとが出

來ぬ幸に堅牢なる船があつて吾々を導いて大河の險浪を乗切て彼岸に到らしめて呉れたのが彼岸到です、此方の岸とは迷ひ深く罪障重き凡夫の位地に喩へ、途中の大河とは三界生死の苦しみを指し、彼岸とは悟りの月明らかに菩提の花麗はしき佛の境界に比したものです、迷を轉じて悟りを開き苦しみを離れて樂しみを得、凡夫地を解脱して佛境界に達するのは正しく佛教の大目的であるが、さて其大目的を達すべき船となり筏となる者は六種の菩薩行であるから、六波羅蜜と名けたのであります、此六種の行に依て彼岸に渡り着くといふ所からは是を六度ともいひます、その六種の行とは布施と持戒と忍辱と精進と禪定と智慧との六行であります、此六行を一切衆生の爲めに實行するのが眞の菩薩であります、若し自己本位で單に自己の名利欲の爲めに行なふのでは、縦ひ萬兩の黄金を施し幾回の忍耐を守るとも未だ以て菩薩の行願とは申されませぬ、換言すれば國家の爲め父母祖先の爲め妻子兄弟の爲め社會公衆の爲めといふ觀念に住して、此六行を修むるのが、眞の佛子としての行持即ち菩薩の大行となるのであります、實業界の泰斗ともいはれて居る男爵澁澤榮一氏は自ら「己れは守銭奴以上に金を欲しがるといふて居るそうぢやが、併し氏は極めて利己的思想の陋劣なるを説き専ら仁義道德の尊重すべきとを勸めて、曾て書

彼岸會法話

工をして算盤と論語とを描かしめ、これを輻物として床に掛けて居らるゝといふとぢやが、流石に面白くも亦感ずべきと思ふ、氏は常に富貴榮達と仁義道德とは兩立すべからざるものと思ふのは幕府時代の舊思想である、今や世界的に發達したる我國に於ては、上下心を一にして一家の富を作り一國の富を殖すことは我國民の急務である、清貧自ら安んずといふ様な時節では無い、併し誤れる方法や手段を以て富を作るのはその國家の大害たることは言ふ迄も無く、一身の幸福をも決して得られるものでは無い、不義にして富み且つ貴きは吾れに於て浮雲の如しと孔子の言はれたのは、故に仁義道德を堅く守り、正義公道に依りて富を作り且つ富を使ふの方法を誤らぬ様にせねばならぬ、是れ論語と算盤とを一致せしむる必要ある所以であると言ふて居らるゝ、氏の總裁に係る東京養育院には目下一千七八百人も收容されて居るが、此等の者の共通性ともいふべきものは全く利己一點張であると申すこととす、其中でも不良少年者の如きは最も甚しく、彼等の飲食起居の日常行爲の上には其利己的なる根性が殊に露骨に現はれて居るやうであります、此等の事實に徴するも、人間の確實なる幸福は利他的精神から現はれた勤勉努力の産物であることが解る、故に現代に於ける文明國民の行動は總て道德的利他的で無ければなりませぬ、即ち菩薩行で無ければなりませぬ、其菩薩行の標準として御示し下されたのが六波羅蜜であります、序てながら菩薩とは大士とも覺有情とも譯してあるが、通俗的にいへば大心の士、即ち心の廣き人といふこととす、心の廣き人といふは、自分と他人との隔て無く怨親平等に慈悲同情の念を起し、一切の衆生を永久に濟度せんとの大行を經營する人に名けたものです。

## 二、六波羅蜜の意義

先づ一通り六波羅蜜の名義を述べますれば第一の布施は梵語には檀那といふ、己の力を願ちて他に施すの行である、修證義には「布施といふは貪らざるなり」とありて、慳貪の念を離れて慈悲博愛の情を發するが布施の源泉である、これに財施と法施との二つがある物質上の施しが財施で、精神を益すべき善法を施すのが法施ぢや、要するに一切衆生を愛護して利益を與へ幸福を進めしむるの目的を以て、他の爲めにする事は總て布施行と言はれる道理がある。故に時として奪ふのが却て施しとなる場合もある、小供が危険ない物を翫んで居たならば之を奪ふのが慈悲ぢや、乃ち小供に安全を與ふる譯になる、胃病患者が

酒德利を持って居たならば寧ろ之を取上るのが布施ぢや、乃ち彼に健康を興ふる譯になる、臨濟禪師が黄檗禪師に「如何なるか佛法的々の大意」と問ふた時、黄檗は一言の答へも無く真向から三十棒を興へた、三度問ひしに三度とも打たれた、臨濟は更に黄檗の真意が解らぬソコで大愚和尚の處に至りて此意を質した、其時和尚は「あゝ流石に黄檗は親切なものぢや汝の爲にするると至れり盡せりといふべきぢや」といはれたのを聞いて忽然として、大悟せられたとある、黄檗の臨濟を接せられた手段の如きは法施中の大法施です、承陽大師は「我れ箇裏に在て十萬億佛を供養す」とも仰せられ大般若理趣分には「無上正等覺心を發すれば諸の如來に於て廣く供養を設く」とありますれば、一錢一草を有せず一指一足を動ぜずして、十方の諸佛を供養し一切の衆生に布施するの道理あるとを知らねばなりませぬ、第二に持戒行は、梵語の尸羅波羅蜜です、尸羅は戒と譯す、戒とは防非止惡といふて身口意三業の非を防ぎ惡を止むる佛の御掟のことである。併し必ずしも佛弟子のみの守るべき掟といふては無い、阿含經に七佛通戒の偈といふがあるが、此偈が正しく戒法の綱領を示したもののぢや、乃ち「諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教」といふのである、點付に讀めば「諸の惡は作すこと莫れ衆の善は奉行せよ自ら其意を淨らかにす是れ諸佛の

教なり」となる、誠に明白なる御示しぢや、惡い事をするな善い事をせよ、其意を淨めよ、此簡易なる語が一切道德の基礎であつて而も徳教の歸趣である、唐の白居易は樂天は香山居士と稱して有名なる學者で且つ非凡なる佛教信者である、元和十五年杭州に牧たりし時、一日山に入て鳥窠道林禪師の玄關を敲き「如何なるか是れ佛法の大意」と問ふた、すると禪師は「諸惡莫作、衆善奉行」と答へた樂天大に笑て「三歳の孩兒も亦慙慙に道ふことを解す」といふと、禪師も亦た笑て「三歳の孩兒も能く言ふと雖も八十の老翁も行ふことを得ず」と言はれた、樂天は此一言で心服したとある、故に戒を持つて惡に遠かり善に進むは吾人生涯の修行ぢや、否な生々世々の大修行ぢや、一日戒を持てば一日の道を得、一年惡に遠ざかれれば一年の徳を成す、是れ實に菩薩の心行であります、第三に忍辱行とは梵語では辱提波羅蜜といふ辱提を譯して忍辱と云ふ忍辱は辱めを忍んで他より耻辱を興へられた場合にもチツト忍んで忿怒を發せざるをいふ、是の如きは忍耐力の最も大なるものであるから忍辱といふたので、ツマリ忍耐の意味である、此忍耐力は種々の方面に於て發せられねばならぬ、己れの情欲や妄念を制するのにも忍耐なれば、艱難辛苦を辛棒するのにも忍耐である、腹を立てぬのにも忍耐なれば儉約を守るのにも忍耐ぢや、忍耐は消極的な人間

の大勇氣であります。東坡居士が「分に安んじて以て福を養ひ胃を緩くして以て氣を養ひ費を省いて以て財を養ふ」といふ三養を説いたのも矢張忍耐の効果である、鈴木正三老人が「佛法修行は不淨穢惡の心を去り清淨無礙の心と成て苦を樂とし惡を善となす、此の心即ち萬事に使ふ寶なり」といはれたが、此不淨穢惡の心を去るのが正しく忍耐の力である。坐禪の場合でも精神をドツシリと安住て諸の散亂妄念を排除するのは矢張り忍力の致す所であります。

吾々の心といふものは兎角に見聞の爲めに味まされ易いものです、先帝陛下の御製に「ともすれば浮き立ち易き世の人の心の塵をいかで拂はん」といふ最も貴とき御歌のあることを承はつて居りますが、實に浮き立ち易き人心は暫くも油断は出来ぬ、此心を十分に自ら監督し誘引して行かねば、人智の發達も道德の進歩も望まれるものでは無い、此心を心のまゝに放任して置く時は、五欲の境を追ひ六塵の衢に奔り、爲めに人道の立脚地をも失却し、一切の罪惡皆な是より出づる様になるものぢや故に吾々は造次顛沛の間も油断なく之に制裁を加へねばならぬ、さればとて禁欲主義とか消極的道德とか思ふてはならぬ、大に忍ぶのは取も直さず大に進む所以である、此制裁力に依て始て淨き正しき進歩的行動が現はれ

て來るのである、若し忍力が無かつたならば、少しの事にも腹を立て些々たる事情にも束縛されるに依て決して何事も成功するものではありませぬ。

### 三、六波羅蜜の意義

第四には精進行は梵語の毘梨耶波羅蜜である。精とはクワシクと訓じ純一にして雜り氣の無いこと、進はス、ムで進趣向上して息まざるの義である、乃ち善法に向て専心一意に勉強することぢや、忍辱を消極的勇氣とすれば精進は積極的勇氣である、忍辱力に依て己れを制し欲を慎しみ、精進力に依て智を研ぎ徳を鍊り業を勵み職を盡す、乃ち合理的意志の大活動である、世に天然の釋迦なく自然の彌勒なし、精進勇猛の力なき時は生知安行の人と雖も其志を達することは出来ぬ、支那抗州大慈山寰中禪師は「一丈を説得せんよりは一尺を行取せんには如かず」と仰せられ尺を行取せんには如かず、一尺を説得せんよりは一寸を行取せんには如かず」と仰せられてあつて、如何程學文辯才に長ずるとも精進勉強の力を以て之を實行するに非ざれば、依然として鸚鵡の學である、承陽大師の御歌に「頂上に鵲の巢やすくらん眉にかゝれる蜘蛛の絲」といふがある、是れは釋尊が因地の御修行の折頭の頂に鵲が巢をかけたの知ら

ず坐禪して居られたことがある、又雪山に御難行の節は眉の處に蜘蛛が巢を張つたこと  
 もあるそれを歌に詠まれたのぢや、此の如き勉強力があればこそ萬徳圓滿なる佛陀の境界  
 ともならせられたのであります、世の中に投機心のある者や徒らに僥倖を食ぼる者は、此  
 精進力に乏しいのであるから、確實なる成功は得られませぬ董仲舒は「事は勉強に在るの  
 み、學問を勉強すれば見聞博ふして、智益々明かなり、勉強道を行へば則ち徳日に起て大  
 に功あり」といふてある。故に佛遺教經には「若し勤め精進すれば事として難きは無し」  
 と仰せられ、佛弟子薄俱羅は「我れ出家してより以來八十年の中未だ曾て偃臥し脇を牀に  
 着けて背を倚せしことあらず」といはれてある、承陽大師も天童山に在せし時三年の久し  
 き專一に坐禪して一度も横になつて休まれなだぢや、常濟大師は、「唯諸人の精進不精進  
 によりて諸佛頭出頭没す」と仰せられて、精進すれば諸佛現はれ精進せざれば諸佛永く隠  
 れて現はれ玉ふことなしと示された、第五に禪定行は梵語の禪那波羅蜜ぢや、禪那は靜慮  
 とも定とも譯してある思慮想念を靜めて散亂せざるを靜慮といふ或は靜かに慮かるとも見  
 る又其心の散亂を定止するが故に定ともいふ今は梵語の禪と譯語の定とを兼擧げて禪定と  
 もいふたものぢや、乃ち坐禪のことです、尤も禪門の坐禪は禪の最も發達したものである

から、六波羅蜜の一部の行に非ずして、其全部を總合して自己本來の佛性を現成せしむる  
 法門でありますが、今は専ら煩惱を坐斷し妄想を打靜めて一心を不動の地に安住せしむる  
 の行である坐禪の任方等は此處で委しく御話しをする餘地も無いが、要するに足を組み手  
 を組んで心を氣海丹田に收め呼吸を調へて物我一體の境界となるのぢや、「坐禪せば四條五  
 條の橋の上往來の人を深山木に見て」とあるが如く、如何に順逆の二境に觸るゝとも心大  
 山の如くにして更に動ずることの無いのが三昧の定力です、兎角に凡夫の心は散亂盲動し  
 て種々の煩惱を惹起してならぬものぢや、夫故多くは一生を外界の爲めに使役せられて、  
 朝から晩まで惜しい欲い惜い愛いの間展轉反側して居る、而して確固たる落着が無いから  
 見る物聞く物の爲めに翻弄せられて常に精神を勞して更に安心の分が無い、若し能く禪定  
 を修すれば自づと精神を鍊磨して堅固不動の地に安住することが出来るものです、第六の  
 智慧行は梵語の般若波羅蜜ぢや、般若は此に智慧と譯す、智慧といふても學問才能のこと  
 では無い、學問も智慧の中の様なものなれど、少かに智慧の端緒である、眞實の智慧は明  
 らかに天地の實相を究め盡未來實際の大方針を確立して眞を身口意三業の上に實踐し應用す  
 るをいふのである、禪門に於ける見性悟道も正智慧のことでありませぬ、遺教經には「聞思



修の慧を以て而も自ら増益すべし」と仰せられてある、聞とは正法を聞くこと、思とは聞きたる正法を思惟研究すること、修とは其正法を實行すること、是を三慧といふ、聞かざれば道を知ること能はず、思はざれば道信じ守ること能はず、修せざれば道の功德を實現すること能はず、常濟大師は徹通禪師が「平常心是れ道」の古則を擧せらるゝを聞て忽然として省悟せられたが、更に之を工夫し玉ふこと數年後始て平常心是れ道の境界に達せられた、平常心とは平生の心ちや、茶に逢ふては茶を喫し飯に逢ふては飯を喫し、水を呑んで冷暖自知する底をいふ、その冷暖自知がその儘佛祖の大道ぢやといふのである、道理としては誰にても解ることならんが、さて彌々平生底の心念が一々佛祖の大道と一致して、心の欲する所に從つて矩を踰へずといふに至ることは中々容易でない、知つた許り思ふた許りては決して佛法とはいはれませぬ、或人が極樂世界に至りて處々を見物せしに、大きな藏が二戸前にあるのを見た、中を窺いて見ると一ツの藏には數の子が山の様に積んであり、他の一ツの藏には木茸が一杯詰つてあるから、不思議に思ふて、ナゼこんな物が御淨土にあるのであるかと聞きますと、案内せし者の答へに、これは其様な物では無い、木茸の様に見えるのは人間の耳の乾したので、數の子の様なのは人間の舌の乾物ぢやといふた、

益々不思議に思ふて、ナゼこんな物を貯へて置かるゝかと尋ねると、是れは人間といふ者がイツも耳に善い事を聞いて舌の先でばかり善い様な事のみを説くに依て身體は三惡道に墮落したが、耳と舌ばかりは御淨土參りをしたのであると申したといふ御話があります、耳と舌だけが御淨土參りをして、身體は永く三惡道の苦しみを受けるといふは決して眞實の智慧では無い、眞實の智慧は聞思修の三慧より發するて無ければならぬ。

#### 四、信念の涵養

以上の六波羅蜜は決して個々別々に獨立することは出来ぬものです、先づ布施は利他の代表的行持て持戒は自利の根本的修養であるが、此二は互に相待て其功を奏するものであります、何故ならば眞實布施を行なはんとするには必ず己れの身を修め己れの行動を淨らかにせねばならぬ、自分の身が修まらんで他人を救ひ助くることは出来ぬものでは無い、自分が一文なして人に財を施すことはならぬ、自分が何にも知らんで人を教ふることはならぬ譯のものぢや、彼の儒教に於ける大學は治國平天下の道であるが、天下を平らかにせんと欲せば先づ其國を治めよ、其國を治めんと欲せば先づ家を齊なへよ、其家を齊へんと欲

せば先づ其身を修めよ、其身を修めんと欲せば先づ其意を誠にせよ其意を誠にせんとならば先づ其心を正ふせよと説てある、されば治國平天下の本は修身齊家に在ることは古今不變の格則ぢや、又利他の目的を以てせざれば完全なる修身齊家の實を擧ぐることも亦不可能である、何故なれば布施の中心は忠孝である、國家に對するの忠誠、父母祖先に對するの孝道、これが布施の最も大なるものであるから、布施の志なき者は修身齊家の基礎が成り立たぬ譯であります、忍辱と精進とは自利々他の行持を實現すべき原動力です、如何に布施を行ひ戒法を持たんと欲するも、忍耐力に乏しく勉強力に薄き時は決して之を實行するとは出来ぬ、而して忍耐と勉強との土臺となるものは禪定で、又之れが指導者となるのは智慧である、禪定が無くして心がウゴ／＼して居れば何事をも貫徹する事が出来ぬ、縦は忍耐勉強の勇氣があつても若し智慧が無ければ唯だ無茶苦茶に盲動する事となる譯です、故に此六波羅蜜は互に相扶け相待て行かねばならぬ、ツマリ六本の柱に依りて自利々他圓滿の宮殿が建築されるのであります、此六波羅蜜こそ凡夫迷妄の此岸より佛界安樂の彼岸に到達すべき唯一の船筏であるか、此船筏を進むるには極完全なる船長と適當なる楫取とが無ければならぬ、船長が無ければ航海の方向が解らず楫取が無いと船を程よく操るとが

出来ぬ、方向が解らねば目的を誤つたり暗礁に乗り上げる様な恐れがあり、船を操る者が居らぬと逆巻く波浪に妨げられて後戻りをする様なものぢや、然らば完全なる船長となりて確實なる方向を示して下さる御方はといへば佛様ぢや、又楫取となりて適當に船を操て呉れる者は誰れかといふと健全なる信仰である、佛様は三界の大導師、一切衆生の慈父であらせらるゝとは苟も佛教に志す者の等しく承認する所である、唯だ信仰即ち信念の楫取がまだ訓練が不十分の様に思はるゝ、之を訓練するの所謂信念の涵養である、信念といふは佛様に向つて絶對的に歸依し奉りて御慈光に觸れ其愛護を喜び願ふ心である、要言すれば佛様に對して有り難くて耐らぬといふ程の深き厚き歸依の念を發するのであります、青年時代などは容易に此「有り難い」といふ念が起り兼ねる物質以外の一の崇高にして偉大なる御本尊を立て、常に有り難いといふ觀念を抱いて居ることは最も大切なことぢや、黄金を尊び名譽を重んじ、且つ其娛樂をば物質の上のみ求めんと欲する時は、常に萬境の爲めに心志を攪亂せられて容易に安心を得ることは出来ぬ、歡樂極つて哀情多し、樂は却て苦の種となる場合が澤山ある、人や物質の上に憑つて行く者は、必ず不平不満の念が絶えぬものです、善行を修めても、之を認めて呉れる人が無いと厭になつて來る、邪

念を發しても之を監視する者が無いと益々増長する、一たび不遇の身となり若くは逆境の襲ふ所とならうものならそれこそ大變、忽ちにして煩悶病に取り付かれる。

然るに若し信念が有りますれば、朝でも晩でも佛様と同道同行であるから、有り難いといふ念が去らぬ、佛様の智慧は大に吾々の行爲を審判し監督して下さる佛様の慈悲はイツても吾々の身心を救済し攝取して下さる、佛様の光明は暗室の隅々までも照して居られる、佛様の神通は水火の中にまで靈動して居られる、斯く觀じれば佛様は吾々の保護者であらせられ吾々の指導者であらせらるゝ、人存せずと雖も佛様の存するあり、人知らずと雖も佛様は照覽してござる、此信念あれば心の中常に力強くして獨りて居ても決して寂しさを感ぜぬ、従つてイツも喜びの情に充たされて居るものぢや、且つ信念ある時は自然に大勇氣を發して決斷に富み實行に迷ふことが無いものぢや、彼の伊能忠敬よ老年幕府の命を奉じ天下を周遊して地理を測量した人である、將に出立せんとして餞別の宴を開きし時、偶々梁の上の乳燕が席上に墮て死んだ、なにやら縁起が悪いといふので來會者は私かに此行を危ぶんだぢや、すると忠敬は衆に向て、乳燕の死するは我が出立とは何等の關係も無し諸君決して意に介し玉ふなよといひ、起て草鞋を穿んとせしに、草鞋の紐がブツリ

と截れた、一同は益々不安の思ひをなしたが、忠敬は一向平氣ぢや、草鞋の紐とて別段鐵や金で製したものでは無、時として截ることのあるのは當然であるといふて出立した、まだ門の外に出たか出来ないかに、家で醸造した酒桶が破裂して酒がドツと流れ出した、重ねんの事で一同顔の色を失ひ、飛て往て出立を留めましたが、忠敬はビクともせず、酒桶ぢやもの破るゝこともあるべし何ぞ怪むに足らんやとて斷然出掛けて遂に偉大なる任務を立派に果されたとある、又徳川家康公が關ヶ原へ出陣の時、陰陽師等が本年は西の方塞が甚だ不祥であるから御出陣見合せられ然るべしと申し上げしに、公は笑つて西の方塞がり居らば吾れ往て之を開かんといふて出陣を遂行せられました、是れ等も皆な信念より發したる大勇氣であるから、惡魔も之を侵すことが出来なしたのである、故に華嚴經には「信は境界に於て所着なし諸難を遠離して無難を得せしむ、信は能く衆魔の道を超出して無上解脱の道を示現せしむ」云々と御示し下されてあるのである。

### 五、彼岸廻きに在り

信心清淨にして能く六波羅蜜を實行する時は、手の舞足の踏む所も盡く彼岸の佛地ならざ

るは無いものぢや、元來彼岸を遠き處と見るも運き處とするも一心の作用如何にあるのであります、迷ふ時は十萬億の國土を隔て、悟る時は即心即佛ぢや、一日を千秋と思ふも六十小劫を食頃の如く思ふも皆な心念の作用である、「傀儡師胸に掛けたる人形箱佛出さうと鬼を出さうと」心の儘ぢや、江島其碩の諺草には「一升樽と百の錢に手を付くると其儘みななる事はやし、あてがひ世帯の米薪と風吹に蠟燭たてると、春日にあふ軒の雪と、元日から十五日までの日は早く立ちて遊ぶ日のみになる事、毎年我人あそびたらず、光陰にちがひはなけれど我が心に好まぬ事する時は同じ日を長く覺え、心にすきぬる遊びにはもう入相の鐘がなるかと惜しみぬ」とある、僧美寛は山に住むこと六十餘年數ふる程しか門外に出たことが無い、或る僧が老師坊に在て何事をして間を消せらるゝやと問ひしに、「蝸牛の角の上石火の光りの中、唯だ迅速に過るを覺ゆ未だ間あるを知らず」と答へたとある、光陰は同一なるも其人に依りて長短の感を異するのぢや、凡夫と佛、此岸と彼岸との關係も亦是の如く、遠近は人に在りて境に在るに非ず、現前と不現前とは皆な自ら招く所のものである、盲目の身を以て一村の長となり、村内の惡習を一掃して模範村を作り上げたといふので名を全國に揚げたる愛媛縣温泉郡餘土村の森恒太郎氏は、曾て縣會議員を

も勤めた人であるが、明治二十八年三十四五歳の時不幸にして盲目の人となつた、東京にも上りて種々治療に力を盡したがドウしても治らぬ、氏は泣々家に歸つたが親の顔も見られず、郷土の山川草木一として見ることも能はず、渺たる一身は此世からなる暗黒地獄の人となつて了ふたのである、悲しさの餘り幾度か死を決したこともあるが、慈愛深き母親や恩愛の切なる妻子の事を思へば死ぬにも死なれず明けても暮れても泣いて許り居られたが、或日食事の際御飯一粒を取落した、手で以て撫て廻はして漸く之を拾ひ上げ、指の先にて其米粒を捻り居たる一刹那忽然として一種の大覺省を得たのである、嗚呼此一粒米は人間の指の先に翻弄せらるゝ程の微少なものである此微物を古人は「一粒米の重きこと須彌山の如し」といふて、嚴格なる家庭では一粒たりとも疎末にすることを許さぬ、若しソコラに落ちて居れば必ず之を戴いて拾はせる、なぜ此一小物が古今の人に尊重せらるゝのであろう、此物小なりと雖も六月の炎天に照付られつゝ生長し、生熟の後は鎌に刈られ臼に搗かれ水にて洗はれ釜にて煮られ漸くにして食膳に上るとを得たのである、併し此れのみにては未だ其價値を現はすことは出来ぬ、其價値ある所以のものは、此物が他の食用となりて胎内に入り人體の血肉となりて萬物の靈長たる人間を營養する、そこに此物の價値が

現はるゝのである、然れば吾々人間たる者は縦ひ盲目とならうとも、若し國家の爲め社會の爲め献身的に盡したならば、必ずや大なる價値を有するに相違ない、人にして豈に一粒の米にだも如かざるべけんやと、いふ感じを起されたのである。それからいふものは今迄の煩悶は一時に消滅して前途に赫々たる光明を認むるやうになつた、是に於て或は江州の比叡山に上りて佛教を聞き或は京都の南禪寺に參じて禪を味はひ、益々修養に努められた、村長になつてからは一層立派な仕事を致そうとの志を發したとある、餘土村は松山を距ること一里許り四百餘戸を有する村ぢやが、従前小作人が耕作に忠實ならざる爲めイツも隣村よりも米質が悪い、従つて村は年一年疲弊を來す様な始末である、ソコで氏は第一小作人の心からして矯正せんと欲し、自分は暑中と雖も笠を被らず村内を往來するには草履のみを用ひて下駄を穿かず、且つ小作人保護の資金を作らん爲め土地所有者より一段歩には米五升宛を出して貰ふこととした、處が中には容易に出して呉れぬ人もあるので、氏は首に袋を掛け地主の家へ廻りどうぞ願ひます頼みますといふて三拜九拜して米を出して貰ふことも數々ある村の内には氏の事を盲乞食といふて悪口をいふ者もあつたが、氏は少しも意に介せず遂に三千圓の資金を作り上げた、それを村役場で保管して利息を貯へ小作人が

不時の困難を救ふの資となした、或時小作人百八十餘人の總代が三四名で氏の處に來り、村長様の御蔭にて吾々も永久に安心が出来ることとなりました此御恩に報いる爲め向後は農作に勉強すべきは、勿論、小作人一同一段歩に付麥五升づゝを差出たさに付御開濟を願ひたしと申し出た、氏は涙を流して之を謝せられたそうぢや、それより小作人の氣風が頓に革まり米質も非常に佳良になりて、今日では他村の米よりも一石に付五十錢高になつたと申すことであります、氏の如きは實に賞讃すべき人物と申すべきである、氏は一旦は病魔の爲めに身を捨て様と思ひ詰むる程の煩悶に陥つたのは全く此世からなる地獄の苦しみてあつた、一朝一粒の米に感じて煩悶轉じて愉快となり更に元氣を恢復して利他的大活動を試みたのは全く此世ながらの彼岸を現出したのである、同一の身を以て同一の世に處し、昨は人生を悲觀し今は人生に興味を感じず心念の妙用實に奇といふべきであります、吾々も亦是の如く菩薩の六波羅蜜と申しても決して困難なるものには無い、信念堅固なれば日用光中喫茶喫飯の上にも之を實行することが出来る、一日之を行へば一日の彼岸を現し、一年之を行へば一年の彼岸を現す彼岸は邇きに在り、吾人の脚跟下直に是れ諸佛の聖地である、溪聲便ち是れ廣長舌、山色豈に清淨身に非ざらんや治生産業も皆な實相に歸し、運

水搬柴も皆な法輪を轉ず、されば六波羅蜜は畢竟吾人の身心である手脚である。是を修證義には日々の行持とも即心是佛とも御示し下されたのである。

参

考

●慈善家の種類

- 一、自己の爲めにする利己的慈善家
  - 二、真面目な考なき慈善家
  - 三、罪亡ぼしにする懲役的慈善家
  - 四、公衆の稱讃を得ん爲めの演劇的慈善家
  - 五、他人が爲るからとて爲す世間並交際的慈善家
  - 六、道德的慈善家
  - 七、宗教の意味より出てたる慈善家
- 無言の引力。翼なくして飛ぶものは聲なり、根なくして因するものは情なり。(五車韻瑞)
- 愛憐。その生を見てその死を見るに忍びず、その聲を聞いてその肉を食するに忍びず、是

を以て君子は庖厨を遠く。(孟子)

●信仰希望は宗旨によりて異なるも、愛は世界共通なり。(西 諺)

●日のもとのうちにあまりていつくしみとつくにまでも及ぶみよかな。

(皇太后陛下より赤十字社へ賜はりし歌)

●雪の日やあれも人の子樽拾ひ

●わが子ならともにはつれじ夜の雪

●樂しみを廣げる菊の根分けかな

●咲せたら人にも見せよ園の菊

# 七 佛誕生會法話

此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなり、今是の如くの因縁あり、云々(修證義節)

## 一、釋尊の誕生

今日は古今東西に比類なき無等々の大聖人、大恩教主釋迦牟尼如來御降誕の令辰でありますから、我等は滿腔の赤心と全身の歡喜とを以て此令辰を迎へ奉り、併せて諸君と與に報恩奉重の微志を表し奉りたいと思ひます、此御降誕の年月等には種多の説がありまして何れか是非俄に判斷することも出来ませぬが、夫等の穿鑿は後日に譲ることとして、迂納は我國に於て古來より多くの人の採用したる年月、乃ち今を距ること二千九百四十一年以前の四月八日の早晨を以て御誕生遊ばされたものとして御話し致す積りてあります、申す迄も無く釋尊は中天竺迦毘羅衛國淨飯大王の御子に御生れ遊ばされ、御母君は王妃摩耶夫人、是は當時有名なりし善覺長者の御娘にして十善具足の賢夫人であつた、淨飯大王は稀世の名君にして經にも才徳純備の聖王と稱してある。佛本行經等に依るに釋尊は一生

補處の菩薩として兜率天に在まし、御名を護明菩薩と稱せられたとある、菩薩は娑婆世界に御降誕の時節到來せるを知しめし、降誕すべき世界と種姓と場處とを觀察せられ、遂に夙縁に依りて摩耶夫人の胎内に御托り遊ばれたとあります、御懷妊前後に於ける奇瑞の事共は略して置きますが、彌々御臨月と思はるゝ四月八日の曉、摩耶夫人は頻りに御園の景色を眺めたく思はされ幾多の姪女童女等を召連れられて藍毗尼と稱する御園に行啓あらせられ、群臣百官等も美々敷御伴を申し上げられた、丁度太陽が東の山の端に昇らんとする時御園の中に無憂樹と云へる大木があつて、今を盛りと咲き亂れたる華の色之美しさ、殊に香氣さへ一層優れてありければ、夫人は御氣嫌麗しく徐に玉歩を移して彼樹の下に進み玉ひ、玉を綴りたらん如き一枝の華、右の手を舉げて將さに手折らんとし玉へし一刹那、忽然として御誕生遊ばされましたぢや、因果經大善權經等に依るに、御誕生の時不思議や大さ車輪の如き七寶七莖の蓮花が樹の下に生じ、釋尊は自から其蓮華の上に生れ落ち玉ひ、自ら歩ませ玉ふこと七指一指は天を指し一指は地を指して妙なる御聲を擧げて「天上天下唯我獨尊」と仰せられたとある、其時九頭の龍王が虚空の中に現はれ香水を吐て王子の御身を灌沐し奉り、諸天善神は姿を現して御身を擁護し奉りし等の瑞相ありしことは諸經論

に委く記されてある、此等の奇瑞の中には釋尊出世の御本懷を賛歎するの餘り、詩的若くは神秘的の記事も或はあるであらう、されど世界無比の大聖人の降誕せらるゝに當り、常人の窺ひ知る能はざる瑞相のあるとは決して偶然とは申されませぬ、况や信仰の眼に映じたる釋尊の靈妙なることは經論の記事以上であらうと思はれる、併し其邊の事はこゝでは略し今はたゞ諸君と共に誕生如來に對する眞の法供養を修し奉りたいと思ふのであります。

### 二、唯我獨尊の眞意義

凡そ三世の諸佛十方の菩薩は多くは此娑婆世界に出現して佛道を成じ玉ふ、釋尊も亦た今日を以て此世界に御誕生遊ばされ一切衆生を濟度せんが爲めに、十九歳にして出家し三十歳にして成道し、而して四十九年間の御說法があつたのである、故に先刻賛題として讀上げたる修證義第二十六節の御文の初に「此發菩提心多くは南閻浮の人身に發心すべきなり」と仰せられたのである、發菩提心とは佛道修行の志を發すこと、南閻浮とは此世界のことぢや、願ふに此世界には諸の苦惱が充滿て居る、是を四苦八苦等と云ふのであるが、如何なる果報めてたき人にも此苦を免るゝことは無い、併し此苦が却て佛道信仰の心を

發する因縁となる、若し世に苦と云ふものが無いならば、徒らに五欲六塵の樂境に耽着して發心修行の縁を結ぶの機會に逢ふこと能はず、三界六道の中に人間より果報の優れて居るのが天上界である、法苑珠林には天上界の相を説いて、天上の衆生の身には骨も肉も無きゆえ肉體の苦が少ない又大小便利の如き不淨物も無く、身體よりは自然に光明を放つに依りて晝夜の別も無い、其上五通と云ふて天眼天耳等の通力を具へて五官の作用が自在であると言ふてある、斯く結好なる果報なれども其結好なるのが却て發心の妨げとなるぢや、人間でも餘り果報の善過る者は却て眞の道心が起り悪い様なものです、娑婆論には三事勝るとして天上界に勝れる力が三つあると説いてある、一に勇猛乃ち所有困難に屈せず益々進んで息まざるの勇氣、二に憶念乃ち善法を記憶して知識を啓發する力、三に梵行乃ち心を正し身を修め道を行ふの力です、我等は幸にして「今是の如きの因縁」ありと次の文にあるが如く、夙世の善因縁あればこそ斯く迄發心修行に好便宜なる人間の身を受けたのである、此身今生に向て度せずんば更に何れの生に向てか此身を度せん、返すくも此一生に於て佛果菩提の勝縁を結ばんことを忘れてなりませぬ、况や大聖釋尊の如き御方が此世に御出現遊ばされたは、普通の我等とは事變り當節の言辭を假りて申さば、最高の使命を帯びて



御誕生あらせられたものであります、故に母君の胎内を出てさせらるゝや、錦を飾る無憂樹の下、珠を疊める蓮華の上に天地を指して「天上天下唯我獨尊」天にも地にも唯だ我のみ獨り尊としと獅子吼あらせられたるは、有り難しとも貴としとも讚歎し奉るべき語すらも無い程ぢや、大善権經には「我れ一切天人の中に於て最尊最勝なり無量の生死今に於て盡きたり」と御唱へ遊ばされたとあるが、其意味は同一てす、佛教に於て尊貴と稱するは本より人爵の上に名けたものでは無い、煩惱の根を斷じ生死の苦を離れ智慧道徳兩ながら圓滿なるを最尊最勝と稱するのであります釋尊は此意味に於て唯我獨尊と仰せられたぢや、今日の語を以て言ふならば、我は天地間に於ける大導師なるぞ一切衆生を濟度して知徳圓滿の者たらしめんが爲めに誕生せしものなるぞとの御宣告であります、是れ決して高慢せられたものでは無い法華經に「今此三界は皆な是れ我が有なり其の中の衆生は皆な是れ我が子なり」とあるが如く、釋尊は唯々此世界を以て御教化の領域と見をなはし、衆生を以て我子と爲し一人ても迷ひに惱む者又は知徳を明らかにせざる者あらば、衆生無邊誓願度を以て之を濟度し盡さずんば止まぬと云ふのが御出世の御本懷ぢや、これが大聖人の寛弘なる御慈悲であります、抑も親の子を愛するは天然の至情にして世に是程神聖なるものは

無い、紀貫之が「世の中に思ひあれども子を戀る思ひにまさる思ひなきかな」と詠せし如く、親心程深きは無く、藤原兼輔が「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな」と讀みし如く親心程親切なるものは無い佛の衆生に對せらるゝや其慈念の深き愛情の切なる恰も親の子に對するが如くであるから一切衆生は皆な是れ我が子ども仰せられたものです、其慈愛の結果が釋尊の五百大願、娑婆往來八千返ともなり、阿彌陀如來の四十八願、觀音普賢菩薩等の十大願ともなつたのであります、我等御互は幸にして萬物の靈長たる人間の身と生れ、殊に我等の生々世々迄も御救ひ下さるゝ釋尊の御法に遇ひ奉るといふは、喜びの上の喜び幸福の上の幸福てはありませんか、夫故贊題の御文の末には「願生此娑婆國土し來れり」とありて我等が此娑婆世界に生れ來たりしは全く夙の世に於ける願力の致す所であるからして、「見釋迦牟尼佛を喜こばざらんや」て面り釋迦牟尼佛を見み奉り且つ其教を聞き奉りて稀有の因縁を自ら喜び自ら樂しまねばなりませぬ、併し釋尊は御誕生の砌「天上天下唯我獨尊」と仰せられたのは、獨り大慈悲心の上より御宣言あらせられたのみでは無い、此御一言の中には甚深なる真理と吾人が道を修め徳を養ふ上に就ての大目的を標示せられてある、何となれば唯我獨尊と云ふは決して釋尊の上のみに限つたこ

とては無い、我等も亦た唯我獨尊の境界なのであります、全體天地萬象は其源を尋ねれば東西古今に通じて寸毫の變易なき大道に歸するのである、原因結果の理法も物質不滅勢力恒存の原則も皆此大道の變名です、我等は此大道に孕まれ此大道に養はれて居るので、地の堅き水の濕ふ火の熱き風の動く盡く是れ大道の妙用です、佛は此大道を悟りて四十九年の大法輪を轉ぜられ、菩薩は此大道を學んで三祇百大劫の修行を積ませられ、孔子は此大道に則とりて吾道一以て之を貫くと云はれてある、此道を我等人間の現はせば智慧と道德との二となる此二は我等が本來具有する所であるが、唯だ煩惱妄想の爲めに其妙用を起さずに居るぢや、コ、を或人の歌に「歸命頂禮釋迦如來、拜むとすれば雲かゝる、いかなる邪見な雲じややら、雲は邪見じや無けれども、我身が邪見て拜まれぬ」と云ふてあります、故に釋尊は成道の時に於て一切の衆生は皆な如來の智慧徳相を具す但だ妄想執着の爲めの故に而も證得せずと仰せられた、ツマリ釋尊御一代の説法教化も我等衆生をして此智慧徳相を現前せしめんが爲めに御辛勞ぢや、邪見の雲さへ晴れぬれば心の月は自から圓かにして、十方世界之くとして光り耀かざる處は無、念佛を申すは何の爲め、眞言を誦するは何の爲め題目を唱ふるは何の爲め、皆な此道を現はさんが爲めてある、コ、を行

誠上人は「神佛名はことなれど玉ぼこの道の外には道とてもなし」と示されてあります、而して此道は佛に在ても増さず我等に在ても減らず佛に一丈の道あれば我等にも一丈の道あり佛に一尺の道あれば我等にも一尺の道あり、一念迷へば直ちに是れ凡夫、一念悟れば忽にして是れ佛であるが、道の上には佛と凡夫との隔ては無い所謂唯我獨尊です、此道を深く信ずるのが成道の基礎ぢや、夫故承陽大師は佛道を信ずる者は先づ須らく自己を信ずべしと仰せられ太祖大師は百千の法門無量の妙義總に心源に在りと仰せられてあります。

### 三、釋尊相見の時節

昔し支那に古靈の神贊和尚と云ふ御方があつた、福州の生れて土地の大中寺で出家せられた至つて師匠孝行な人でありましたが、十八九歳の頃行脚に出百丈禪師の門に投じて修行すると三四年にして遂に悟をお開きなされたのである、それから元の大中寺に歸りましたが師匠は待切て居られたから大に喜び、汝は行脚して如何なる修行をか爲せしぞと尋ねられたが謙遜なる和尚の事として、未熟なる私何の爲す事も無く徒らに光陰を送過し實に耻かしき限りなりと答へられたが、ツクンと師匠さんの態度を観るに朝夕の立居振舞が所謂脚下

未穩在てドウモ落着た様子が見えぬ、乃ち一舉一動が徒らに六根六境に駆使はれて唯だ唯だ妄想が動いて居る様な鹽梅ぢやから、常に御氣の毒に感ぜられて堪らなんだと見える、或日のと風呂を沸して師匠さんを入れ久し振て背を流してあげたが此師匠中々體格が好かつたと見え全身肥満して相撲取の様であつたぢや、神贊は背を流し乍ら御師匠さんはイツモ乍ら立派な大伽藍でありますかと申した處、サウよどこへ出しててもヒケは取るまいなど答へた、其時神贊は心の中で嗚呼體格は立派ぢやが悲しい哉精神は之れに應ふて居られぬは實に氣の毒の至りなりと思ひました處から、覺えず口が滑つて「好箇の佛殿而も佛聖ならず」と云ふた、本堂は御立派ぢやが惜い哉中の佛様が御疎末ぢやと云ふ語です、すると師匠は何事かと疑ひ思はず振返つて神贊の方を眺められた、神贊も最早騎虎の勢舒たるは縮め難し、直様二の矢を放つて佛聖ならずと雖ども且つ能く放光すと云はれた佛様は御疎末ぢやがマダ生きて御座る丈頼もしいと云ふ程の意味です是れ決して師匠を馬鹿にして言ふたのでは無い、何卒師匠を眞の佛道に引入れたいと思ふ孝心が事に觸れて發したのであります、今日の我等とても亦た同じ事で、受け難き人間の身を受け遇ひ難き佛法に遇ひ奉りしは、實に好箇の本堂ではありませんか、斯かる大殿堂を有し乍ら果して胸中の佛様が立派

になつて居るであろうか能く回光返照して見たならば御耻かしい事だらけではあるまいかと思はれます、又或日のと神贊が師匠と與に窓の下にて看經をして居られると、一疋の蜂子が、飛て来て窓にブツ付り其處より表へ出てんとしてブン／＼と頻りに飛廻り跳廻りして居るのを見て、思はずも「世界は許の如くに廣濶たるに肯て出でずして他の故紙を鑽る驢年にし去るもを得んや」と云はれ直に空門肯て出でず臆に投ず也太だ痴なり百年故紙を鑽る何れの日か出頭の時と云ふ偈を作られた、是れは夏の事とて殿堂は四面共に明開け何れかなりとも出入の路は自由自在にして、十方通暢八面玲瓏ぢや、然るに痴なる蜂だ唯々自分認めた處丈を出口と思ひ、窓の中の一小天地に執着するが爲め、愈々勞して愈々出づると能はず、迷に惱める凡夫も亦た是の如く本來成佛の身を以て徒らに妄見に礙られて三惡道四惡趣に彷徨ひ、生死去來の其儘が唯我獨尊の佛なることを知らぬと云ふは、扱も／＼不便なる者どもよとの意味です、ソコで師匠は大に驚き御身は何れの處に於て斯まで貴と云ふ安心を得たるぞと問はれければ、今は包むも詮なしと思ひ百丈禪師の印可を受けたると物語り、それより師匠の需めに應じて詳かに百丈の佛法を説示されたので、其師匠も大に悟る所ありて、遂には兩人相携へて百丈禪師の處に赴き共に禪師の法嗣となられたと云

ふ因縁がありませぬ、此等は如何にも我等に取りては好箇の教訓であらうと思ひます、今や釋尊の御降誕と云ふ目出度聖辰を迎へ奉るに就ても、唯だ華堂や甘茶の御供養のみで満足しては居られませぬ我等の本性たる本來成佛といへる生佛の出現を圖らねば報恩の第一義とは申されぬ、其活佛を出現せしむるには平生の妄念妄想を截断て天地の大道に合體し、承陽大師の御歌にも峰の色溪の響もみなながら釋迦牟尼佛の聲と姿ととあるが如き宇宙遍滿の釋尊に相見するとが肝要です、それにはどうすれば宜いかと云ふに、先づ以て世の無常なるを觀じて浮世の仇波に漂されぬ様に致し、因果の理を信じて一點でも惡念惡業を起さぬ様に致し、至心に佛の御教を信じて從來の業障を懺悔し誠を傾けて佛法僧の三寶に歸依し奉り、且つ佛祖正傳の御戒法を以て生々世々の生命とも珍寶とも思ひ、大慈大悲の念に住して分に應じて利他の行願を勵み、日々々の行持を正しく守りて進んては御國と父母と社會との恩恵に酬い奉り、退ては甚深廣大なる佛の御恩に酬い奉らんとを期し、寢ても寤ても怠り無く立ても居ても忘るゝと無くんば、煩惱の雲晴れて痕なく菩提の光りは旭日の如くに輝き涉り、三寶の御恵みは九龍の甘露を噴くが如くに我身を潤ほし、御法の花は蓮葉の葩よりも麗はしく我身を捧げ、此身此儘が唯我獨尊の小誕生佛となることが出來様と

思ひます、眞の誕生如來の御供養は是の如き心懸を以てせねばなるまいかと思ひます。

參 考

●釋尊誕生地。迦比羅は黄色の義、幡窳都は城の義、故に迦比羅幡窳都は黄城の義なり、或はまた迦比羅闍城、迦比羅衛城等、十七種の異譯あるも、單に迦比羅城と云つて簡略に従ふを是とす、而して此の城は僑薩羅國にあり、僑薩羅國に南北の別あり、南僑薩羅國は今グンドヴナ及びバ、ールに當り、北僑薩羅國は今ウードに當る、故に迦比羅城は印度の北僑薩羅國の中にありしならんと思はる。次に佛誕生處なる藍毘尼は如何にして發見せられたるか、面してそは如何なる地位にあるかの事柄は何人も知らんと欲する所なれば、多年印度に留學して歸朝せられたる大宮孝潤氏が某誌に記せられたる「藍毘尼園」と題する文中より、その要點を左に抄記せん。

藍毘尼園は原名ルムビニ (Lumbini) の音譯にして羅什三藏は大智度論中に嵐毘尼と譯し玄奘三藏は其紀行、大唐西域記に膝左尼林と稱せり其他尚二三の異譯あり、彼の阿輪迦王時代の方言にはルンミニ (Lumini) と稱し現今は之をルムミンデーイ (Rummin-dei) と稱す

蓋しデイーとは梵語のデーヴァより轉訛せる語にして女神又は貴婦人の尊稱なれば此園内に祭れる聖母摩耶夫人を嵐毘尼女神と通稱せしより遂に地名をもルムミンデーイと云ふに至りしものならん、是れ云ふ迄もなく釋尊誕生の靈地なれば世界最高の偉人、古今獨歩の大聖人、三世洞觀の大覺者は此園に降誕せられたる也、元來形なき大理想、大抱負、大慈悲、大威靈は愛らしき一赤子となりてニコリ此處に現はれたる也、牝鷄は鷲を生まず獅子を産む者は獅子なり聖人を生める者は聖母なり、其人既に偉大、其地豈靈地ならざらんや、此尊むべく慕ふべき嵐毘尼園は印度の北部、雪山の南、尼波羅國の領域内、プトワル州、タライイ地方、テイラール河の西、バガワンプールの北二英里、バデリヤ村の北にあり、故に此處に詣せんものは先ず英領印度に入り、尼波羅國の中央政府より旅行免狀を求め、英領B.N.W.鐵道によりて、ブリッジ、マンガンジ(Bridgenangji)停車場に至り夫れより歩行又は乗象にて北行約十四英里ドリッデー村を経、英領と尼國々境との境界標柱第三十五號の地點を過ぎり、更に北々東行六英里にして、前記バガワンプールの村に至り、更に北行二英里にして嵐毘尼園に達し得べし嵐毘尼園は其面積東西へ凡そ吾が三四丁、南北へ凡そ二丁許り其周圍は殆ど皆田園なり園内の建築物又は石柱が

高く埋もれたる現狀によりて察するに、年を経るの久しき、田園耕作の爲め漸次其周圍を縮少せられたる者の如し、園はや、高く之を望まば林敷を成せる丘陵の如く、園内の西南に一の方形なる古池あり玄奘が西域記に所謂「有釋種浴池、澄清皎鏡、雜華彌漫」とは則ち是れならん、池の北凡そ二三十間にして小高丘あり西より其丘上に登る途端に一の石柱あり形圓筒の如く、其色玄黃、太さは周圍凡そ七尺許り其上半部は折れ失はれ、下半部僅かに存して地上に直立するもの長さ凡そ二丈、是即ち名高き阿輸迦王の石柱にして玄奘が西域記に「有大石柱、上作馬像無憂王之所建後爲惡龍霹靂其柱中折仆地」と云ふは是也、現存下半部の石柱にも割れ目、頂上より中央以下に達するあり、狀落雷の爲めに折れ且つ罅裂せし者の如く、よく玄奘の記事に一致せり、石柱の下部に刻文あり其部分、堆積せる土沙瓦礫の爲に埋没せられ居りしこと既に久しく、爲めにツイ近年に至るまで藍毘尼園の果して何處に在るやを知る能はざらしめし也。

西歴一八九六年、即ち吾が明治廿九年十二月、英政府より派遣せられたる博士フーレル氏(Dr. Führer)が此地に至り此石柱を発見し且つ石柱の埋もれたる部分を發掘せしこと凡そ四尺にして刻文を発見し、其刻文によりて始めて此地如來誕生の聖地なることを知り得

これを玄奘の記に照して益々其然るを確かめ得たるなり、慶すべきかな、翌一八九七年印度政府に於て出版したる同博士の探検報告 Archaeological Surveyor, N. W. Province and Oudh なる書は他に少しく實地と相違して想像を事實らしく作り、且つカンニンググハム氏其他の著書を剽竊せし箇所あるによりて政府は其後發賣を停止し撤回したりと雖も同博士が藍毘尼園を發見したるの功は終に没すべからざるなり。

石柱の刻文は阿輪迦王當時の其地方の方言により、吾が所謂梵字の根原字なるブラーフミール文字を以て刻されたものなり其意味は左の如し。

喜見王（即ち阿輪迦王也）陛下即位の後二十二年に親ら此處に詣拜す、是れ釋迦牟尼

佛陀の誕生せられたる處なればなり、乃ち石馬の像を作り（獨乙のビニール氏は之を

大なる日輪と譯されたり）石柱を建てしむ、是れ薄伽梵の誕生地なればなり、藍毘尼

村は租税を免じて其恩恵を享受せしむ。

若しも善見毘婆沙の説等によりて王の即位を佛滅第二百十八年とすれば此石柱を建てら

れしは正に佛滅第二百三十八年に當るなり。

石柱より更に東に登ること僅に數間、丘上に至れば古廟の堂宇二棟あり其北方なるは既

に廢頽して何たるやを知るに苦しむ、其南方なるは即ち聖母摩耶夫人の廟宇なり、大半既に積土累石中に隱没せられて現存上部の建築は後代に至りて隱没せる古堂の上に増設せられたるの觀あり、而して其古代に屬する部分の堂の後方及び側面より僅かに窺ふを得べく、唐草、紋狀花形などを刻したる甃瓦を挿みて壘み築ける有様又其圖式設計の様子等洵に美なり、堂は東に面し内部に聖母が右手を伸べ、無憂樹に觸れ三名の侍臣又は侍姫其側に立ち聖母の膝下に一赤子即ち悉達太子の誕生せられたる様を刻せる石像あり、惜むべし近邊の土俗印度教の一女神として之を祭り赤色に塗りて之を汚し印度教徒の外、また他國人、他宗教徒の其像前に入るを許さず、此廟前に一條の徑路あり南に通ず、廟の南、古池の比に宰相塔の廢趾と認むべきもの數多ありといふ、然れども簍を掃ひ土石を去るに非れば之を確むると難し、此邊に菩提樹閻浮樹ありと雖も如來の誕生に縁ある無憂樹なきは遺憾と謂ふべし、西域記に曰く釋種浴池之北二十四五步有無憂樹今已枯悴菩薩誕生之處と玄奘の時既に然り、爾來一千二百六十餘年、今日其痕跡だに見る能はざる亦已むを得ざるかな、園の東遠からずして一の水洑あり南に注ぐ、之を現にテイラー、ナデーと稱す、蓋しナデーとは河の義にしてテイラーとは梵語のタイラ即ち油なる

語より轉訛せしものなれば玄奘が傍有小河東南流土俗號曰油河と名實共に一致するなり。園に至りて北を眺まば遙かに黒色の屏風あるを認むべし、是れ雪山最南の山脈にして東より西に走り連山起伏し凹凸して、宛ら鋸齒の列するが如し、此黒色の屏風を隔て、また更に北方遙かに白色の屏風あり巍々たる連峯は體々たる銀冠を戴き千古の積雪は皓として天日に映じ高く蒼空を摩して下に近山を裾とす、遠近相對し高低相應じ黑白相映じて秀麗清爽佳絶快絶なり、園より其近山の麓に至る其距離僅かに十六英里、然して園の四周は悉く是れ田野、渺茫として眼界を極むる所、只だ村落林藪の其間に點々たる而已、四海一切の生物を子として、天地群迷の闇黒を照破したる吾教祖釋迦牟尼は實に此の如き處に於て生れ給ひしなり、實に此の如き處に於て生長し玉ひしなり、實に此の如き處に於て嘯嚳し遊戯し彷徨し考想し玉ひしなり、如來の父王の遺跡たる迦毘羅城跡も亦此國を去ること遠からず若しも吾が明治三十二年三月、印度の考古學者プーラナ、チャンドラ、ムカルジー (P. Oh. Mukherjee) 氏が發見し鑑定せられたる彼のテラウラコト (Tilaura-kot) なる所を以て迦毘羅城跡とすれば藍毘尼園を去ること西北へ僅に十四英里ある而已、一丘土たる藍毘尼園は實によく世界の偉人を出しぬ、云々。

●釋尊誕生の月日。その重なるものを記すれば

▲二月八日説

▲四月八日説

▲三月八日説

▲三月十五日説

大行集經

修行本記

西域記一説

西域記一説上座部

過去現在因果經

瑞應本起經

歷代三寶記

佛所行讚經

佛祖歷代通載

佛祖統記

その他暹羅、錫蘭、緬甸にては二月十五日を涅槃の日とすと云ふ

●釋尊誕生偈。經説により、字句に多少の相異なるものあり。

此生爲佛生、則爲後邊生、我唯此一生、當度於一切。

(佛所行讚)

世間之中、我爲最勝、我從今日、生分已盡。

(本行集經)

我於一切天人之中最尊最勝、無量生死於今盡矣、此生利益一切人天。(過去現在因果經)

天上天下、唯我獨尊、今茲而往、生分已盡。

(西域記)

此即是我最後生身、天上天下唯我獨尊。

(有部雜事)

# 八 釋尊御一代記法話

## 一、信仰の目的

今日は我本師釋迦牟尼如來御一代の御聖蹟の梗概を御話し致さうと思ひます、尤も千古無比の大聖人。殊に智徳窮り無く妙用無邊なる御佛の御一生を、僅少なる時間に於て叙べ奉ることの殆ど不可能であるとは申す迄も無いが、ホンの九牛の一毛大海の一滴なりとも相互に語り合ひ話し合ふて、愈々益々其御恩の廣大なるを感謝し奉り併せて及ばず乍ら御聖徳の萬分の一なりとも慕ひ參らせて、御互が智を磨き徳を修め行を勵み道を成するの御手本に致し度と思ふのであります、取分け我宗に於ては、釋迦牟尼如來を以て三世諸佛の御本體とも萬劫萬徳の御代表とも信じ參らせて拜み奉るのでありますから、御一代の始め終りがソツクリ我等に對する一大教訓であります、ソコで私は茲に修證義最後の御文を拜讀して今日の賛題と致します。

謂ゆる諸佛とは釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛是れ即心是佛なり、過去現在未來の諸佛共に佛と成る時は必ず釋迦牟尼佛と成るなり、是れ即心是佛なり、即心是佛といふは誰といふぞと審細に參究すべし、正に佛恩を報ずるにてあらん。

此御文は明らかに御本尊の性格と信仰の目的とを御示し下されたのであります、乃ち三世十方に諸の佛諸の菩薩ありと雖も、其誓願功德神通光明は畢竟して御一人の釋迦牟尼佛に歸するのであるから、釋尊御一佛を拜し奉るは取も直さず三世十方の諸佛諸菩薩を拜し奉るのである、而して其釋尊の妙智も妙徳もツマリ吾人の一心上に具はりて缺くることは無いに依て、釋尊を信じ奉るのがやがて自己心上の佛智佛徳を顯現する事になるのである、是れ正しく信仰の目的信仰の功德であります。

## 二、大聖の託胎

抑々印度は世界第一の古い國であつて、釋尊御降誕以前二千年の昔から漸次に開けて來たらしい、而して彼の有名なる社會の階級制度は人種を分ちて、刹帝利族婆羅門族毘舍族首圖羅族の四姓とし、刹帝利は政治を掌り婆羅門は宗教祭祀を専らにし毘舍は農商の業を營み首圖羅は前の三族の奴隸の位地に立て居る、不幸にして毘舍や首圖羅に生れた者は、如



何に天才あり徳行あるも、常に上級族の壓制を受けて普通一人前の權利を得ることが出来な  
 んだのである、其中でも婆羅門族は次第に跋扈して刹帝利をも凌駕し、自ら人中の至尊を  
 以て任ずる様になつた、そこで一面には精神界の文明は意外に發達して釋尊の時代には九  
 十六種の學派を出し驚くべき程高尚なる教理を主張する者さへあつたが、他の一面から見  
 れば階級制度の弊害は益々他の人權を無視して、常に傍若無人の振舞を爲し、下級種族の  
 人間は殆ど此世からなる三惡道に墮落して居るが如き慘狀であつたのである、されば世の  
 救主たる大聖人の出現を望むことは早に雨を求むるよりも切なる程であつた、此時に當り  
 我が釋尊は宇宙真理の權化、迷界の救濟者として御出現あらせられたのであります、釋尊  
 の御先祖はアールヤ人種にして甘蔗王と云へる釋迦種族の國王である、無論刹帝利族です、  
 後に國を印度の中部に移して罽曇を姓とせられしが、其子の代となりてから恒河の流れに  
 沿ふて東に下り、都城を築きて迦毘羅伐率堵と稱す、其子孫に師子頗王と云ふがあり、其  
 子に淨飯王と云へる國王があつた、王妃は同族なる拘利國王阿窶釋迦の御女たる摩耶夫人  
 である、此迦毘羅國は至つて小國ではあるが、文武共に發達して天晴文明の華とも謂つべ  
 き國であつて、殊に父君は明君の譽れ高く母君も亦た賢徳世に雙び無き程であつた、此聖

君賢母の間に生れ玉ひしこそ大聖釋尊であらせらる、因果經等に依ますると、釋尊の前身  
 は善白と名け一生補處の菩薩として兜率天宮に在りて說法教化し玉ひしが、娑婆に降生し  
 て衆生を濟度すべき因縁の熟せるを知ろしめして摩耶夫人の胎内に託らせられたとある、  
 併し修證義にも「人間の如來は人間に同ぜるが如し」とある通り、釋尊を以て單に不可思  
 義の靈體とのみ見るは決して釋尊の御本意ではあるまいと思ふ、矢張人間の如來として之  
 を拜し、我等は其御行蹟に習ひ奉らんと心の懸を以て瞻仰し奉るとが肝要であります。

三、降誕

御母摩耶夫人は御妊娠の初より一層御身を慎しみ玉ひ欲念を棄て妄情を離れ、霞に笑ふ花  
 雲に眠る月を心の友とし、正しき教に行ひを淨め妙なる法に世を忘れ玉ひつゝありしが、  
 頃しも四月八日朝日のキラ／＼と出づる時、七寶の車輦に乗り衆多の侍臣や姪女を隨はせ  
 られ、藍毘尼の園へ行啓あらせられた、林に滿つる花は錦繡よりも鮮かに梢に囀づる鳥の  
 聲は音楽よりも妙なり、面に觸るゝ春風は霞を招き池に漲る泉は玉を翻へすが如し、夫人  
 は御氣嫌殊に麗はしく、やをら蓮歩を移して一際目立し無憂樹の下に進ませられ、徐に玉

臂を延ばして香り床しき一枝の花を手折んとし玉ひし時、忽然として右の御脇より御誕生遊ばされたのが釋迦牟尼如来である、此時天神は寶蓋を捧げて御身を覆ひ龍王は香水を灌いて御身を洗ひ參らせし等の奇瑞のあつた事が經文に説てある、其時王子は自ら歩み玉ふこと七歩、一指は天を指し一指は地を指し、微妙なる御聲を發して「天上天下唯我獨尊」と御唱へ遊ばされたとある、サアこゝを好考へて貰ひたいです、天上天下唯我獨尊とは「我こそは天地の間に於て一番尊とよき者なるぞ」といふ御語ぢや、是こそ即心是佛の眞理を説破せられた天地自然の大法輪であります、我等御互も亦宇宙の大道に孕まれ天地の大徳を具へて此世に生れたのであるから、本より佛や神と寸毫の異りは無いのぢや、然るに無始以來煩惱の塵埃が本性の心の鏡を曇すに依りて、自ら三界六道輪廻の苦を招き遂に神たり佛たることが出来ないのである、宗教や教育の必要なる所以は全くコゝにあるのであります、此御誕生の年代に就ては古來より種々の異説があつて、四五十通りの説があると思すこととす、其内最近の説としては、釋尊の降誕は西曆紀元前四百七十九年、即ち今日より約二千四百年前とするのが一番確かであるといふて居るが、我國で最も弘く採用されて居る説に依ると支那周の昭王二十六年四月八日て、神武天皇即位紀元前三百六十八年、

西曆紀元前一千〇二十八年、即ち今日より二千九百四十一年以前と云ふてある、併し今は一々此等の考證をする暇が無いから、暫く二千九百四十一年説に依て置かうと思ひます。

#### 四、出家

かくて父母の御喜びは何に喩えん様も無く、御諱をも悉達多と名けられた、即ち一切成就の義である、然るに月に叢雲花に風は人世の常態、御誕生後七日目に御母は世を去り玉ひければ、其妹君なる波闍波提夫人が保育の任に當られた、父君は猶も阿私陀仙人をして太子を相せしめられしに仙人は熟々と相好を拜して涙に咽んだから父君は大に驚きて何故ぞと問ひ玉ひしに、此太子は後に佛と成りて衆生を濟度ましませさん我れ年既に老たれば親しく其教化を被むると叶ふまじと思へば最と遺憾に堪へずとて、又サメムと泣きたれば父君は嬉しさの勝ると與に太子の出家遁世を恐れ、世を厭ふの心を起させまじとて、太子の爲めに冬御殿夏御殿等を築き數多の姪女を侍らせ、有らん限りの榮華を興へられたとある世に超へて聰明なる太子は七歳にして早くも五明四韋と稱する内外の學術を修め且つ武道も亦優れて上達せられたるが、熟々人生の状態を觀察して世の果敢なきを了り人々の迷へ

る様を淺間しく御思召し、何卒して宇宙の本源を究め人生の歸趣を明らかに一切衆生を濟度せんとす誓願を發せられたぢや、父君は太子十七歳の時に善覺王の女にて淑徳の譽れ高き耶輸陀羅姫を娶りて妃と爲し、間も無く羅喉羅と云へる一子をさへ設けられた、されども太子の精神は金鐵よりも堅く、東西南北の四門を出て、城外に遊ばれし時の如き、圖らずも老人と病夫と死者との相状を見そなはし、求道の志彌々深く出家の望み益々切なりしが父君の之を許し王ふべくもあらねば、遂に十九歳の十二月八日の夜半潜かに王城を逃れ出て、健歩と云へる馬に跨り御者車匿一人を連れて、東の方藍摩市方面なる深林の中に入りて自ら鬚髮を剃り落し、錦の衣を脱ぎて弊れたる服に換へ、是れより強に車匿を返し進んで苦行婆羅門の跋伽仙人を訪ひて道を尋ね、更に阿羅邏迦蘭仙人の處に至りて法を問ひたるも、其修行の目的が太子の心を満すに足らざりしかば、轉じて摩訶陀國なる前正覺山に分入りて、六年端坐の御修行を遊ばされました、釋尊が是の如く人生の快樂を一擲して家を出て山に入り王ひしは、決して世の所謂厭世思想に駆られたのでは無く、四弘誓願とて四通りの願力から出たのであります、乃ち一には無邊の衆生を濟度せんが爲め、二には無盡の煩惱を解脱せんが爲め、三には無量の法門を研究せんが爲め、四には無上の佛道を

成就せんが爲めてあります。

### 五、降魔

釋尊が六年間の御修行は如何なる状態でありましたらう、日々の御食は少かに一麻一米と云ふて少分の胡麻と御米とに過ぎぬ、眉にかゝれる蜘蛛の絲、膝を貫く蘆葦の葉、肉落ち頬頰けて見るも哀れな御有様であつたのです、父君の計ひにて憍陳如等の五人の侍者があつたなれど、彼等を使役し王ふ事とても無く、恰も枯木の様になつて難行苦行あらせられたぢや、彌々修行成熟の時節到來するに及んで、吾れ此儘に成佛せば後世の者必ず肉體を苦しむるを以て正修行と誤解すべしとて、忽ち尼連禪河に於て沐浴せられ、難陀といへる牧女の供養を受けて乳糜を食して身體氣力を回復し王ひ、それより佛陀伽耶なる畢波羅樹の下に進ませられ金剛座の上に淨觀の草を敷きて結跏趺坐し「我れ成佛せずんば誓て此座を起つまじ」と御誓ひ遊ばされたとある、此座上に在せし時數量りも無き惡魔の障礙があつたぢや、魔とは害の義で總て吾人の善事を妨害する事です、是に四魔五魔等の説あるも概括すれば内魔と外魔との二つとなる、内魔とは精神の中より出づる惡魔乃ち煩惱妄念で

ある、外魔とは天魔鬼神を始め總て外界より吾人の目的を妨ぐるものである、天上界の悪魔もあれば外道の誘惑もある境遇の障りもあれば自然界の妨げもある、此等の悪魔に打勝て孟子の所謂「富貴も淫すること能はず貧賤も移すこと能はず威武も屈すること能はず」といふてなければ眞の大丈夫とは申されぬ、瑞應本起經等に依ると釋尊御修行の時は八十億の悪魔があつて、或は暴力を以て強迫したり或は女色を以て誘惑したり、千變萬化の秘術を盡して、釋尊の志を亂さんとしたるも、釋尊は少しも恐れず迷はず憂へず惱まずして寂然不動の境界に安住して居られました、そこで流石の魔軍も其精力を使ひ盡し、遂には釋尊の志氣と高德に服して悉く降服するに至つたのである、是を降魔と申すのであります我等も亦た是の如く、一善を行ひ一徳を積まんとすれば、必ず悪魔の障礙を受くるに極まつて居る、克己とか制欲とか云ふのは皆な是れ吾人の降魔力に名けたものであります。

### 六、成道

一雲晴れて後の光りと思ふなよ本より空に有明の月」悪魔降服と知見開發とは同時に無ければならぬ、何故ならば悪魔の大首領は無明愚痴の煩惱であるからである釋尊は御年三十

歳の十二月七日の夜降魔の大威徳を完全に現はし玉ひ、其翌日の曉天に忽然として佛知見を開發し茲に無上正覺を成せられ、大聖釋迦牟尼佛陀といへる最尊無上の聖位に昇せられた、時に臘月八日曉の明星の出づるを見そなはせらるゝ際であつたから、之を見明星悟道とも申すのである、此時の御語が「我と大地の有情と同時に成道す」といふのぢや、是ぞ釋尊が劈頭第一の御宣言にして佛敎八萬の法藏の關鑰であります、釋尊成道して廣大の智慧自から内に開き無限の慈悲自から外に溢れ、大光明を放つて三世十方を照破し大神通を現じて宇宙乾坤に獨歩し玉ひ、此知見より見玉ふに一切衆生一箇として佛ならざるは無く天地萬物一法として道なるざるは無い、我と大地の有情とは同時に成道し同時に作佛して居るぞとの御說法ぢや、して見れば我等御互は本來の佛様である、草木國土も皆な御悟りの姿である、コ、を承陽大師は「峯の色溪の響も皆ながら釋迦牟尼佛の聲と姿と」と詠ぜられ、東坡居士は「溪聲便ち是れ廣長舌、山色豈に清淨身に非ざらんや」と詠ふたのである、然るに人生の有様を見渡すに凡夫世界の悲しさは、寶を抱き乍ら貧を訴へ玉を懸け乍ら飢に泣くにも同じく、佛を抱いて佛を知らず道を備へて道を忘れ、病なきに惱みて貪瞋癡慢の暗に迷ひ繩なきに縛られて罪惡業障の巷に苦しむ哀れとやいはん氣の毒とやいはん

ソコで釋尊は三七日の間菩提樹の下に思惟して、衆生濟度の方法を研究せられ、遂に山を下りて說法教化の門戸を開放せられたのぢや。

七、轉法輪

佛祖歴代通載や其他の御傳記等を參酌して、御化導の上の重なる事を擧れば、成道の翌年の初め波羅奈國の鹿野苑に赴きて憍陳如等の五人の比丘を度して、四聖諦の法といふを説かせられた、是に於て佛と法と僧との三寶が始めて世に現はれたのである、次に耶舎長者と其親と妻とを教化せられたのが優婆塞優婆夷、即ち信男信女の始まりである、鹿野苑に在すこと三ヶ月にして五十六人の御弟子が出来た、それより王舎城に赴き玉ふ時恰も雨季に入りしかば、雨季安居の法を定め夏三ヶ月丈樹下に於て御弟子と共に禁足淨行したまふた、右の安居を了つて後、事火波羅門の首領たる優樓頻羅迦葉、那提迦葉、迦耶迦葉の三人を度し其門弟一千人を併せて盡く佛弟子とせられた、是より釋尊の偉徳は天下を風靡し王舎城の君主及臣民は残らず佛門に投じて最も熱心なる信者となつた、城中第一の長者迦蘭陀は竹園を献納し頻婆沙羅王は園中に一大精舎を建立せられた、是れが竹林精舎と稱す

るのである、其後舍利弗目連の二尊者は門弟二百五十人を率ゐて佛弟子となり、舎衛の大長者須達は黄金を祇園に布て寺を建て、献上した、是が祇園精舎である、成道十二年には郷里に還り親く父君の爲めに説法あらせられた、斯く釋尊は成道の曉より涅槃の夕に至る五十年の其間、機に従つて法を説き物に應じて益を施し、一日半時も席の暖まる事はあらせられぬ、其御説法の全體を天台宗では時間の上からは華嚴、阿含、方等、般若、法華、涅槃の五時に分ち、教理の上からは藏教通教別教圓教の四教に分類して居る、五時説法の頌には「華嚴最初三七日、阿含十二方等八、二十二年般若談、法華涅槃共八年」とあつて華嚴經は菩提樹下に於て三七日の御説法、阿含經は十二年、方等は八年、般若經は二十二年、法華經涅槃經を合せて八年です、是も大體の區分であつて無量の衆生に對して無量の法門を説かせられたる事なれば、一會の中にも阿含あり方等あり、一座の間にも般若もあり法華もあつたに相違ない、それを後世に至りて種々なる判釋を施して、大乘小乘頓漸聖道門淨土門顯教密教等の區別を劃し、遂に多くの宗派を出すに至つたのである、併し古歌にも「分け上る麓の路は多けれど同じ高嶺の月を観るかな」とある通り、佛敎の大本領は始終一貫して二も無く三も無い筈である、乃ち其大本領は同時成道の眞理、本來成佛の妙

法に歸するのである、水の冷暖は飲んだ者で無ければ其味を知ることが出来ぬ、宇宙の眞理も知見開發せざれば證得することが出来ぬ、故に釋尊は最後に至り靈鷲山頭に入萬の大衆を集め、堂々として壇上に御上りなされたが一言半句だも唇より漏し玉はず唯だ一枝の花を拈じて示されました、佛事門中一法を捨てず、一枝の花一莖の草、一塊の土、一滴の水にも眞理は満ちて居る佛法は溢れて居る、釋尊の拈花は實に教外別傳の大法輪ぢや、其時大迦葉尊者は釋尊の御本領を明らかに明らめてござるから破顔微笑といふてニツ、コリ笑はれた、すると釋尊は「我に正法眼藏あり、大迦葉に附屬す」と御宣告遊ばれました、是ぞ我が禪門に於ける以心傳心の根元であります、ダガ禪門にばかり以心傳心の法があるのでは無い三百餘會の説法八萬四千の法門、其堂奥を究むれば歴然として教外別傳の涅槃妙心が存在して居るのである、御經文を見るに附けても此妙心に徹底せざれば釋尊を去ること遠して遠しと云はねばなりません。

### 八、鶴林の遺訓

釋尊御年八十歳の二月に至り、御涅槃の時節到來せる事を知召し豫め之を御弟子方に御告

なされ波婆城を過ぎ玉ひし時工師純陀なる者特に請して一齋の供養を設けた、是れぞ最後の御供養であつたから天下の人が等しく純陀の光榮を羨んだ程である、それより拘尸那城の附近、跋提河の畔に至り玉ひし時病魔交々御身を侵しければ、娑羅樹の繁れる間に錫を留め侍者阿難に命じて師子床を設けさせ、其上に御憩み遊された、娑羅の大本は八本あつて四本づゝ相對し、枝と枝と接し葉と葉と參はりて宛然一大寶蓋の相を爲して居つた、それて是を雙樹とも云ひます、釋尊は此所を御終焉の地と定められ此師子床に坐して最後の御説法を爲されたのが大涅槃經で、北涼の曇無讖三藏は四十卷に翻譯してある、彌々二月十五日の中夜に至りて特に比丘衆を呼び玉ふて更に御遺言の御教訓を垂れ玉ふたのが遺教經であります、其時娑羅樹の半ばは俄に枯れ果て眞白になつたので後世是を稱して鶴の林とも申します、涅槃經は扶律談常と云ふて戒律を扶け起して佛性常住の理を談ぜられ、遺教經には更に戒法を以て成佛道の師とせよと御説き下されたのである、戒法無量なりと雖も我が宗相傳の十六條の佛戒を出てぬ、乃ち佛教實踐道徳の標準である、戒法は戒定慧三學の中の一部なりと思ふて輕んじてはならぬ、戒法は身口意三業の上に實現する佛心佛行にして、取も直さず禪定の妙相智慧の應用である、故に我が宗は佛戒を以て安心起行の

中心として之を信受し奉るのであります。

### 九、入涅槃

此時釋尊の御涅槃を悲みて御床の下に雲集せる者は、比丘尼を始めとして國王大臣等は言ふに及ばず、天龍八部より禽獸に至る迄も聚り來り、其種類は五十二類の多きに上り、皆悉く涙を濯ぎ號泣して御別れを悲んだとある、今日の人には此事實を怪んで、そんな事があるものか抔と云ひたがるが、釋尊の御一代を叙るは釋尊御本意の所在を窺ひ奉りて、吾人が信仰行持の標準と爲すのであるから虚偽を傳へてどうしませう、盛徳の君子は恩禽獸に及びて無知の畜類迄も深く其恩に感ずる事は古今其實例に乏しくは無い、徳一郷に及ぶ時は一郷齊く其死を悲み、徳一國に及ぶ時は一國舉つて其死を悼む、伊藤公爵が曩きに異郷に於て凶手に斃れ玉ひし時の如き、獨り國內の人々のみならず世界列國迄も相共に限り無き哀悼の意を表したては無いか、之れに反して惡人邪見人であると却て其死を喜ばれ其死の早きを望まるゝ、釋尊は千古絶倫の大聖にして其の徳の大なる事は幽明に及び情と非情とに通ず、故に其御涅槃に當り天龍八部鬼神禽獸に至る迄御枕邊を圍んで哀悼の涙に咽び

しと云ふは、理の當然左もあるべき事と思ひます、斯く御別れを惜み奉りしに拘はらず生者必滅會者定離は常ならぬ世の常にして二月十五日の最夜中天地寂寥として樹影暗澹たる間に於て、御頭を北にし右脇にして臥し西に向き玉ひしまゝ、泊然として涅槃の雲に御隠れ遊ばされました、幾萬の道俗は天に叫び地に喚び腸を悲歎の涙に絞らぬは無く、阿難尊者の如きは悲しみの餘り御床の前に悶絶せられた程である、忉利天に在せる御母摩耶夫人は阿那律尊者の報告に驚き天より降られたが、既に寶棺に藏めし後であつたなれど、釋尊は忽ち棺外に現はれて御對面あらせられたとある、一七日を経て第一の御弟子迦葉尊者は五百人の僧と共に他國より歸り來り、遂に御尊骸を茶毘の烟と爲して大供養を營まれ、御舍利は八ヶ國の國王に分與して各々其國に於て塔廟を建てしめられました、其れより大迦葉尊者が主となりて五百の聖僧と共に釋尊御一代の御説法を編集せられ、其後第二第三の編集を経て之を大成し、遂に今日我國に存在するが如き一切藏經が出来たのであります。

### 十、正傳の宗旨

以上は釋尊御一代の概要を御話しに及んだのであるが本より大海の一滴にも當らぬ程のも

のてありませが、釋尊の成道といふは本來具の智徳の開發せられたのであるから、御一代の御化導も要するに一切衆生をして本來具の智徳を開發せしめんが爲めの大悲大方便である、法門無量なりと雖も終に一乘に歸し經卷無數なりと雖も一佛心を出てぬ、其の佛心を御傳へなされたのが大迦葉尊者である、それより嫡々相承して二十八祖達磨大師に至る、大師は支那に來りて佛心宗を慧可大師に傳へられ、亦々直指單傳して五十一祖たる我が高祖承陽大師に至つたのである、高祖より四傳して五十四祖たる我が太祖常濟大師に至り、次第に弘通發展して遂に今日の宗門となつたのであります、故に我が宗は別に所依の經典を定めず、一代藏經を總括して直に佛の心印を明らむるを以て宗旨と爲すのである、佛の心印を明らむるの法は坐禪であつて、佛心の功徳を現はすのが御戒法である、故に禪と戒とは一如であります、其中に御戒法を丰標して安心起行の原則を示されたのが修證義であります、修證義の大綱は懺悔滅罪受戒入位發願利生行持報恩の四ヶ條です懺悔に依りて我等の精神を根本的に淨らかにし且つ佛の加被力を戴いて罪障を消滅し、次に佛の御戒法を受け奉りて即身に於て佛心の功徳を現はし以て成佛得脱の本懐を成就し、更に大誓願を發して利益衆生の佛事を營み身口意の上に正しき道を行持し此功徳を以て進ては國王父

母の大神に酬い退きては佛祖化導の慈恩に報い、以て人の人たる道を全うし此身此儘に釋尊御一代の聖徳を實現し、佛教の大目的たる本來具の智慧徳相を縱横無礙に發揮するを以て信仰の大目的とするのであります、委しき事は到底此席に於て演べ盡すべきに非ざれば、他日更に親しく御話に及ぶこと、致さうと思ひます。



参考

●釋尊の傳記に就て。先づ大藏經中に於て佛傳に關係せるものを擧ぐれば

一、佛所行讚經 五卷

原本は、馬鳴大士の選作にかゝり、支那では北涼の代、中印度の三藏曇無讖が之を譯出した、内容は一部二十八品に分れ、専ら頌文を以て釋迦降誕の始より入滅分舍利に至るまでの御事蹟を讚叙して居る、又此の梵本ブツダチャリタ (Buddha-charita) は印度文學史上有名なもので、泰西に譯出せられたものも鮮くはない、但し梵本は十七品に止りて入滅までは完結して居ないと云ふことである。

二、佛本行經 七卷

本書一名は佛本行讚傳とも稱し、支那劉宋の代、六合山寺の沙門寶雲の譯出にかゝるものである、一部三十一品に分れて居るが、内容は前本と大差はない、故に同本異譯と云ふ説もあるが果して然るや否やは他日の研究に譲る。

三、十二遊經 一卷

是れは支那東晋の代、西域の三藏迦留陀伽の譯にかゝるもので、内容は釋尊が修行得道の後、十二ヶ年中に十四國を巡遊して説法利生せられた御事蹟を述べたものである。

四、佛本行集經 六十卷

本書は支那南北朝の末、北印度の沙門闍那崛多が隋に於て譯したもので、一部六十品に分れ、其内容は釋迦の御傳記と是れに關聯した種々雑多の古傳説を續々述べて居る、梵本のマハーブスツ (Mahāvastu) は、之が原本ならんと云ふ説もある。

五、過去現在因果經 四卷

本書は支那劉宋の代、中印度の沙門求那跋陀羅の譯したもので、其内容は、釋尊が過去普光佛の所に於て、授記を得てより生々世々菩薩の道を修し、遂に八相の化儀

を現はす其前半生を述べ、而も一々往昔の因縁を引て之を結んで居る。

六、修行本起經 二卷

此れは支那後漢の代、西域沙門竺大力と、同康孟祥との二人の譯出にかゝり、前の過去現在因果經と同本異譯と云ふ事である。

七、太子瑞應本起經 二卷

本書は、支那吳の代、月支國の優婆塞で支謙と云ふ人が譯したものである、内容は前の本起經と同一で、前本は舊譯の方に屬し、之れは新譯の部に屬して居る。

八、異出菩薩本起經 一卷

本書は、支那西晋の清信士である聶道真と云ふ人の譯したもので、是も前經と同本異譯と云はれて居る。

九、中本起經 二卷

本書は、支那後漢の代、西域の沙門曇果と康孟祥二人の譯出で、一經十五品に分れ、内容は釋尊の行跡を略叙したものである、長阿含經の四部份始起と名くる一章、即ち之であると云ふ。

十、方廣大莊嚴經 十二卷

本書は、又神通遊戲經とも云ふ、支那李唐の世、中天竺の沙門、地婆訶羅三藏の譯出したものである、一經二十七品に分ちて、佛陀降誕のそもくより轉法輪、囑累に至るまでの御事蹟を述べて佛傳關係書中最も詳密なるものである、梵本のラリタゴスタラ (Lalitavastu) は、之が原本であらうと云ふ。

十一、普曜經 八卷

本書は、又方等本地經とも云ふ、支那西晋の代、月支國の沙門、竺法護の譯出にかゝり、内容は前經と唯品に開合の相違あるのみで、同じく佛陀降誕の始より初轉法輪に至る前半生を述べてある。

十二、佛說衆許摩訶帝經 十三卷

此の書は、支那劉宋の代、中印度の沙門、法賢の譯したものである、内容は釋迦一代の因を二十有餘の部類に分けて詳述し、殊に釋尊の家系等を記載して居る。

十三、大方廣佛華嚴經 八十卷

唐の實叉難陀の譯、その第三十三卷佛不思議品の中に

示現兜率入胎出胎王宮逾城修道成正覺轉法輪入涅槃等十種の佛事が説かれてある。

十四、大智度論 百卷

龍樹の造羅什の譯、第一卷に般若經の緣起を解説する中、如來八相の梗概が出て居る。

十五、佛般泥洹經 二卷

西晋の代、白法祖の譯、釋迦晚年の行化より、入滅、荼毘起塔、結集經典まで出て居る。

十六、大般涅槃經 三卷

前經と同じく入滅、荼毘等を叙述したもので、東晋の法顯の譯である、而して前經と共に長阿含の遊行經と同本と云ふことになつて居る。

十七、大般涅槃經後分 二卷

苦那跋陀羅三藏の譯前と同じく入滅、起塔等の事蹟が出て居る、晩年最後の釋尊は、此の三經に依て知られるが、他に、

十八、大般涅槃經 四十卷

これは曇無讖三藏譯である。

十九、南本大般涅槃經 三十六卷

これは宋慧觀等再治である。

二十、大般泥洹經 六卷

法顯覺賢兩師共譯であるが、之れは事蹟よりは入滅度時の遺教で佛身常住の理を説かれたものである。

廿一、釋迦譜 十卷

是書は梁の僧祐師の述作にかゝるもので、内容は、釋迦の種姓より進みて釋尊在世の聖跡、乃至滅後法滅盡に至る三十有餘の年譜を述べたものである。

廿二、釋迦氏譜 二卷

此の書は唐の道宣律師の述作にかゝり、内容には所依の賢劫氏族の根源、所託の方土、法王の化相、聖凡の後胤等の五章が挙げられてある。

廿三、釋迦方志 二卷

是書も道宣師の述作で、上下八篇に分れ、内容は佛教の興起から其流通の方土等を詳述して居る。

廿四、歷代三寶記 十卷

清朝翻經學士費長房の撰、その初めに佛生乃至入滅等

を支那の年代に合せて註記せられてある。

廿五、佛祖統記 四十五卷

釋迦本紀の中に、佛一代の事蹟が出て居る。是は宋代に於ける台門の學匠志磐師一代の名著である。

廿六、四分律 六十卷

小乗所傳の律で西曆紀元四百五年姚秦の世、佛陀耶舍竺法念等の共譯であつて中に古形の佛傳を載せ史實が所々に散在してある。

廿七、出曜經 三十卷

姚秦の竺佛念の譯で譬喩的訓誡を韻文を以て記されたものである、佛傳及印度史實に關する叙事が少くない。

その他、近頃發行せられたるもの、二三を舉ぐれば、井上文學博士堀學士の合著になれる『増訂釋迦牟尼傳』はその詳細なる點に於て最も特色を有し、常盤文學士の『釋迦牟尼傳』は簡潔を以て勝れ、羽溪文學士の『釋尊の研究』は、その教理を闡明せる點に於て頗る詳細なり。

廿八、根本說一切有部毗奈耶雜事 四十卷

唐の世義淨の譯出で佛傳に關する記事其中に散見してある。

廿九、頻婆娑羅王經 一卷

頻婆娑羅王の記事で王と釋尊との關係をも叙述し法賢の譯出する所である。

三十、佛垂般涅槃略說教誡經 一卷

西曆第五世紀の初姚秦の首都長安に於て鳩摩羅什の譯出で、略して『遺教經』と稱す、佛入滅の際弟子に與へられた遺誡である。

### 九、孟蘭盆禪話

#### 一、盆の起原

布施といふは食らざるなり、我物に非ざれども布施を障へざる道理あり、其物の輕さを嫌はず、其功の實なるべきなり、然あれば則ち一句一偈の法をも布施すべし、此生他生の善種となる、一錢一草の財をも布施すべし、此世佗世の善根を兆す。云々。

盆と正月、是が我國に於ける一年中の二大時期であります、就中、正月は福壽を祝する事が儀式の中心となつて居り、盆の方は祖先を祭る事が行事の基礎となつて居る。正月は主として世間的で、盆は主として宗教的の様な傾きがある。尤も正月にも四方拜元始祭等の國家の大禮もあり、又民間でも元日の曉天には眞最初に鎮守様と御寺に參詣するといふ様な風習もあります。盆とても中元の祝ひ事もあるから、自から人事と宗教とが調和されて、知らず／＼眞俗不二祭政一致といふ理想が現實に行はれて居るやうに思ひます。ともあれ本月は盆の事であるから、只今讀み上げたる修證義第廿一節の御文を賛題として、禪門の

見地より盆會の御話をしてみやうと思ひます。元來盆といふは略語で、具さには孟蘭盆といふのです、孟蘭は梵語で此には救倒懸と譯して、苦惱を救ふの義である、盆は器の事です、百味五果と稱する種々の供物を盆器に盛り上げて、之を佛様や佛の御弟子に供養し奉り、其功德を以て衆生倒懸の苦しみを救ふといふ意味であります。其起原は釋尊御在世の砌十大弟子の中に神通第一の目連尊者といふがあつた、天性孝心深くして、親に事ふるの道に於ては、實に百世の模範とも謂ふべき程であつた。然るに其母親は世にも稀なる慳貪無慈悲の人であつて、孝子目連の論しすら糠に釘打つ如くにて更に其甲斐なかりしが、惡因惡果の天則は遁るゝ由もあらずして命數既に盡さるや忽ち餓鬼道の世界に墮落したのです。尊者は神通の力を以て之を知りしかば、其悲しきは喩ふるに物なく、祇管母が飢渴の苦しみを救はんとて、多くの飲食物を整へて、餓鬼道に赴き之を與へんとせしが、惡業の致す所左程の珍味も忽ちに一團の焰と變じ、益々其苦しみを増す許りであつた。そこで釋尊の膝下に拜を設けて、切に御救ひを願はれたぢや。其時釋尊の仰せに、汝が母は慳貪の業に依りて飢渴の苦しみを招きたるものにして、所謂自業自得なれば、佛の慈悲力と雖も之を如何ともする事が出来ぬ、只だ最第一の善根を行ひなば、罪障を消滅することを得べ

し、幸ひに七月十四日十五日十六日の三日は、雨期九十日の間佛の弟子が淨行禁足して、夏安居を修し身を淨め心を正しうし、法を守り道を行ひたる最終の日であるに依つて、自恣の日と稱す、自恣とは自ら恣まゝにすて、無禮講といふやうな意味である、無禮講といふても亂暴や悪戯を爲る事ではない、互に恣まゝに人の非をも擧げ又自分の罪をも懺悔し、言はゞ双方の心の中に藏せる罪も無く、又不快の念や危懼の思ひを留めて置かぬやうに、残らず懺悔したり懺悔させたりするのであるから、最も宗教的な又道徳的な神聖の日である。故に之を佛歡喜の日とも稱して佛様が最も御満足遊ばさるゝ日です。されば此日に於ける佛弟子こそは身心清潔にして一點の汚れも無い、眞に玉の如く花の如しともいふべきである。此の玉の如く花の如き佛菩薩や佛弟子を供養するは、功德中の功德で、即ち最第一の善根ぞと仰せられたぢや、そこで目連尊者は早速孟蘭盆會を設けて、一心に供養せられたので、さしにも業障深重なる母親も餓鬼道の苦しみを解脱せられました、是れが孟蘭盆の起原である。

## 二、追孝の本旨

さすれば孟蘭盆の法會は最勝の布施行にして、宗教上最第一の善根として勤むるのであるから、其親の善道に在ると、惡道に在るとを論せず、又生前と歿後とに拘はる譯のもては無。所謂施食法の回向の文に、「存する者は福樂にして壽窮り無く、亡する者は苦を離れて安養に生ず」とある如く、存亡俱に其親に利益を與ふるといふのが盆會の目的である、此精神が次第に擴張せられて、上は先祖代々の靈を迎へて供物を捧げ、佛事を修して次に廣く三界の萬靈に祭祀して法供養を行ふ事になつたのです。釋尊は孟蘭盆經に於て諸々の弟子に對し、凡そ慈孝を行はん者は、現在の父母及び過去七代の父母の爲めに、七月十五日佛歡喜の日僧自恣の日に於て、百味の飲食を孟蘭盆の中に安じ、十方自恣の僧を施すべし。願はくは現在の父母をして壽命長久にして、無病無難ならしめ、乃至七世の父母をして惡道を離れて善道に生ずる事を得せしめんと仰せ下されてある。然れば孟蘭盆會の精神は全く慈孝の二字に歸するのである。慈孝の二字實に是れ道徳の根底、萬善の本源であります、故に支那にては梁の武帝大同四年七月十五日に、帝自ら十方の僧寶を請し同泰寺に於て盆會を修せられ、其後齊の太祖、唐の太宗等は、禁裏に於て行はせられた。殊に我國に於きましては、開國以來忠孝の二道を以て國體の基礎となし、且つ現世の父母に事

るのみならず、死後の精霊及び累代の祖先を祭祀するを以て孝の全きものと爲すといふが、所謂維神の教であるから、孟蘭盆會の如きは最も能く國體に適し國風に合ふて居る。されば三十八代齋明天皇の三年七月十五日始めて孟蘭盆經を講じて父母の感恩に報せしめ玉はれました。四十五代聖武天皇様の天平五年七月十五日には、宮中に於て盆會を行なはせられ、殊に之を年々の常式と定められ、且つ天下一般に詔して永遠に之を行はしむ事ことになつたのである。凡そ孝行には、孝養と追孝との二つがある、愛敬の誠を盡して父母の心を安じ、且つ之を樂しましむるを孝養といひ、父母の歿後に至りて懇ろに其靈を祀り以て父母の菩提を弔ふのが追孝です。又自己の父母のみならず、父母の父母、其父母の父母といふ様に段々と其本に遡つて、遂に先祖代々に追孝するは孝の大なるものである。佛教では更に自分一箇を中心として、過去幾萬億劫の以前に遡り、前生の父母前々生の父母等の靈にも回向して其冥福を資くる事となつて居る。此觀念を以てすれば、我等は無始劫來三界六道に輪廻して、幾百萬億の生死を経て居る、而して其生ずるや父母ありとすれば、我等が過去の父母も亦た幾百萬億なるやを知らず、行基菩薩の歌に「山鳥のほろく」と啼く聲さけば、父かと思ひ母かと思ふ」とある通り、林間に囀る鳥、波間に遊ぶ鱗も、

我等と親子の因縁があるかも知れぬ、斯く觀する時は、承陽大師が、「六の道遠近迷ふ輩は我が父ぞかし我が母ぞかし」と御詠じ遊ばされた如く、六道の衆生は皆我が父母なり骨肉なりともいはねばならぬ。して見れば一切衆生は盡く我が恩人にして、天地間に他人は一つも無い事となる。佛菩薩の大慈大悲は皆此觀念から現はれて居る、故に孝行の心を推廣めたのが大慈悲であるに依つて、父母先祖に對するの追孝がやがて三界の萬靈に回向する最勝の佛事となる。されば慈悲心と孝順心とが一如となりて、平等利益の念に住し以て所有恩徳に報ふるのが追孝の本旨であらうと思ひます。

三、道德の基礎

誠を盡して恩分に報ずるは實に忠孝の根本義である。而して忠孝の二道が正しく人間道德の基礎である、故に教育の御勅語には、「我が臣民克く忠に克く孝に、億兆心を一にして世世厥の美を濟せるは、此れ我が國體の精華にして教育の淵源亦實に此に存す」と御諭し下されてある。昔し神武天皇様が御東征あらせられ、大倭の群賊を平らげ玉ひて、帝宅を榎原に營みて、天皇の御位に陞らせられた、其時の詔には、「我が皇祖靈は天より降り照して

睽が躬を助け給へり、今諸々の虜ども已に平らぎて海内穩かになりつれば、天神を郊祀して大孝を伸ぶべし」と宣ひ、鳥見の山中に靈時を設け、皇祖を御祭りなされて、後に政を御敷き遊ばされたとあり、皇祖を祭るを大孝と仰せられた、是れ則ち追孝の意である。崇神天皇様の詔には、「我が皇祖の天皇たちの宸極を光臨し給へるは神に事へ民を牧ひて天下を經綸給はんが爲めなり」とある。神に事へとあるが孝順の道で、民を牧ひてとあるが慈悲の徳であります。故に我が皇室の如きは全く孝順と慈悲との大徳に依りて建設せられたのであるから、寶祚の隆えんこと天壤と與に窮りが無いのである。是の如き廣大なる御聖徳の光りに照されて、益々忠孝の道を勵み仁義の徳を修むるのが我國民道德の基礎であります。或人が親が子に向つて孝行を強ひるのは宜しくない、親が子を愛育するは自然の情に出で當然の義務である、故に之が子たる者は、親に孝行を盡すよりも、其子を愛育することに心懸けねばならぬ、然るに孝行といふて孝行萬能主義を唱ふるは、孝に偏するものではあるまいかといふた事がある、是は立教の立場の違ふ所より起つた説である。親たる者が無暗に其子に孝行を強ひるのは、種々の弊害を生ずるの恐れがあるから頗る注意せねばならぬが、子たる者の方から云へば、孝の一字を以て行の源とせねばならぬ。親を疎

略にする様な者は、其子に對し果して眞の愛情があるであらうか、親に對して愛念の深からぬ者は社會公衆に向て果して眞の慈悲があるであらうか、拙衲の經驗に依ると甚だ覺束無い様に思はるゝ、孔子様が孝を以て「徳の本なり教の由て生ずる所なり」といはれ、又「親を愛する者は敢て人を惡まず、親を敬する者は敢て人を慢らず、愛敬親に事ふるに盡きて而して徳教百姓に加はる」といはれたのが、實に萬世の洪範であらうと思ひます。忠臣は必らず孝子の門に出づ、親に對して絶対的柔順の人に非ざれば國家に對しても献身的奉公は六ヶしい、況んや眞實追孝の念なき者は、決して公平無私の徳は養はれるものではない、故に本居宣長翁の歌にも、「父母は我が家の神我が神と、心つくしていつけ人の子」とあり、松平樂翁公も「子を思ふ心の道も親に仕へよ世の中の人」と詠じてある。寂室録には「人生れて世に處して其親在す時は則ち晨夕左右を離れず、勞苦を憚る事なく其の侍奉の誠を罄す、其亡するに及ぶ時は則ち或は墓畔に廬して服に侍する事三年す、若し出家の士ならば、固く心喪を守り、勤苦練行して歲月を限らずして冥福を薦む、之を孝の終りといふ」とある。此等の意義を能々心得て貰ひたいものであります。

四、王法と佛法

抑も王法即ち國家の法令、人道の規律と佛法とは、決して相離るゝものではありませぬ。人の人たる道を明らかにするのが王法で、人をして佛たらしむるのが佛法であるから、一應は其立場を異にして居るやうに思はるれど、佛とは何ぞやといへば我等の一心を離れたものには無い、曾て或僧が馬祖大師に「如何なるか是れ佛」と問ひしに、大師は「即心是佛、」乃ち此心がソックリ佛なるぞと答へられた。元來佛とは梵語には佛陀耶、翻譯して覺者又は智者といふ、迷の夢覺めて悟りの智慧を成就せられた御方であるからぢや。それを我國ではホトケと稱するに就ても色々の解釋はあるが、天桂禪師の歌に「佛とは誰が結びけん白糸の賤が苧環くりかへし見よ」とあるに依れば、煩惱の結ぼれの解けし境界に名けた稱號である、一口に申せば、顛倒の迷を離れて、本心の光の現れたる御方をいふのである、されば一切の衆生は盡く是れ本來の佛なのであるが、唯だ貪慾瞋恚愚痴の迷雲に蔽はれて暫く佛の光が隠されて居るのぢや、此迷雲の爲めに知識も道德も幸福も快樂も總て眞黒々になつて顯現せぬ、爲めに人道も發達せず、國運も發展せぬ様なことになるのぢや。

國法といふも畢竟人道の發達、國運の發展を目的とするの外は無い。其人道が發達して智徳圓滿の位地に進んだのが佛様で、國運が發展して、文明開化の絶巔に達したのが佛の御淨土である。して見れば政治も教育も實業も工藝も、盡く佛法を實現する方法であると云ふことが出来る。さればとて他土の往生、未來の成佛を否認は致さぬ、併し佛法は宇宙に充滿し天地に周遍して居る、此世も未來も佛の光に漏るゝの時は無い、此世界も佛の世界も佛の徳に蓋はれざる處は無い、この道理を正法眼藏には、「所謂世界は十方みな佛世界なり非佛世界未だあらざるなり」と示されたのである。法華經には、如來の室と衣と座との三が説いてある、如來とは佛の事ぢや、佛は大慈悲心の室に住し、柔和忍辱の衣を纏ひ、一切法空の座に坐し玉ふとある、是れ則ち三徳です、法空とは換言すれば無我の事ぢや。さすれば我等とても慈悲を以て心の住室となし、堪忍を以て心の衣となし、無我を以て心の座り場所となさば、此身此まゝが立派に佛様の資格を備へたのぢや。心に慈悲ある時は自から上を敬まひ下を憐れみ、進んでは忠孝の道を明らかにし退いては社會の公利公益に心力を注がずには居られぬ様になる、心に堪忍ある時は、能く諸の惡を制し、能く衆の善を修め、世の順逆の境に對して毫も心を亂さぬ様になる。心無我なる時は五欲六塵の

煩惱を截斷し、生死岸頭に臨んでも其動かざることを泰山の如くなる事が出来る、自覺覺他の功德も、治國安民の成績も皆な此の三徳を本とせねばなりませぬ。

### 五、禪心と禪機

禪門に於て見性とか大悟とか申しても、別に不思議な物體を外から探し出す事では無い、古人も「但だ凡情を盡せば別に聖解なし」といふた通り、顛倒妄想の迷を截斷して、自己の本心本性の現はれた境界に名づけたのぢや、故に承陽大師は、「佛法を習ふといふは自己を習ふなり、自己を習ふといふは自己を忘るゝなり、自己を忘るゝといふは萬法に證せらるゝなり」と仰せられてある。自己を習ふといふのは、自己本來の智徳を顯現する事です、自己を忘るゝといふのは、自分と他人との隔てを離れて平等無我の三昧に安住する事である。自他差別の相に迷はされざる事である。故に自己を忘れて眞實無我になり去る時は、一切萬法が悉く佛法の證悟となる、そこを萬法に證せらるゝなりと御示し下されたのぢや、常濟大師も「坐禪は人をして心地を開明し本分に安住せしむ」と仰せられてあつて、坐禪の端的善惡是非の分別を超脱すれば、此身も此心もソツクリ佛と同性なる智徳の一大光明

體となるのである。是が正しく禪の精神即ち禪心であります。果して能く此の禪心が現成すれば、他を視ること猶ほ己の如く、一切衆生に對しては常に同胞骨肉の如き觀念に住するを以て、他の善を見ては中心之を喜び他の惡を見ては中心之を憂ひ、他の苦惱を見てはどうしても之を救はずには居られぬ様になる、之を佛祖廣大の慈悲と稱するのであります。此の慈悲の妙用をば禪機とも名くる、禪機といへば禪家特得の機用で、棒を揮つて人を打つたり、一喝を下して人を叱り飛ばしたりすることのみの様に思ふ人もあらうが、決してそんなものではありませぬ。臨濟禪師が黃檗禪師に、「如何なるか是れ佛法的々の大意」と問ふた時、黃檗は何にも言はずに三十棒を與へた、ダガ臨濟は此の棒頭に依て眞實の佛法を大悟せられた。徳山禪師は僧の門に入り來るを見て、直ちに大喝一聲せられたとある。ダガ此の一喝の下に於て幾多の人を濟度せられたか知れぬ。古の佛祖が人を導き玉ふの手段は、恰も水の方圓の器に従うが如く、先方の相手次第ぢや、故に道林禪師の如きは、白樂天が「佛法の大意」を問ふに答へて、「諸の惡は作す莫れ、衆の善は修行せよ」と答へた。白樂天が之を聞いて、「そんな事ならば三歳兒でも知て居る」と詰りし時、「三歳兒でも知て居やうが、八十歳の老人でも實行が出来ぬぢや無いか」といふて流石の白樂天を心服せし



められた。斯く相手次第に或は嚴に或は緩に或は向上に或は向下に、千變萬化の御接得のあるは、皆な盡く本性の智徳が一段に大慈悲光明となつて發揚したるものにして、取りも直さず天地と其徳を同じうする大布施の行願であります。

### 六、最高の功德

先刻賛題として讀上げたるは、修證義第廿一節の布施行の一段であります、布施とはシキホドコスと訓じて、敬愛の誠を傾け、己れの力を傾ちて他に之を與ふるの意である、解り易くいへば、慈悲心運用の方法にして、禪機の發動です、故に施すといふても、目下の者にのみ對する行ひては無い、上に向つては敬愛ともなり供養ともなり、下に向つては慈悲ともなり救済ともなる。此の布施を分つて財施と法施との二つとしてある、財施とは物質を以て他に與ふる事です、乃ち病る者には藥を與へ、飢たるものには食を與ふるの類ぢや、更に進んでは君父に對するの供養、同胞に對するの待遇等、苟くも物質を以てするは、皆財施です、御茶一杯煙草盆一つでも真心を以て饗す時は總て財施ならざるは無い。次に法施とは、佛法を人に施す事許りて無く、總て他の知識を啓き、他の道徳を進むべきものは

盡く法施といふことが出来る、此外にモ一つ無畏施といふがある、無畏は畏れ無しといふのであるから、ツマリ安心といふ意味ぢや。然れば安心安樂を施すのが無畏施である、故に觀世音菩薩の事を施無畏者と稱するもの、菩薩は能く一切衆生を濟度して與ふるに安寧と幸福とを以てせらるゝからです。併し財施も法施も其目的は安心を與へんが爲めに外ならざるを以て、財法も法施も自づと無畏施の中に備つて居るのであります。此の布施行は前にも演べた通り本性に具有する慈悲心の作用であるから、布施行の源泉は「食らざるなりして、乃ち我愛我執の貪慾を解脱した無我無執の境界に存するのである。雲散すれば月自ら明らかなるが如く、我執貪愛の妄雲盡くる處に慈悲の光明は忽然として輝きを發するものぢや、此の慈悲の光明を發する時既に十方世界を攝取するの徳が備はるから、「我物に非ざれども布施を障へざる道理ありして、品物は客て精神が主ぢや、故に因果經には、「若し施すべき物なき時は他の施しを修行するを見て隨喜の心を生ぜよ、隨喜の功德は施しに異ならじ」と説いてある、是れ則ち精神的布施であるからぢや。さすれば心だに慈悲の念に住すれば、我物に非ずとも布施の功德を成ずる事が出来る、况んや「其物の輕さを嫌はず、金額の多少や品物の輕重は抑も末ぢや、唯だ「其功の實なるべきなり」て、布施

其物が他をして安樂ならしめ、他をして幸福ならしむる様に實地の功德あらん事を主眼とせねばならぬ、然れば則ち「一句一偈の法をも布施すべし此生佗生の善種となる、一口の教に依りて此生ばかりか未來永久の善果報を得せしむる事もある。須梨槃特尊者は僅かに「守口攝意身莫犯如是行者得度世」といへる半偈を釋尊より授かりて羅漢果を證せられ、大梅法常禪師は、馬祖大師より「即心即佛」の四字を戴いて一生參學の大事を了せられた。又財施の方から云ふても「一錢一草の財をも布施すべし、此世佗世の善根を兆す」で、聊かなる物品を施した爲め、此世は愚か佗世に至りてまでも大菩提の妙果を成する程の善根を兆す事もある。佛在世の時婆羅門城外に貧しき生活をして居りし一老婆は、漿水という薄粥の如き物を佛に供養し奉りしが、其眞實至誠の徳によりて、五百生の後辟支佛たるべしとの記莢を被つたぢや。又世の中には一服の薬を與へて危き生命を助け、些々たる資本を貸與して立身の基を樹て、やりし等の例は澤山ある、是の如き廣大なる布施の不行を廻らして、父母及び先祖等を供養するのが孟蘭盆の法會であります。願ふに天地日月は皆な布施の徳を現はして居る。天蓋ひ地載せ、日は晝を照らし、月は夜を照らし、水ありて萬物を濕ほし、風ありて新鮮の空氣を送り、草木依て以て繁茂し、人

類依て以て生育す、何と大なる布施ではありませんか。我等は此天地の布施の徳に育はれて活動して居るのである、故に我等も亦天地の徳に則りて孝順慈悲の心を發揚し、而して布施の大成を成就するのが實に我等人間の天職にして、是ぞ天地間最高の功德と申すのである。

七、孟蘭盆三昧

昔し一休禪師が紫野の如意菴に在せし頃、丁度七月の盆會の時、一信徒來りて禪師に見え、盆棚の設備なきを見て、禪師には何故に盆棚を設けて法會を勤められざるやと尋ねければ、禪師は笑つて、山僧は早くより盆棚に向て甘露の法門を開いて居るのに、御身には餘り盆棚が大きい過ぎて氣が付かぬと見へる、どれ、盆棚の説明をして聞かせやうとて、「山城の瓜や茄子をそのまゝに手向けにせよや鴨川の水」といふ歌を詠んで示されたのである。是れ即ち天地の大布施を御聞かせなされたのぢや。又菅原道真公は手向山八幡へ御參詣の折、「このたびはぬさも取りあはず手向山紅葉のにしき神のまに」と詠せられました。「ぬは」とは五色の細き絹ぎれて神に奉るものです、「まに」とは隨意で、御意まかせとい

ふこと。乃ち此度は俄かの參詣なれば、神様へ奉納すべき物としては用意して居りませぬが、唯だ私の腹の中には山々に錦なす紅葉の様な真赤な真心がありますれば願はくば此真心を御受納下されたしとの意味であります。是の如き至誠眞實の心より出たる供養こそ眞の供養である、又下を憐れむ方からいうても、菩薩には慈悲喜捨の四無量心が無ければ、眞の大布施は出来ぬ、慈とは他に樂を與ふること、悲とは他の苦しみを拔濟すること、喜とは他の幸福を得ることを我身之を得たるが如く喜ぶこと、捨とは布施を行ふも遂に其報酬を求むるの念なきこと。要するに此の四無量心も真心の一に歸するので、然るに近代の世の狀態は如何でありませう、總ての事柄が果して能く此の真心を存して居るであらうか、徒らに其聲のみを大にして萬事萬端が唯だ廣告的裝飾的に流れて居りはせまいか、生存競争の波は動もすれば國民の道義心をも翻弄して、弱肉強食の陋態を演ずる事も少なからぬ。文明世界の一面には暗黒の穢土を現する事は免るべからざる通弊とは申し乍ら、我等國民たる者は、努めて此の缺陷を補ひ、以て完全無缺なる御國とするの大奮發がなければなりません、而して社會の暗黒面を脱するには、國民の徳性を養ふことか其基礎です、徳性を養ふは真心を先きとせねばならぬ、真心を現はすの本は、信仰心に在ります、信仰なき人

は、本當に心の底を淨むる事が出来ぬものです。「目に見えぬ神にむかひて耻ぢざるは人の心のまことなりけり」とは畏れ多くも我が明治天皇様の御製である、目に見えぬ神や佛を本尊として、心の奥の其のまた奥に、一種の神聖なる畏敬の念と感謝の情とを有してこそ、始めて虚偽の無い真心が現はれるのであります。耳目の及ばざる所、實驗の届かざる所に敬ふべき神も信ずべき佛も無いといふやうな考へては、逆ても祖先の靈牌に對して神在ますが如きの觀念は起るものではない、堂々たる人物でも此の信仰を得る事能はずして、無神無靈魂杯といふ私見を主張するのである。此等の人々は、實に氣の毒千萬の者と謂はねばならぬ。故に我等は孟蘭盆法會を修するに當りても、能く法會の旨趣を心得て、此の時節因縁を好機として、益々報恩慈悲の志を勵まし、佛の心佛の行を此の身心に實現することが肝要ぢや。之を孟蘭盆の安心とも、孟蘭盆の三昧とも申すのであります。

參 考

●父母を供養すれば大功徳を獲大果報を成す、是の故に常に孝順の念に住して、父母を供養せよ。  
(阿含經)

●父母は三界の最勝福田なり。

(報恩經)

●若し其父母信なきものには信心を起さしめ、若し戒なきものには禁戒に住せしめ、若し慳なるものには惠施を行はしめ、若し智慧なきものには智慧を起さしむ、子能く是の如くなる之を報恩と云ふ。

(毘奈耶經)

●一切の男子は即ち是れ慈父、一切の女人は即ち是れ悲母生々の中大恩あり、現生父母の恩の如し。

(金光明經)

●地獄餓鬼畜生阿修羅佛菩薩何にならうとまゝな一念

●あたなから心に残る面影を煙とならぬすがたなりける

●面かげは千代に傳へて父母のありし教を思ひ放つな

●あふくべし我身の上のあつさより君と親との恩のあつさを

●澁かりし親の異見の枝柿の子をもちてこそ甘味をばしれ

●おそろしき地獄の底の鬼とてもおのが吹き出すものと知らずや

●尋ね入る深山の奥の里どもとわが住みなれし都なりけり

●佛はと問へば迷はぬものぞなきおのが心と知る人もかな

●たらちねの親の心は誰もみな年ふるまゝに思ひ知るらむ

●たらちねの親の心をなぐさめよ國に盡さんいとまある日は

●前になりうしろになりて難守るたづの心のあはれなるかな